



平成27年度採択文部科学省
「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」

わかやまの未来を切り拓く若者を育む“紀の国大学”の構築

平成27年度～平成29年度
中間事業成果報告書

平成30年3月

紀の国大学

No.1



No.2



No.3



No.4



No.5



No.6



No.7



NO.	写真の内容
1	九度山町での町歩きセミナー
2	和歌山市での空き家改修物件ツアー
3	企業×学生交流会
4	紀の川市でのみかん狩り・食味調査
5	田辺祭りでのお笠ひき
6	紀の川市の桃で大学夏祭り
7	中野BC株式会社でのコラボイベント

No.8



No.9



No.10



No.11



No.12



No.13



No.14

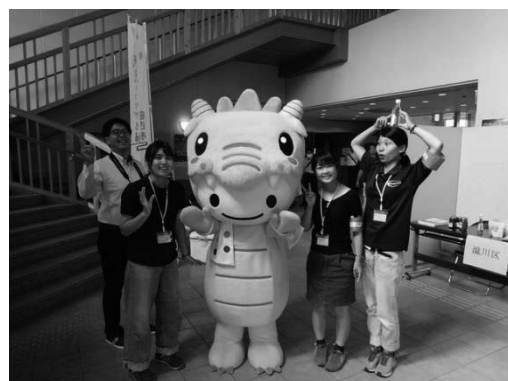


NO.	写真の内容
8	上富田町でのワークショップ
9	地域協働自主演習Ⅰの様子
10	地域資源を活用した流しそうめん
11	田辺市×学生の座談会
12	上富田町でのゴマの播種体験
13	田辺市中辺路町でのかかし作り体験
14	紀の川市での桃の販売

No.15



No.16



No.17



No.18



No.19



No.20



No.21



NO.	写真の内容
15	海南市での家庭用品祭りでの報告
16	和歌山県主催イベントでの運営補助
17	和歌山県産品商談会での商品お披露目
18	和歌山市グリーングリーンプロジェクト
19	橋本市でのへら竿づくりの体験
20	香村賞ビジネスプランコンテスト
21	かつらぎ町でのゲストハウス見学

No.22



No.23



No.24



No.25



No.26



No.27



No.28



NO.	写真の内容
22	九度山町での世界遺産周辺調査
23	観音山フルーツガーデン感謝祭
24	「たなべ大学」での出店前の決起集会
25	田辺市の秋津野ガルテン見学ツアー
26	和歌山市雑賀崎での漁村ツアー
27	紀美野町での地域の資源地図づくり
28	卒業生や若手創業者との座談会

は じ め に

平成 27 年度の文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に、和歌山大学を事業主体とした「わかやまの未来を切り拓く若者を育む“紀の国大学”の構築」が採択されました。

本事業では、和歌山県内の高等教育機関の力を結集するとともに、隣接する大阪府内の総合大学、及び和歌山県をはじめとする県内自治体、県内の企業・金融機関が協力して“紀の国大学”を構築し、地域の人々・企業・自治体を元気にする人材、地元で活躍できる人材の育成を目指しております。

平成 28 年 4 月にスタートいたしました“紀の国大学”では、和歌山県の施策である「和歌山県まち・ひと・しごと創生総合戦略」に対応させた、県の強みを活かす 4 つの教育テーマ（①6 次産業化②商品・技術開発③移住先進地の再興④命と生活のインフラ）を設定し、地元就職、雇用創出、定住人口の増加に寄与するための教育プログラム「わかやま未来学副専攻」を導入し、県下全域でフィールド型講義を展開する取り組みを行って参りました。

このたび、これらの取り組みにつきまして、平成 27 年度～平成 29 年度における COC+ 事業成果報告書を発刊することになりました。

“紀の国大学”の取り組みが皆様のご参考になれば幸いです。

COC+事業を進めるにあたり、地域の皆様の多大なるご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げますとともに、今後とも引き続きご支援・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



紀の国大学協議会 会長
和歌山大学 第 16 代学長

瀧 寛和

目次

1.事業概要.....	7
【1】文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の説明	7
【2】紀の国大学の事業概要	7
(1) 紀の国大学	7
(2) 実施体制	9
【3】紀の国大学実施年表	12
2.教育プログラム開発部門.....	14
【1】カリキュラム	14
(1) 紀の国大学認定制度～わかやま未来創造人～の創出	14
(2) わかやま未来学副専攻プログラム構成	15
【2】地域連携・創業支援	20
(1) インターンシップの取り組み実績	20
(2) 創業支援の取り組み	22
(3) 創業支援ファンド設立に向けた取り組み	25
3.事業評価・FD 部門	26
【1】事業評価	26
(1) 事業協働機関による内部評価	26
(2) 外部評価	27
【2】学生自主演習合同研修	28
4.紀の国大学シンポジウム.....	33
【1】プログラム	33
【2】基調講演講演者	34
【3】概要	35
【4】参加者アンケート結果	43
5.わかやま未来学副専攻に関するアンケート	45
【1】めざす人材像	45
【2】わかやま未来学副専攻ルーブリック	46
6. 紀の国大学参加校の取り組み.....	48
【1】参加校の教育プログラム	48
【2】平成 29 年度の取り組み	58
【3】平成 28 年度の取り組み	84

1.事業概要

【1】文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の説明

■目的

地域で活躍する人材の育成や大学を核とした地域産業の活性化、地方への人口集積等の観点からは、地方大学が果たす役割に、極めて大きな期待が寄せられている。

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」は、平成 25 年度からの「地域のための大学」として、各大学の強みを生かしつつ、大学の機能別分化を促進し、地域再生・活性化の拠点となる大学の形成に取り組んできた「地（知）の拠点整備事業（COC 事業）」を発展させた事業であり、地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先を創出・開拓するとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取り組みを支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的とする。

■事業実施者

文部科学省

■事業対象

国公立大学・高等専門学校及び関係団体

■事業期間

平成 27 年度から平成 31 年までの 5 年間

■採択

平成 27 年度は、各大学より 56 件の申請があり、42 件採択
（参画する大学は、延べ 256 校）

【2】紀の国大学の事業概要

（1）紀の国大学

■事業名

わかやまの未来を切り拓く若者を育む“紀の国大学”の構築

■事業実施機関

和歌山大学

■事業協働機関

参加大学	大阪市立大学・大阪府立大学・摂南大学 和歌山工業高等専門学校・和歌山信愛女子短期大学
参加自治体	和歌山県
参加企業等	紀陽銀行・和歌山県経営者協会 和歌山県中小企業団体中央会
協力大学	関西大学・近畿大学・和歌山県立医科大学

■目的

和歌山県の深刻な地域課題に向き合いつつ、秀逸な自然環境と文化資源を活かしながら、わかやまの未来を切り拓く若者を育むとともに、新たな雇用を創出し、地域への定着を図ることにより和歌山県域における地方創生に貢献することを目的とする。

■概要

事業実施のために和歌山県全域をキャンパスとするネットワーク大学「紀の国大学」を、県内大学・高専と大阪府内のCOC採択の総合大学及び和歌山県、県内企業等の参画を得て構築する。地域の力を借りて地域の課題に即した実践的なキャリア教育プログラム（協働教育）を紀の国大学として展開する。和歌山県まち・ひと・しごと創生総合戦略から、大学が貢献できる4つのテーマ：**6次産業化／商品・技術開発／移住先進地の再興／命と生活のインフラ**を柱に定め、教育プログラムを構築する。また、4つのテーマを**ブランディング**が貫く。いずれのテーマにおいても顧客の求める価値を高めることを意識しつつ実践的な教育を体験することで**地元就職増**を果たし、協力する企業等が成長することで雇用創出増を生み、地域の魅力が高まることで移住者も増加し、次第に**定住人口増**に至る。

そのために、和歌山大学では、地域と協働で実践力を鍛える地域協働自主演習及び就職を意識した実践型インターンシップからなる全学共通の副専攻制度である「**わかやま未来学副専攻**」を新設し、1年次より地域を体験する学修を行うとともに、社会人の県内へのUターン・Iターンに資するため、再チャレンジコース「**わかやま未来塾**」を新設する（将来）。また、和歌山大学から郷土を見つめ郷土への愛着を育む「わかやま」学群を事業協働機関の各大学・高専（以下、COC+参加校）に提供する。さらに、和歌山大学及びCOC+参加校間で県内各地のフィールドを互いに開放し共同教育を行うことで、地域での学生の活動を拡大する。この事業全体を支える組織として「紀の国大学協議会」を設立し、COC+推進コーディネータの下で運営管理するとともに、その成果を県内に広く伝えることが本事業の目的である。

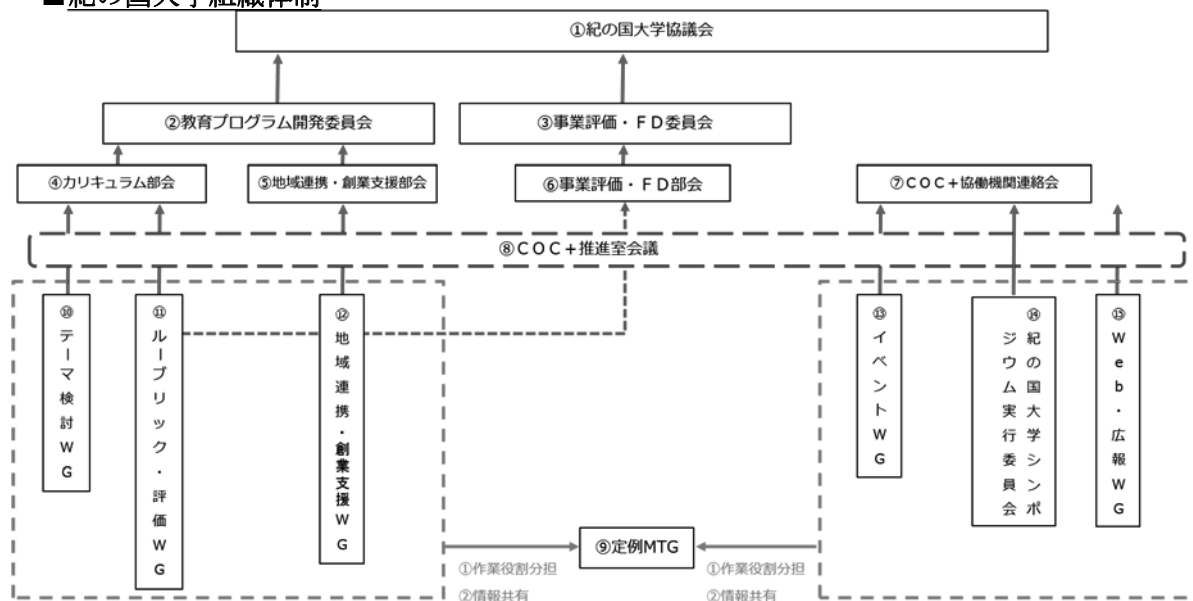
(2) 実施体制

①地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）の連携体制



②紀の国大学の実施体制

■紀の国大学組織体制



1.紀の国大学協議会

紀の国大学協議会は、和歌山県における地方創生に関して、雇用創出・若者定着に係る事業を推進することにより、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展を実現するため、必要な事項について協議することを目的とする。

(協議事項)

- (1) 地域を担う人材育成に関すること。
- (2) 学生の県内定着率の向上に関すること。
- (3) 地域の雇用創出に関すること。
- (4) その他、地方創生の実現に関すること。

2.教育プログラム開発委員会

(審議事項)

- (1) 地域を担う人材を育成するための教育プログラムの開発に関すること。
- (2) 地域と連携した雇用創出及び学生の創業支援に関すること。
- (3) その他、地方創生のための教育プログラムの開発に関すること。

3.事業評価・FD委員会

(審議事項)

- (1) 紀の国大学協議会が実施する事業の評価に関すること。
- (2) 紀の国大学協議会の開発した教育プログラムに係るファカルティ・デベロップメントに関すること。
- (3) その他、紀の国大学協議会の評価及びファカルティ・デベロップメントに関すること。

- 4.カリキュラム部会
- 5.地域連携・創業支援部会
- 6.事業評価・FD 部会

■和歌山大学（紀の国大学事務局組織体制）

- 7.COC+協働機関連絡会
- 8.COC+推進室会議
- 9.定例 MTG
- 10. テーマ検討 WG
- 11. ルーブリック・評価 WG
- 12. 地域連携・創業支援 WG
- 13. イベント WG
- 14.紀の国大学シンポジウム実行委員会
- 15. Web・広報 WG

【3】紀の国大学実施年表

開催年月日	活動内容
2015年度（H27年度）	
2015.10.15	COC+合同会議
2015.11.26	COC+合同会議
2015.12.24	第一回 紀の国大学協議会
2015.12.24	COC+合同会議
2016.01.29	第一回 教育プログラム開発委員会
2016.01.29	第一回 カリキュラム部会
2016.03.08	第一回 事業評価・FD委員会
2016.03.08	第一回 事業評価・FD専門部会
2016.03.15	第二回 事業評価・FD委員会（書面審議）
2016.03.29	COC+合同会議

開催年月日	活動内容
2016年度（H28年度）	
2016.04.28	第二回 紀の国大学協議会
2016.04.28	紀の国大学ホームページ開設
2016.06.03	第一回 教育プログラム開発委員会（書面審議）
2016.06.07	第一回 事業評価・FD委員会
2016.06.13	第二回 教育プログラム開発委員会（書面審議）
2016.06.28	紀の国大学におけるCOC+事業の取り組み説明会
2016.07.24	田辺祭りに参加（田辺市）
2016.08.23	第一回 COC+合同FD研修会
2016.09.14	第二回 COC+合同FD研修会
2016.09.23	第三回 COC+合同FD研修会
2016.10.12	わかやま未来学副専攻説明会
2016.10.04	地域協働セミナー開講（わかやま未来学副専攻1年次後期科目）
2016.10.05	わかやま未来学副専攻「地方都市のまちなか再生プロジェクト」スタートアップセミナー&大阪市立大学「地域実践演習（GATSUN）Ⅲ」合同演習（和歌山市）
2016.11.05	わかやま未来学副専攻「6次産業化実践プロジェクト」スタートアップセミナー（紀の川市）
2016.11.16	ワダイノカフェ～「地元」を選ぶ理由とは～開催
2016.11.20	大阪市立大学「地域実践演習（GATSUN）Ⅱ」防災フィールドワーク（御坊市）
2016.11.23	わかやま未来学副専攻「地域資源を生かした生業づくりとまちづくりプロジェクト」スタートアップセミナー（九度山町）
2016.12.06	第三回 教育プログラム開発委員会
2016.12.17	高野山麓はしもとインターカレッジ・コンペティション2016公開プレゼンテーション（橋本市）
2016.12.19	ワダイ夢活フォーラム～町に「新しい価値」をうみだす：わかやま県内の地域活性化プロデュース事例～開催
2017.02.17	わかやま未来学副専攻「家庭用品イノベーションプロジェクト」スタートアップセミナー&大阪市立大学「地域実践演習（GATSUN）Ⅰ」合同演習（海南市・堺市）
2017.02.16	「経営者」×「大学生」大交流会（和歌山市）
2017.03.07	第一回 事業評価・FD委員会
2017.03.07	第一回 事業評価・FD専門部会
2017.3.29	COC+合同会議

開催年月日	活動内容
2017年度（H29年度）	
2017.04.13	わかやま未来学副専攻説明会
2017.04.13	地域協働自主演習Ⅰ開講（わかやま未来学副専攻2年次前期科目）
2017.04.13	地域創業論開講（わかやま未来学副専攻2年次前期科目）
2017.04.27	第三回 紀の国大学協議会
2017.04.27	COC+協働機関連絡会（※1）
2017.06.06	中野BC株式会社とのコラボイベント開催（海南市）
2017.06.15	観音山フルーツガーデン社内コンペで副専攻受講学生が受賞（紀の川市）
2017.06.18	上富田町市ノ瀬地区での地域づくり活動開始（上富田町）
2017.06.28	COC+協働機関連絡会
2017.06.30	大阪市立大学「アゴラセミナーⅠa」地域福利の分野実習（新宮市）
2017.07.02	田辺市中辺路町温川地区での地域づくり活動開始（田辺市）
2017.07.03	第一回 事業評価・FD委員会（書面審議）
2017.07.08	大阪市立大学「地域実践演習（GATSUN）Ⅱ」防災フィールドワーク（御坊）
2017.07.08	共栄選果場での桃販売イベント開始（紀の川市）
2017.07.16	卒業生のUターン起業の掘り起こしイベント「U-35Cafe」
2017.07.24	第8回香村賞ビジネスプランコンテストにわかやま創生プラン部門創設・募集開
2017.07.24	田辺祭りに参加（田辺市）
2017.08.09	和歌山大学と大阪府立大学の協働講義「文化資源と地域再生（アゴラセミナー
2017.08.21	小学生とベンチ作り体験（和歌山市）
2017.08.22	第一回 COC+合同FD研修会
2017.08.25	わかやまの棚田・段々畑サミットに参加（田辺市）
2017.09.01	たなべ大学開講
2017.09.18	市駅「グリーングリーン」プロジェクトに参加しました（和歌山市）
2017.09.27	第一回 教育プログラム開発委員会
2017.09.27	COC+協働機関連絡会
2017.09.29	第二回 COC+合同FD研修会
2017.10.05	地域協働自主演習Ⅱ開講（わかやま未来学副専攻2年次後期科目）
2017.10.07	田辺祭りにおける学生演習の報告会（田辺市）
2017.10.11	外部評価報告書のホームページ公開
2017.10.30	第8回香村賞ビジネスプランコンテスト発表会
2017.11.04	「家庭用品イノベーションプロジェクト」成果発表会（海南市）
2017.11.09	田辺市長による特別講座
2017.11.10	『ワカヤマコラボ2017』（高等教育機関と地域の協働による地域活性化事例
2017.11.11	「地域資源を生かした生業づくりとまちづくりプロジェクト」の現地実習開始
2017.11.13	創業支援キックオフセミナー開催
2017.11.20	「6次産業化実践プロジェクト」の現地実習開始（田辺市、紀の川市）
2017.11.28	紀の国大学シンポジウム
2017.12.08	「自立・地域共生推進～地方で新しい事業づくり～プロジェクト」の現地実習
2017.12.11	ワダイ夢活フォーラム～和歌山の地域課題をビジネスで解決、大学生・教員・職員と地域でできること～開催
2017.12.16	高野山麓はしもとインターカレッジ・コンペティション2017公開プレゼンター
2017.12.17	「地域づくり戦略構想プロジェクト」の現地実習開始（紀美野町）
2017.12.18	COC+協働機関連絡会
2017.12.23	「地方都市のまちなか再生プロジェクト」で南海電鉄株式会社と協働でモニターツアー実施（和歌山市）
2018.01.20	田辺・龍神村での地域づくりの現地見学バスツアー開催（田辺市）
2018.01.20	「宿泊業を中心とした着地方観光ビジネス」の見学会実施（紀の川市、かつら
2018.01.20	「6次産業化実践プロジェクト」でわかやま産品商談会in大阪に参加（大阪市）
2018.02.17	「地方都市のまちなか再生プロジェクト」で成果発表会（和歌山市）
2018.02.20	第二回 教育プログラム開発委員会
2018.03.06	紀の国大学合同成果発表会
2018.03.24	「6次産業化実践プロジェクト」でふる博2に参加（紀の川市）
2018.03.28	COC+協働機関連絡会

※1 COC+合同会議は2017年度（平成29年度）よりCOC+協働機関連絡会へ名称変更

2.教育プログラム開発部門

【1】カリキュラム

(1) 紀の国大学認定制度～わかやま未来創造人～の創出

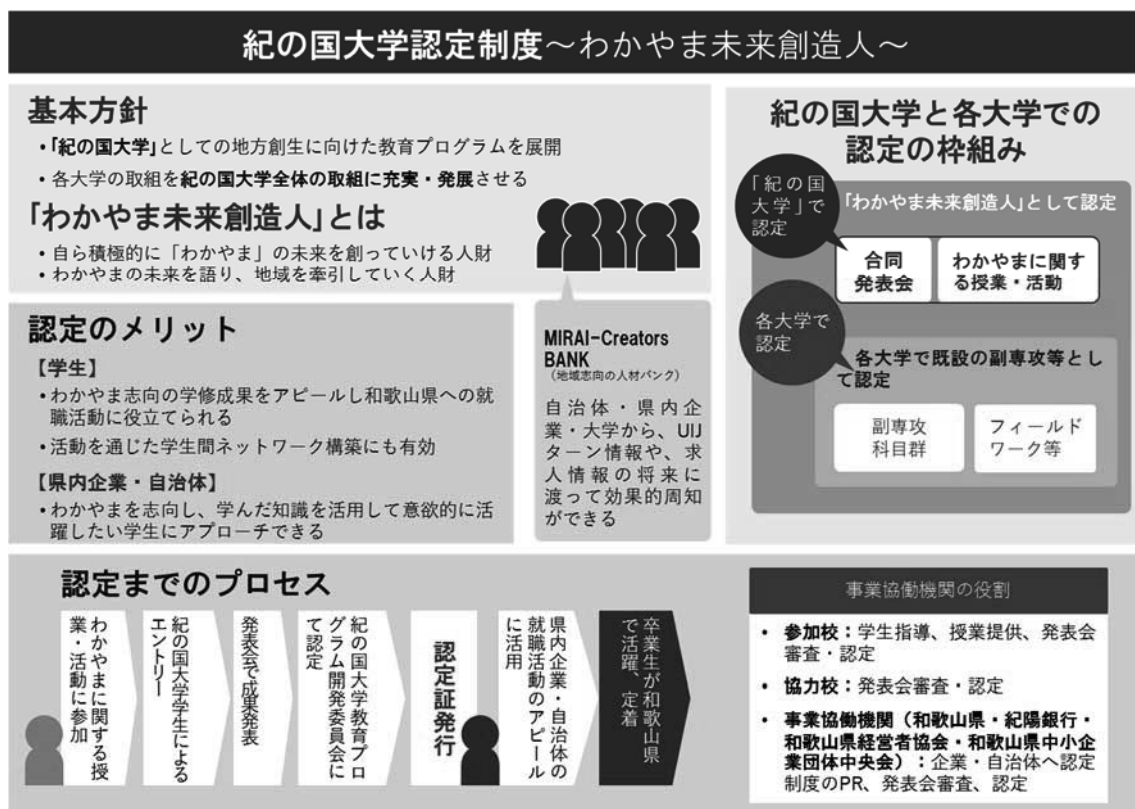
わかやま未来創造人

■目的

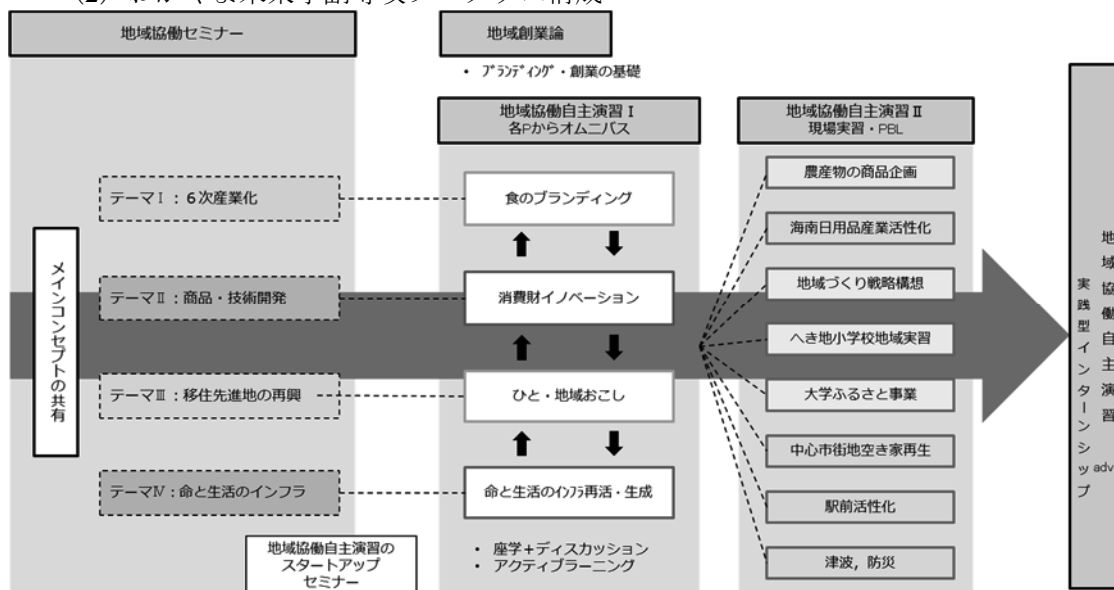
自ら積極的に「わかやま」の未来を創っていける人財および「わかやま」の未来を語り、地域を牽引していく人財を育成し、「わかやま」の地方創生に貢献することを目的とし、紀の国大学の認定制度を設ける。

認定制度要項（案）、エントリー基準および審査基準（案）を整えた。

（次回、紀の国大学協議会承認予定である。）



(2) わかやま未来学副専攻プログラム構成



①地域協働セミナー（1年生後期）

【概要】

わかやま未来学副専攻の導入科目として、和歌山県の「しごと」「ひと」「まち」に関する概要を知る講義。和歌山県の地方都市・地域社会が抱える多様かつ複合的な課題を理解し、その解決に取り組むための基礎知識を学ぶ。副専攻の4つのテーマ「6次産業化」「商品・技術開発」「移住先進地の再興」「命と生活のインフラ」に沿って、それぞれの課題に取り組む様々な立場の方（ゲストスピーカー）から生の話を聞く。現状と課題、そして今後の可能性を学び、それらに自らがいかに関与していくことができるかを考える。

【受講状況】

・受講者数

(学部別)	平成28年度		平成29年度	
	人数	比率	人数	比率
教育学部	14	5.2%	13	3.6%
経済学部	63	23.3%	110	30.5%
システム工学部	129	47.8%	149	41.3%
観光学部	64	23.7%	89	24.7%
合計	270	100.0%	361	100.0%

・単位取得人数

(学部別)	平成28年度		平成29年度	
	人数	取得率	人数	取得率
教育学部	13	92.9%	11	84.6%
経済学部	56	88.9%	102	92.7%
システム工学部	118	91.5%	125	83.9%
観光学部	63	98.4%	79	88.8%
合計	250	371.7%	317	87.8%

(学年別)	平成28年度		平成29年度	
	人数	比率	人数	比率
1年生	236	87.4%	324	89.8%
2年生	19	7.0%	25	6.9%
3年生	4	1.5%	4	1.1%
4年生	11	4.1%	8	2.2%
合計	270	100.0%	361	100.0%

(学年別)	平成28年度		平成29年度	
	人数	取得率	人数	取得率
1年生	225	95.3%	296	91.4%
2年生	19	100.0%	16	64.0%
3年生	3	75.0%	2	50.0%
4年生	3	27.3%	3	37.5%
合計	250	92.6%	317	87.8%

【授業内容】

平成 29 年度

回	テーマ	講師（実務家教員）
1	オリエンテーション	
2	郷土愛と地域を支える人材育成	
3	地方創生と和歌山県の課題	今井善人 (和歌山県 企画総務課 課長補佐)
4	地場産業をプロデュースする一家庭用品産業とその振興	角谷太基 (株式会社サンコー 代表取締役)
5	地場産業をプロデュースする一家庭用品メーカーの奮闘	高田大輔 (株式会社コーゾー 高田耕造商店 専務取締役)
6	農の可能性を拓くー和歌山県の農林水産業と 6 次産業化	立石 修 (和歌山県農林水産総務課 副課長)
7	農で地域をつなぐー観音山フルーツガーデン	児玉典男 (有限会社柑香園 代表取締役会長)
8	地方への移住にについて考える	高柳沙月 (株式会社あがらと)
9	中間振り返り	
10	中心市街地を再生するーリノベーションによるまちづくり	松下 誠 (一般社団法人ミチル空間プロジェクト 理事長)
11	まちなか公共空間を再生するー公民連携のまちづくり	鈴木 豪 (和歌山市産業まちづくり局 都市計画部 部長)
12	九度山町における文化財を生かしたまちづくり	山本新平 (九度山町教育委員会 専門調査員)
13	わかやまで暮らすー「田舎暮らし応援県わかやま」	原田武男 (和歌山県企画部地域振興局 局長)
14	和歌山で起業するー創業事例と支援の取組	北野暢哉 (紀陽銀行 地域振興部 地域活性化室 室長)
15	全体の振り返り	



グループワークの様子（テーマ：あなたが和歌山県知事になったら？）

②地域協働自主演習Ⅰ（2年生前期）

【概要】

わかやま未来学副専攻科目として、和歌山県の各地域が抱える課題を事例としたグループワークを中心とする講義で、平成29年度から開講した。和歌山県の地方都市・地域社会が抱える多様かつ複合的な課題を理解し、その解決策を自分たちの知恵をつかって提案する。副専攻では、4つのテーマ「6次産業化」「商品・技術開発」「移住先進地の再興」「命と生活のインフラ」を含む事例を取りあげる。地域で課題に取り組む様々な立場の方（ゲストスピーカー）からお話を聞き、現状と課題、そして今後の可能性を具体的に考えて提案する。グループワークは3回を1セットとして行い、講義を通じて4つの事例に取り組む。

【受講状況】

・受講者数

	平成29年度	
	人数	比率
教育学部	0	-
経済学部	14	31.1%
システム工学部	7	15.6%
観光学部	24	53.3%
合計	45	100.0%

・単位取得人数

	平成29年度	
	人数	取得率
教育学部	0	-
経済学部	14	100.0%
システム工学部	7	100.0%
観光学部	24	100.0%
合計	45	100.0%

【授業内容】

回	テーマ
1	オリエンテーション
2	グループワークの基礎
3	「いちじくを使ったお土産商品企画」 について現状分析
4	「いちじくを使ったお土産商品企画」 について課題検討
5	「いちじくを使ったお土産商品企画」 について解決策提案
6	「シュロを使った学生生活で使える商品企画」 について現状分析
7	「シュロを使った学生生活で使える商品企画」 について課題検討
8	「シュロを使った学生生活で使える商品企画」 について解決策提案
9	「和歌山大学のキャンパスをもっと魅力的にするためには」 について現状分析
10	「和歌山大学のキャンパスをもっと魅力的にするためには」 について課題検討
11	「和歌山大学のキャンパスをもっと魅力的にするためには」 について解決策提案
12	「紀ノ川流域の魅力と繋がりを生かしたプロモーションを考える」 について現状分析
13	「紀ノ川流域の魅力と繋がりを生かしたプロモーションを考える」 について課題検討
14	「紀ノ川流域の魅力と繋がりを生かしたプロモーションを考える」 について解決策提案
15	全体の振り返り



グループワークの様子（テーマ：和歌山大学のキャンパスをもっと良くするためには）

③地域協働自主演習Ⅱ（2年生後期）

【概要】

わかやま未来学副専攻科目として、和歌山県の各地域が抱える課題を対象としたフィールドワークを中心とする授業で、平成29年度から開講した。副専攻の4つのテーマ「6次産業化」「商品・技術開発」「移住先進地の再興」「命と生活のインフラ」に基づいて提供される複数のプロジェクトから一つを選択し、それぞれの地域（分野）において、課題発見から解決策を見いだすまでの一連のプロセスを実践的に学ぶ演習科目である。

【受講状況】

・受講者数

	平成29年度	
	人数	割合
教育学部	0	-
経済学部	13	32.5%
システム工学部	7	17.5%
観光学部	20	50.0%
合計	40	100.0%

・単位取得人数

	平成29年度	
	人数	割合
教育学部	0	-
経済学部	12	92.3%
システム工学部	6	85.7%
観光学部	20	100.0%
合計	38	95.0%

【プロジェクト】

プロジェクト名	実施地域	担当教員	受講者数
6次産業化実践	紀の川市 田辺市	木村亮介（クロスカル教育機構教養・協働教育部門講師）	9人
家庭用品イノベーション	海南市	藤田和史（経済学部准教授）	2人
地域づくり戦略構想	紀美野町	大浦由美（観光学部教授）	3人
自立・地域共生推進 ～地方で新しい事業づくり～	新宮市 白浜町 すさみ町	西川一弘（クロスカル教育機構生涯学習部門准教授）	5人
地域資源を生かした生業づくりとまちづくり	九度山町	宮川智子（システム工学部教授）	6人
地方都市のまちなか再生	和歌山市	永瀬節治（観光学部准教授）	12人
宿泊業を中心とした着地型観光ビジネス	かつらぎ町	木村亮介（クロスカル教育機構教養・協働教育部門講師）	3人

【2】地域連携・創業支援

(1) インターンシップの取り組み実績

①和歌山県経営者協会を通じた和歌山県内企業・団体へのインターンシップ参加学生数

学校名	H25	H26	H27	H28	H29	合計
和歌山大学	87	54	63	48	59	311
和歌山信愛女子短期大学	30	38	35	49	48	200
和歌山工業高等専門学校	71	46	57	56	37	267
大阪市立大学	3	1	3	4	1	12
大阪府立大学	2	1	1	3	2	9
摂南大学	0	0	1	1	1	3
合計	193	140	160	161	148	802

②実践型インターンシップ（和歌山大学）

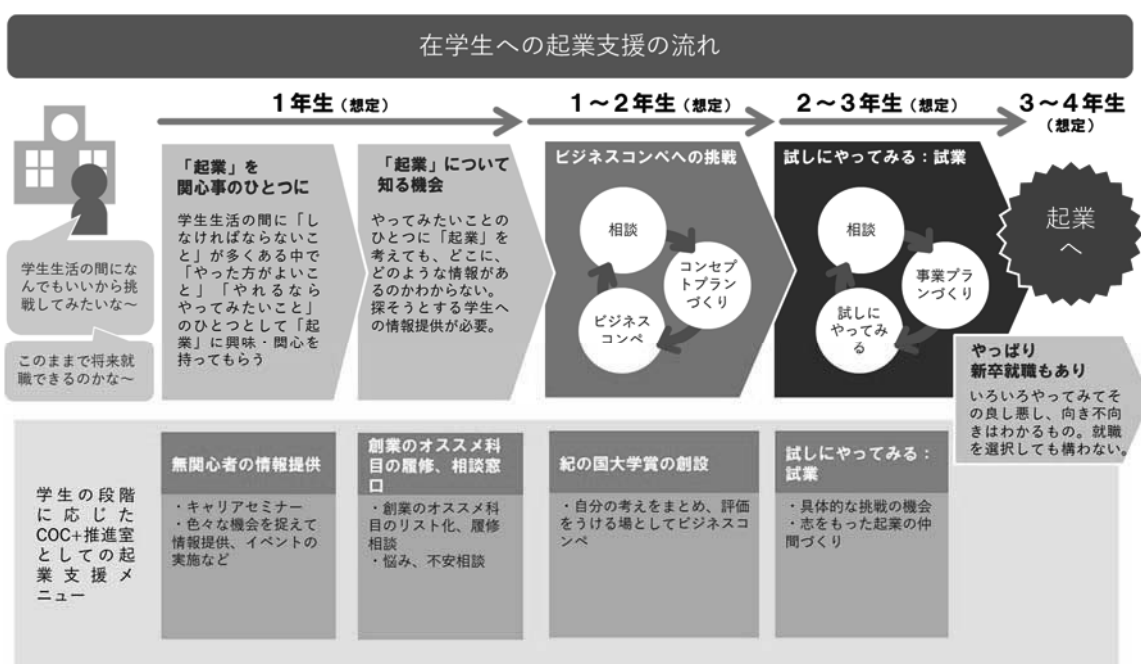
No.	実習先名	実習テーマ
1	農業法人株式会社秋津野 (都市と農村の交流施設 秋津野ガルテン)	『援農からはじまる都市農村交流』 グリーンツーリズム施設（秋津野ガルテン）を拠点に他大学の学生と共に滞在し、地域内の農家に出向き農作業（援農）することで、農家と交流しながら農村の現状と農業の現場について学ぶ。
2	紀ノ川農業協同組合	農業の担い手不足問題に取り組む 都市住民と地域がつながる機会をつくる
3	株式会社 sasquatch (サスカッチ)	①イベント運営（kisssh-Kisssssh 映画祭など） ②まちづくり業務 ③新しいコンテンツづくり
4	特定非営利活動法人 ジョイ・コム	[障害福祉現場] とことわ（wakayama*chocolat toco*towa） 就労支援サービスの提供と事業運営に関わる
5	株式会社早和果樹園	～川上から川下まで～ 6次産業を体感しよう！
6	株式会社たがみ (海の家 バルデガハマ)	南国ビーチで 海の家を運営する！
7	株式会社たがみ (熊野米)	地域の食材をブランディングする「熊野米」プロデュース
8	田原学園	「人」とのつながりの大切さを知る。
9	株式会社たまゆらの里	アウトドア宿泊リゾートの日帰り客増加策企画
10	株式会社とち亀物産	古民家再生による民泊事業 を立ち上げる！

11	菱岡工業株式会社	製造現場の改善活動（課題発見～解決）
12	和歌山県美浜町役場 （防災企画課、商工会）	【中期】美浜町の吉原運動公園で多世代交流拠点の仕組みづくりを考えよう！ 【長期】多世代交流拠点のアイデアを美浜町で実践しよう！
13	株式会社むさし （取材）	Work×Life 白浜シリーズ 第2弾「旅館むさしの人々（町外住）」取材・制作プロジェクト
14	株式会社むさし （企画）	学生による学生のための宿泊プラン企画
15	めらリサイクル株式会社	環境リサイクルビジネスの最前線を初公開！ ～自分の得意分野と新たな可能性を発見！～
16	櫻池院	外国人客が訪れる宿坊の宿泊業務を通じて学ぶ 【日本文化・旅館経営・英語コミュニケーション】
17	株式会社吉田 （和歌山麦酒醸造所三代目）	和歌山市初の地ビールブランドで 和歌山らしい新たなビールを開発し、発信する
18	株式会社リゾート大島	アウトドアリゾートの運営と和歌山観光の潜在能力
19	ワコン株式会社	日本の技術を世界へ伝える新商品の開発 （免振パッケージ）
20	ワコン株式会社	日本の技術を世界へ伝える新商品 （クリーンルーム専用物流機器）のマーケティング・営業実践
21	株式会社わたらせ温泉	SNS 活用等による販売促進、マーケティング企画・実践
22	4D センサー株式会社	和大発の Global Tech Startup でインターン
23	伊藤農園	made in WAKAYAMA の商品を世界へ広げよう！
24	有限会社あんちゃん	お客様、旅行会社に受け入れられる日帰り旅行、料理、お土産を企画し、現在の観光業の実状と課題の研究

(2) 創業支援の取り組み

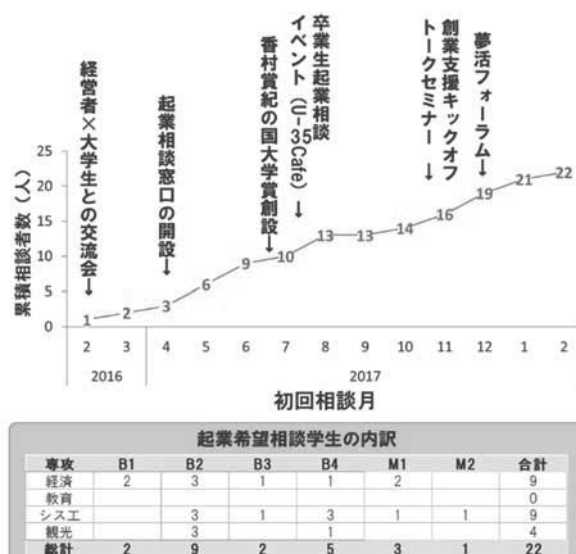
①在学学生への起業支援の概要

本学 COC+事業では事業協働機関雇用創出数 10 人を目標としている。このため平成 29 年度より、「和歌山大学在学学生への起業支援」を試行している。平成 29 年 4 月から、在学中の起業希望の学生、あるいは卒業後の進路のひとつとして起業を希望する学生（以下、「起業希望学生」という）に対して、相談をうける「学生の起業・創業相談窓口」を COC+推進室内に設置した。そこでの支援内容については、起業希望学生への聞き取り調査を行いながら、実効性・有効性のある支援メニューを構築し、平成年度に本格化・制度化をめざしている。



②起業支援の実績

希望起業学生は、平成 28 年 2 月～平成 30 年 2 月末までに 22 名となっている。この学部・学年（大学院生含む）の内訳として、経済学部 9 名、システム工学部 9 名、観光学部 4 名であり、全学部通して学部 2 年生が 9 名と最も多くなっている。起業希望学生数の推移として、初回相談月ごとの累積数は後述の各種イベントによって徐々に増加してきたことがわかる。



③起業希望学生の特徴

平成 29 年 4 月に「学生の起業・創業相談窓口」を設置して以降、起業希望学生からの相談内容や意向を聞き取り調査する過程で、以下の 4 点の特徴がみられた。

a) 起業の相談自体への躊躇

創業支援担当コーディネーターと面識のある学生であっても、「起業を決心していない段階で相談するとよくない、どう説明したらいいかわからない」といった理由で相談までに約 1 年かかった。これ以外にも、自身のプランを打ち明けることへの躊躇があった。

b) 事業内容の不明瞭な「何かに挑戦したい」願望

明確な事業内容が決まっている学生は数名と少なく、むしろ卒業後の進路として「起業したい」学生や「在学中に事業に挑戦したいが、テーマは特に決めていない」学生が多い。

c) 事業形態として小規模事業、自営業、フリーランス

卒業の生き方（働き方）として起業を捉えている学生が多く、事業形態として法人登記を目指す学生は数名で、従業員数名の小規模事業、自営業・フリーランスといった個人事業主を目指す学生が多い。

d) 起業希望の時期

在学中や新卒直後の起業を目指す学生は数名であり、ほとんどが自身の社会人基礎スキルやマナーを身につける、社会でのルールや人脈形成のために一旦就職して卒業 3～5 年後の起業を希望する学生が多い。

④在学生への起業支援の取組

在学生に向けた起業支援の具体的な取組は「登竜門としてのビジネスコンペの充実化」と、「潜在化している起業希望学生の掘り起こし」の 2 つである。

a) 登竜門としてのビジネスコンペの充実化

平成 29 年 7 月から募集開始した第 8 回香村賞ビジネスコンテストでは、将来的に和歌山県内での新規ビジネスの創発を目指して「紀の国大学賞」を新設した。この部門の特徴は、紀の国大学参加校・協力校の学生が和歌山大学生と連携して合同チームを結成すれば申請できる点、さらに和歌山大学卒業にも門戸を広げた点にある。（詳細は本報告書「ビジネスプランコンテスト『わかやま創生プラン』部門の創設」、P.65 を参照）

b) 潜在化している起業希望学生の掘り起こし

■創業支援キックオフトークセミナー

- ・テーマ ハテナな未来を考える
- ・日 時 平成 29 年 11 月 13 日 15-17 時、交流会 17～18 時半
- ・会 場 図書館 1F Café Pitter-Pattee

- ・参加者 学内外から約 40 名（出入自由のため）
- ・ゲスト CoffeeStand 納屋 店長 庄司 颯氏
 ゲストハウス ogawa-ya 後 亜沙美氏
 シェアキッチン PLUG（現 本屋プラグ）長戸 千紘氏
 和歌山大学観光学部 4 年生 和田 真奈美氏

■ワダイ夢活フォーラム

- ・テーマ Social Business：和歌山の地域課題をビジネスで解決、
 大学生・教員・職員と地域でできこと
- ・日 時 平成 29 年 12 月 11 日 15-16 時
- ・会 場 G-203 教室
- ・参加者 53 名（教職員 34 名、学生 14 名、一般 5 名）
- ・ゲスト 細井 孝哲氏／株式会社カワ 工場長 町山 恵留夫氏
- ・G-203 教室

⑤卒業生への起業支援の潜在的ニーズ

起業希望学生の特徴として、卒業 3～5 年後の起業を考えている学生が多かった。このため、卒業後 10 年以内で一旦、都会で就職したが様々な理由から和歌山へ U ターン起業した既卒生を招いて、トークセミナーを実施した。

既卒生の中で、起業支援の対象者となる在学生／卒業生には 3 つのステージと 2 つの悩みがあった。「起業」といってもステージによって、事業性への不安とキャリアや生き方の不安の中身に違いがあった。また、それぞれのステージが揃った、あるいは同じ目線で相談する機会がないというニーズも見出された。

■和歌山大学生の卒業後のキャリア・カフェ U-35 Cafe

- ・テーマ 和歌山大学卒業後 10 年程度で和歌山県内での（将来的な）起業
- ・日 時 平成 29 年 7 月 16 日 16-18 時
- ・会 場 図書館 1F Café Pitter-Pattee
- ・参加者 17 名
- ・ゲスト ライフ&キャリアオフィス 代表 澤田 淳氏
 税理士法人 川邑・中 合同会計事務所 代表社員 中 慎之介氏

U-35 Café で得られた意見のまとめ

	ビジネスプラン（事業計画）	キャリアデザイン（人生設計）
起業を悩んでいる人	・何をやりたいのか決めきれない ・本当にやりたいことなのか分からない	・勇気がでない ・一生やってく自信がない ・将来のパートナーとの関係
起業を決心した人	・これで本当に儲かるのか ・何から準備すればいいのか	・今の仕事やめるのか ・どこで、誰とやるのか
起業した人 （特に立ち上げ初期）	・事業拡大をするためにはどうすれば ・ブラッシュアップをしたい	・同世代、同業者とのつながり ・やるしかないけど、不安もある

⑥今後の取組について

潜在的な起業希望学生の推定するために、平成 29 年 7 月に「わかやま」学群受講生のうち 1 年生 515 名に将来の進路についてアンケート調査を実施した。その結果、将来起業希望者 17 名があり、学部ごとには経済学部が 9 名（2.8%）、システム工学部 6 名（1.9%）、観光学部が 2 名（1.6%）と約 2%であった。潜在的な起業希望者としてこれら 3 学部の全学年（3,284 名）の 2%として 65.7 名が推定された。現在の相談学生 22 名の約 3 倍に相当する。したがって、今後も継続した起業希望学生の掘り起こしが必要といえる。

また、COC+事業の持続的な継続のために、平成 30 年 1 月に和生大生起業チーム（仮称）を立ち上げた。これは 22 名の学生から有志学生による自主勉強会であり、今後自立的・主体的・相互支援を行えるよう支援していく必要がある。

（3）創業支援ファンド設立に向けた取り組み

■和歌山大学のベンチャー起業実績

形態	企業名	設立年月日			主な製品、サービス
		年	月	日	
株式会社	株式会社あっと楽けあネットワーク	平成15	12	12	介護関連の事業者を「楽けあネットワークシステム」で結ぶことによって事務作業を軽減するサービス
株式会社	株式会社BEE	平成16	7	7	WEBサイトの企画・制作、WEBサイトリニューアル、WEB標準準拠サービス、FLASHコンテンツ制作、ビジネスブログ制作、CD/DVD制作
有限会社	有限会社アットフリース	平成17	9	21	ネット無料コンテンツ(wiki) 配信サービス
株式会社	NUシステム株式会社	平成18	1	10	有害物質の光を使った計測装置の製造・販売
株式会社	和創技研株式会社	平成19	10	19	電子機器の開発及び製作
株式会社	4Dセンサー株式会社	平成24	2	1	計測機器の販売・開発・計測サービス。製品、サービス向上のためのコンサルティング業務
株式会社	パワーアシストインターナショナル株式会社	平成27	3	11	パワーアシスト機器の開発、設計、製造、リース、レンタル、販売、保守管理

3.事業評価・FD 部門

【1】事業評価

(1) 事業協働機関による内部評価

■平成 28 年度地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）における大学以外の事業協働機関による事業への聞き取り調査の実施結果について

日時：平成 29 年 3 月 7 日（火）15：30～16：00

場所：和歌山大学経済学部 第 3 会議室

出席：紀陽銀行（地域活性化室）、和歌山県中小企業団体中央会
和歌山県（文化学術課）

欠席：和歌山県経営者協会

実施方法：

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）における大学以外の事業協働機関による事業への聞き取り調査実施要領」に基づき、COC+コーディネーター（総括）等が実施した。

実施内容：

・事業への満足度調査

事業評価・FD 委員会及び同部会において実施した平成 28 年度事業評価の結果に基づき、本事業のこれまでの推進状況については、参加した全ての機関から満足であるとの回答を得た。

・事業全般に対する意見

和歌山大学から、本年 2 月に開催した地域連携・創業支援部会における懇談会における事業協働機関からの提言を踏まえ、学生のインターンシップや職業に対する意識調査、県内企業でのインターンシップの実施状況についてさらに分析を加え、その拡充方策について検討を進めていくことや、学生が県内企業を知るための機会の拡充、学生の持っているビジネス・プランへの支援について、4 月以降の懇談会で検討を行っていきたい旨の説明を行った。

(2) 外部評価

■外部評価委員会 実施概要

日 時：平成 29 年 8 月 28 日（月）13：30～16：10

場 所：和歌山大学 南 1 号館 3 階共通会議室

外部評価委員：計 4 名

委員長 北村裕明（滋賀大学経済学部教授、環境総合研究センター長）

委 員 飯田圭一（株式会社日本政策金融公庫 和歌山支店長）

委 員 松淵厚樹（厚生労働省 和歌山労働局長）

委 員 中村栄三（株式会社和歌山放送 専務取締役）

講 評：

○総 括

以下の外部評価委員の評価に示されるように、本事業は、事業の進捗状況、事業を進めるマネジメント体制、目標に対する現時点での達成度等において、順調に進行し着実な成果を上げていると評価できる。

本事業は、地域人材を育成するための大学と地域との協働事業である。それが成果を上げるには、大学と地域が本格的に地域人材育成のための学生教育で連携と協働を行えるかが重要である。現時点で、そのためのプログラム開発と実施、それを進めるマネジメント体制の確立が着実にすすめられているが、更なる連携と協働が期待される。本事業の核とも言うべき「わかやま未来学副専攻」は、地域人材を地域協働で育成する優れた教育プログラムである。また、地域協働演習群の展開により大学でのアクティブ・ラーニングの深化の方向を示し、4つのテーマ設定を通じて地域の課題を深めることが日本の課題と向き合うことに繋がることも示しているという点でも優れている。

本事業が関係者の連携と協働によって、今後も着実に取り組まれ、当初の目標を達成できることを期待する。

（なお、全体運営、教育、地域連携・創業支援の分野別に各委員からご意見をうかがった。）

【2】学生自主演習合同研修

■平成28年度第1回COC+合同FD研修会（学生自主演習合同研修）

日時：平成28年7月8日（金） 15：00～18：00

場所：和歌山大学基礎教育棟 G209 講義室

テーマ：「アクティブ・ラーニング」の考え方

目的：各分野の副専攻カリキュラム設計の見直し、地域協働セミナーにおける授業手法への応用など。

概要：アクティブ・ラーニングの概念的思考の枠組みと具体例についてのレクチャー。

それを踏まえて副専攻プログラムの見直し。

講師：株式会社知識創発研究所 代表取締役 CRO

東北学院大学 地域協働教育推進機構 特任教授 松崎光弘氏

参加者：5 機関 8 名（参加校教員、実務家教員）及び和歌山大学教職員 25 名 計 33 名

【案内要項及び実施風景】

「地（国）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」

第1回COC+合同FD研修会

（学生自主演習合同研修）

COC+参加校及び実務家教員を対象に、和歌山大学協働教育センター教員を中心に学生自主演習で、培ってきたノウハウを共有します。

副専攻プログラムを実施するために必要なアクティブ・ラーニング、PBL、インターンシップ等に必要と考え方・ノウハウを整理し、プログラム作り・改善に活かす場としたいと考えています。

■実施内容

日時：平成28年7月8日（金） 15：00～18：00

場所：和歌山大学基礎教育棟 G209 講義室

テーマ：「アクティブ・ラーニング」の考え方

目的：各分野の副専攻カリキュラム設計の見直し、地域協働セミナーにおける授業手法への応用など。

概要：アクティブ・ラーニングの概念的思考の枠組みと具体例についてのレクチャー。

それを踏まえて副専攻プログラムの見直し。

講師：株式会社知識創発研究所 代表取締役 CRO

東北学院大学 地域協働教育推進機構 特任教授 松崎光弘氏

時間	内容
15：00～	開会挨拶・関心事項の共有ワーク
15：30～	アクティブ・ラーニングの考え方レクチャー
16：30～	質疑応答
17：00～	副専攻プログラムへの落とし込みワーク
17：30～18：00	全体共有ワーク

●お申し込み

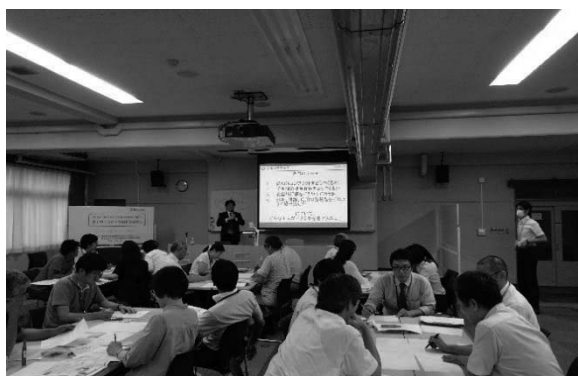
Eメールにて「所属」「氏名（ふりがな）」をご記入の上、下記宛先までお申し込みください。

E-mail: coc@iurcenter.wakayama-u.ac.jp

●お問合せ先

和歌山大学 COC+ 推進室

TEL: 073-457-7147



■平成 28 年度第 2 回 COC+ 合同 FD 研修会（学生自主演習合同研修）

日時：平成 28 年 9 月 14 日（水） 13：30～16：30

場所：和歌山大学基礎教育棟 G209 講義室

テーマ：「PBL の考え方と実施体制」

目的：地域協働自主演習Ⅰ・Ⅱの制度設計・体制整備に応用する。

概要：全学的に PBL の仕組みを構築している事例（同志社大学プロジェクト科目）を元に PBL の考え方と実施体制についてのレクチャー、それを踏まえて地域協働自主演習を検討する。

講師：同志社大学 PBL 推進支援センター センター長 文学部教授 山田和人氏

参加者：5 機関 5 名（参加校教員、実務家教員）及び和歌山大学教職員 32 名 計 37 名

【案内要項及び実施風景】

「地（国）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」	
第2回 COC+ 合同 FD 研修会	
（学生自主演習合同研修）	
COC+ 参加校及び実務家教員を対象に、和歌山大学協働教育センター教員を中心に学生自主演習で培ってきたノウハウを共有します。	
副専攻プログラムを実施するために必要なアクティブ・ラーニング、PBL、インターンシップ等に必要となる考え方・ノウハウを整理し、プログラム作り・改善に活かす場としたいと考えています。	
■実施内容	
日時：平成28年9月14日（水） 13：30～16：30	
場所：和歌山大学基礎教育棟 G209 講義室	
テーマ：「PBL の考え方と実施体制」	
目的：地域協働自主演習Ⅰ・Ⅱの制度設計・体制整備に応用する。	
概要：全学的に PBL の仕組みを構築している事例（同志社大学プロジェクト科目）を元に PBL の考え方と実施体制についてのレクチャー、それを踏まえて地域協働自主演習を検討する。	
講師：同志社大学 PBL 推進支援センター センター長 山田 和人氏	
時 間	内 容
13：30～	開会挨拶・開会事項の共有ワーク
14：00～	プロジェクト科目の事例とPBLの考え方レクチャー
15：00～	質疑応答
15：30～	副専攻プログラムへの落とし込みワーク
16：00～	全体共有ワーク
●お申し込み	
Eメールにて「所属」「氏名（ふりがな）」をご記入の上、下記宛先までお申込みください。	
E-mail: cocjin@center.wakayama-u.ac.jp	
●お問い合わせ先	
和歌山大学 COC+ 推進室	
TEL：073-457-7147	



■平成 28 年度第 3 回 COC+ 合同 FD 研修会（学生自主演習合同研修）

日時：平成 28 年 9 月 23 日（金） 13：30～16：30

場所：和歌山大学基礎教育棟 G209 講義室

テーマ：「PBL のプログラム設計」

目的：地域協働自主演習Ⅰ・Ⅱのプログラム作りに応用する。

概要：企画立案型 PBL プログラム事例を元に、教育効果を高めるプログラムの流れ作り、ワークシートなどのツールを解説、それを踏まえて地域協働自主演習を検討する。

講師：和歌山大学 協働教育センター 講師 木村亮介

参加者：1 機関 1 名（参加校職員）及び和歌山大学教職員 17 名 計 18 名

【案内要項及び実施風景】

「地（国）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」

第 3 回 COC+ 合同 FD 研修会

（学生自主演習合同研修）

COC+ 参加校及び関係教員を対象に、和歌山大学協働教育センター教員を中心に学生自主演習で、培ってきたノウハウを共有します。

副専攻プログラムを実施するために必要なアクティブ・ラーニング、PBL、インターンシップ等に必要と考え方・ノウハウを蓄積し、プログラム作り・改善に活かす場としたいと考えています。

■実施内容

日時：平成 28 年 9 月 23 日（金） 13：30～16：30

場所：和歌山大学基礎教育棟 G209 講義室

テーマ：「PBL のプログラム設計」

目的：地域協働自主演習Ⅰ・Ⅱのプログラム作りに応用する。

概要：企画立案型 PBL プログラム事例を元に、教育効果を高めるプログラムの流れ作り、ワークシートなどのツールを解説、それを踏まえて地域協働自主演習を検討する。

講師：和歌山大学 協働教育センター 講師 木村 亮介氏

時 間	内 容
13：30～	開会挨拶・開会事項の共有ワーク
14：00～	PBL のプログラム設計レクチャー
15：00～	質疑応答
15：30～	副専攻プログラムへの落とし込みワーク
16：00～	全体共有ワーク

●お申し込み

E メールにて「所属」「氏名（ふりがな）」をご記入の上、下記宛先までお申込みください。

E-mail: cocjmo@center.wakayama-u.ac.jp

●お問合せ先

和歌山大学 COC+ 推進室

TEL: 073-457-7147



■平成 29 年度第 1 回 COC+合同 FD 研修会（学生自主演習合同研修）

日時：平成 29 年 8 月 22 日（火）15：00～17：30

場所：和歌山大学基礎教育棟 G301 講義室

テーマ：「フィールドワークの引率者の心得等」

目的：和歌山大学わかやま未来学副専攻の後期科目「地域協働自主演習Ⅱ」等、フィールドワークを伴う地域連携教育活動実施に役立てる。特に引率教員が安全的・教育的・社会的に気を付けるべき観点についてノウハウを共有する。

概要：COC+協力校等のフィールドワーク実践教員による事例発表・講演、意見交換

講師：関西大学 人間健康学部准教授 安田忠典氏

近畿大学 生物理工学部准教授 新田和宏氏

参加者：6 機関 9 名（参加校教員ほか）及び和歌山大学教職員 43 名 計 52 名

【案内要項及び実施風景】

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」	
第1回 COC+合同 FD 研修会	
（学生自主演習 合同研修会）	
■目的	
・COC+参加校及び実務教員を対象に、学生自主演習等で培ってきたノウハウを共有します。・副専攻プログラムを実施するために必要なアクティブ・ラーニング、PBL、インターンシップ等に必要な考え方・ノウハウを蓄積し、プログラム作り・改善に活かす。	
■実施内容	
日時：平成29年8月22日（火）15：00～17：30	
場所：和歌山大学基礎教育棟 G301 講義室	
テーマ：「フィールドワークの引率者の心得等」	
目的：和歌山大学わかやま未来学副専攻の後期科目「地域協働自主演習Ⅱ」等、フィールドワークを伴う地域連携教育活動実施に役立てる。特に引率教員が安全的・教育的・社会的に気を付けるべき観点についてノウハウを共有する。	
概要：COC+協力校等のフィールドワーク実践教員による事例発表・講演、意見交換。	
講師：関西大学 人間健康学部 安田忠典氏 / 近畿大学 生物理工学部 新田和宏氏	
時間	内容
15：00～	問題意識・関心事項の共有ワーク
	事例発表・講演
	1. 「フィールドワークにおいて安全的・教育的に必要な引率者の心得について」
15：30～	関西大学 人間健康学部 安田忠典氏
	2. 「フィールドワークにおいて社会的に必要な引率者の心得について」
	近畿大学 生物理工学部 新田和宏氏
16：30～	意見交換
17：30～	終了
●お申し込み（申込期限 8月10日（木））	
Eメールにて「所属」「氏名（ふりがな）」をご記入の上、下記宛先までお申し込みください。	
E-mail: cocplus@center.wakayama-u.ac.jp	
●お問合せ先	
和歌山大学 COC+推進室	
TEL: 073-457-7147	



■平成 29 年度第 2 回 COC+合同 FD 研修会（学生自主演習合同研修）

日時：平成 29 年 9 月 29 日（金）15：00～17：30

場所：和歌山大学基礎教育棟 G209 講義室

テーマ：「アクティブ・ラーニングにおけるファシリテーション指導法」

目的：アクティブ・ラーニング、PBL 等において学生の自発的行動を引き出す。

概要：各種グループワークにおいて学生にファシリテーターを務めてもらう際の指導方法についてノウハウを共有し、一方的な指導ややらされ感に陥らないために心掛けるべきファシリテーション指導について講義・演習を行う。

講師：和歌山県立医科大学 教育研究開発センター 特別研究員 平野隆則氏

参加者：4 機関 7 名（参加校教員ほか）及び和歌山大学教職員 34 名 計 41 名

【案内要項及び実施風景】

「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」
第2回COC+合同FD研修会
 （学生自主演習 合同研修会）

●目的。
 ・COC+参加校及び実施校教員を対象に、学生自主演習等で培ってきたノウハウを共有します。
 ・副専攻プログラムを実施するために必要なアクティブ・ラーニング、PBL、インターンシップ等に必要と考えたノウハウを整理し、プログラム作り・改善に活かす。

●実施内容。
 日時：平成29年9月29日（金）15：00～17：30。
 場所：和歌山大学基礎教育棟 G209講義室。

テーマ：「アクティブ・ラーニングにおけるファシリテーション指導法」。
 目的：アクティブ・ラーニング、PBL等において学生の自発的行動を引き出す。
 概要：各種グループワークにおいて学生にファシリテーターを務めてもらう際の指導方法についてノウハウを共有し、一方的な指導ややらされ感に陥らないために心掛けるべきファシリテーション指導について講義・演習を行う。

講師：和歌山県立医科大学 教育研究開発センター 平野隆則氏。

時間	内容
15：00～	開会挨拶・開会事項の共有ワーク。
15：30～	レクチャー・演習。
17：10～	振り返り。
17：30～	終了。

●申し込み。
 Eメールにて「所属」「氏名（ふりがな）」をご記入の上、下記宛先までお申し込みください。
 E-mail: coc@adcenter.wakai-u.ac.jp

●お問い合わせ。
 和歌山大学 COC+推進室。
 TEL: 073-829-7187。



4.紀の国大学シンポジウム

【1】プログラム

紀の国大学シンポジウム「わかやまの未来を切り拓く若者を育むために」

日 時 : 平成 29 年 11 月 28 日 (火) 13:00～17:00

会 場 : 和歌山県勤労福祉会館 プラザホープ
(和歌山市北出島 1 丁目 5 番 47 号)

司 会 : 和歌山大学 COC+推進室 教育プログラムコーディネーター 佐藤祐介

1. 13:00 開会挨拶

和歌山大学長 瀧 寛和
和歌山県企画部長 高瀬 一郎

2. 13:10 事業概要説明

和歌山大学 COC+推進室長 金子 泰純

3. 13:25～14:55 基調講演

- (1) 文部科学省高等教育局大学振興課 改革支援第一係長 庄司 祐介
『地（知）の拠点大学による地方創生 ～COC+のこれまでとこれから～』
- (2) 高知大学副学長、地域連携推進センター長 受田 浩之
『高知県における地方創生に向けた大学の役割』
- (3) 千葉大学コミュニティ・イノベーションオフィス
地域イノベーション部門長 鈴木 雅之
『千葉地方圏の“しごと”づくり人材育成』

4. 14:55～15:55 ポスター（ブース）展示

和歌山県内の産官学金労言連携による地域活性化事例について

5. 15:55～16:55 パネルディスカッション

『地方創生に向けた大学と地域の役割
ーわかやまの未来を切り拓く若者を育むためにー』

モデレーター 石塚 互（和歌山大学）

パネリスト 受田浩之（高知大学）、鈴木雅之（千葉大学）
水内俊雄（大阪市立大学）、石井 実（大阪府立大学）、
鶴坂貴恵（摂南大学）、土井正光（和歌山工業高等専門学校）、
伊藤 宏（和歌山信愛女子短期大学）、金子泰純（和歌山大学）

6. 16:55～ 閉会挨拶

紀陽銀行 取締役上席執行役員 日野 和彦

■参加者数：182 名

【2】基調講演講演者

(1) :

氏名：庄司 祐介

所属：文部科学省 高等教育局

大学振興課 大学改革推進室 改革支援第一係 係長



(2) :

氏名：受田 浩之

所属：高知大学 副学長、地域連携推進センター長 センター長

地域協働学部 教授



(3) :

氏名：鈴木 雅之

所属：千葉大学 国際教養学部 准教授

横芝光町 シティマネージャー



【3】 概要

開会挨拶

瀧 寛和

紀の国大学協議会 会長

和歌山大学 学長

紀の国大学は、平成 27 年度の文部科学省「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に、和歌山大学を事業主体とした「わかやまの未来を切り拓く若者を育む“紀の国大学”の構築」として採択され、事業を推進してまいりました。

本事業では、和歌山県内の高等教育機関の力を結集するとともに、隣接する大阪府内の総合大学、および和歌山県をはじめとする県内自治体、県内の企業・金融機関が協力して“紀の国大学”を構築し、地域の人々・企業・自治体を元気にする人材、地元で活躍できる人材の育成をめざしております。

今後も地域の皆さまと一緒にこの「紀の国大学」の取り組みをより一層進めるべく、本日のシンポジウムを開催する運びになりました。基調講演では高知大学および千葉大学の事例に学び、パネルディスカッションで議論を深めていきます。また会場のみなさまとはポスターセッションにて交流する機会を設けました。今回のシンポジウムが今後の大学と地域との連携の一助となることを願っております。

これまで、本事業を進めるにあたり、地域の皆様の多大なるご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げますとともに、今後とも引き続きご支援・ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。開会の挨拶に代えさせていただきます。

開会挨拶

高瀬 一郎

和歌山県企画部 部長

（仁坂吉伸 和歌山県 知事
祝辞代読）

本日、紀の国大学シンポジウムが盛大に開催されますことを心からお祝い申し上げます。

近年地域の発展を図るうえで、高等教育機関には地の拠点として、地方創生を推進する大きな役割が期待されています。従来の学術研究だけではなく、企業、団体、地域と協働し、研究成果を広く社会に提供することにより地域の発展に寄与することが重要となっています。こうした時代にあって、紀の国大学では、県内の企業のみならず県域を越えて、大阪の大学にも参加していただき、和歌山志向をもった地域社会に貢献する人材の育成に取り組んでおられます。今後、和歌山大学を中心とした関係者の皆様の取り組みに期待しております。本県では、高等教育機関の充実が進んでおり、平成 30 年 4 月には東京医療保健大学看護学部の開学のほか、平成 31 年 4 月には（仮称）和歌山信愛大学教育学部、平成 33 年 4 月には和歌山県立医科大学薬学部の開学が予定されています。県としましても和歌山をもっと元気にするため、高等教育の充実に取り組んでまいりますので、皆様のご支援、ご協力を賜りますようよろしくお願い申し上げます。結びに、紀の国大学のさらなるご発展と本日ご臨席の皆様の益々のご活躍とご健勝を祈念申し上げ、お祝いの言葉といたします。

基調講演 (1)

庄司 祐介

文部科学省 高等教育局 大学振興課
大学改革推進室 改革支援第一係
係長



大学の役割は、研究と教育の2本柱から、平成19年に社会貢献の項目を追加し、3本柱となりました。文部科学省でも社会貢献の施策はこれまでも行ってきましたが、目玉となるようなものではありません。平成24年に日本再生戦略の中に地域再生の拠点としての大学の機能強化等を進めることを盛り込み、これがCOC事業に繋がっていきます。地道に地方で頑張っている大学を応援できる仕組みです。このCOC事業に関する提言において、高等教育機関が地域の人材育成ニーズに応え、地域に貢献できるよう、地方公共団体や地域の産業界との連携・協力、実務的な教育プログラムの提供などの取り組みを国が支援すると述べており、COC事業は、政府が進める地方創生のための目玉施策として定着しています。平成27年度に始まったCOC+はCOCを包含する形で進めるものです。この時に総務省と連携して事業を進めるスキームを作り、大学に対しては文部科学省、一緒にCOC+を実施する地方公共団体について総務省が交付金を配布するという一つの取り組みの中にそれぞれが財政支援する形で進めています。

COC+の大きな目的として、高等教育振興と地方創生を挙げさせていただきました。高等教育振興に関するものは教育カリキュラム改革、地方創生に関するものは地元定着率向上のための取り組み、そして、実施体制、情報の公開・成果の普及が重要になってきます。課題については、4つに整理しました。一つ目は、大学全体の取り組みになっているかという点です。若者の減少、社会の複雑化の中で大学のあり方も変わってきており、大学関係者は大きな危機意識を持たれていると考えています。こうした危機意識をもとに地域志向をもった大学へ変わっていかなくてはなりません。大学の将来構想や改革の中にCOC+事業の考えが盛り込まれていれば、地域への社会貢献が大学全体の仕事になると考えています。二つ目は、事業共同機関間の役割分担は適当かつ持続可能であるかという点です。大学の物理的・精神的垣根を取り払い連携していくことが持続可能性を高めます。三つ目は、事業の取り組みに偏りはないかという点です。短期的な目標達成を見据えた就職活動やイベントではなく、長期的に地域への貢献が可能となる事業の構築が必要です。四つ目は、学生の就職状況が好調であるが、影響があるのかという点です。最後にCOC+事業のその先についてです。COC事業、COC+事業のノウハウを踏まえて新しい事業を行わなければなりません。そのためにも実際に取り組まれることを集約していく必要があります。そのほかにもご意見等あればいただきたく存じます。

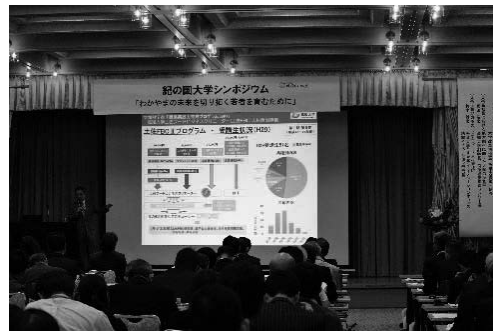
基調講演 (2)

受田 浩之

高知大学 副学長

地域連携推進センター センター長

地域協働学部 教授



課題先進県を課題解決先進県に導いていくための取り組みをお示ししたいと思います。

高知県は人口が 72 万人です。そのうちの 1%が大学教職員、学生です。その中で、県を挙げて高知県産業振興計画を行っています。COC+事業が地方創生のための一番のエンジンとなっています。私は全体の取りまとめの委員長を務めており、その後 10 年にわたりフォローアップの委員長を務めています。高知県では、大学と地域が一蓮托生で地方創生に向けたゴールイメージを二つの軸で考えています。一つは、当事者意識、もう一方は、専門性を高めることだと考えています。地域貢献に求められる姿は、学生、地域、教員が高い当事者意識をもったうえで専門性を持って協働しているという姿です。ところが大学の教員は高い専門性を持っていますが、地方創生に対する当事者意識は一般的に希薄です。ここを COC や COC+を通じて意識啓発を行って当事者意識を高める。学生は学ぶ前ですから専門性も低く、当事者意識も希薄です。そこに学部教育や COC・COC+事業を通じて双方を高める。地域の皆さんは本来当事者意識が高いはずですが、コミュニティの崩壊などにより当事者意識が希薄化しています。ここを生涯学習やさらには武器としての専門性を身につけるためのリカレント教育、産業人材の中核となっていくようなメニューが求められている。地方創生に向けた高知大学の挑戦として、土佐フードビジネスクリエータ人材創出事業（土佐 FBC）や COC 高知大学インサイド・コミュニティ・システム（KICS）、地域協働学部の立ち上げ、COC から COC+への展開を行っています。

土佐 FBC は高知県の食料産業の中核を担う専門的人材及び食料産業の拡充に資する基礎人材の育成事業です。平成 25 年度から今年度まで第 2 期として自立して行っています。大学が中心になりつつ、県、公設研究機関、金融機関の皆さまと連携し進めており、年間 3,500 万円の財源を賄っています。2 年間コースの A コースでは、課題研究を企業から持ち込んでもらいます。研究開発をしたい、マーケティングの戦略を立てたい、ビジネスプランを企画立案したい、売り込みをしたいなどの課題を OJT で我々がマンツーマンで指導していくことで FBC を修了する形になっています。今年度の受講生の割合の半数は食品メーカーの方々、1 次産業者も一定数おり、半数は女性が占めています。修了後に履修証明書を発行していますし、自治体の方は修了すると受講料の半分の補助いただける。今年度を合わせて 500 人弱が卒業します。500 人がさらに中核人材として、新たに高知県の食料産業の担い手を育てていくというミッションを担っています。なお修了した後も関係性を維持できるように、同窓会組織（土佐 FBC 倶楽部）を設けており、3 か月に 1 度集まって、情報交換等を行っています。

ます。さらに、商談会への参加や技術相談を受けることもできます。受講生の 10%弱本学の学生を受け入れていますが、地元定着率が非常に高くなっています。それは、社長さんと学生が机を並べて学んでおり、互いのことを知ることができるため、効果的なマッチングが可能となっています。

平成 25 年度に県が作っています地域本部に 4 人の大学教員を常駐させる仕組みを作りました。そして、サテライトオフィスとサテライト教室を各地に作っており、そこで生涯学習を展開すること。また様々な課題をしっかりと顕在化し、大学として課題を解決の道筋を示し、お手伝いしていくことにしています。地域に入っているということを示すために高知大学 インサイド・コミュニティ・システム (KICS) と名付け、4 人の UBC (高知大学地域コーディネーター) が地域で活躍するようになってきました。このことにより、地域の大学としての認知度 (平成 27 年度調査) は、学生 66.9% (H25 年度比+23.3%)、教員 95.7% (H25 年度比+14.3%)、職員 80.9% (H25 年度比+1.5%) という結果になりました。KICS の成果は「地域と大学」の双方の状況を理解する UBC を配置し、教育・研究・社会貢献を通じた「地域の大学」としての活動を深化させたことであると考えます。

この UBC の機能は以下の 4 つであり、それぞれ地域で活躍しています。

- ①「デスクにどっしり」ではなく、「地域にどっぷり」
- ②コーディネーターとして「つなぐ」こと、研究者として「解決する」ことの両立
- ③地域課題の発掘、共有・実践、成果還元までの連続したかかわりを持つ
- ④地域の関係者との相互の学びあいを継続

最後に地域協働学部を立ち上げ、学部教育を始めています。大学での学び、地域での学び、地域への貢献を三位一体とすることで、地域で学び、地域の未来を拓くリーダーを育成します。1 学年 60 名、24 名の専任教員が指導しています。3 年間で地域を課題にした演習を 600 時間、毎年地域を課題にした研究論文を提出するようにしています。人口流出に対してどう大学が立ち向かっていくかということで、地方創生推進士 (ローカルイノベーター) という認定制度を COC+事業によって推進しています。一方、雇用を作るために FBC であったり、観光人材育成の新しい学校を作っています。我々が立ち向かっていかなければならない、人口流出というのはドベネックの桶で例えています。これは植物が生育していくためのモデルを桶に張った水で例えているのですが、何かの要素が欠けると水がこぼれていきます。つまり、何か問題があってはいけないということです。地域には仕事がなかったり、望まれる職種がないために水がこぼれていく。それを受け止める大きなプールがある。それが三大都市圏かも知れません。この地域において何が問題かを明確に捉え、そこを修復、そして水の体積を増やしていく役割を担っていかないといけないのではないかと考えています。それがローカルイノベーターだと考えています。ローカルイノベーションを推進するローカルイノベーターを育てることが大学の役割であり、それを発掘し、育成し、育ったイノベーターたちを集密化させることによって、接触の利益を最大化し、イノベーションが双発される場を作るのが地方大学のミッションだろうと思います。

基調講演 (3)

鈴木 雅之

千葉大学 国際教養学部 准教授

横芝光町 シティマネージャー



千葉県全体で見ますと若者の流入人口が年間 4,000 人くらいあります。千葉県は地方かということをよく言われています。しかし、そこでもう少し細かく見ていきますと、千葉都市圏（12 市）は 7,461 人の若年層流入超過がありますが、千葉地方圏（42 市町村）では 3,231 人の若年層流出超過となっています。こうしたところを、日本の縮図として捉え、COC+に申請し、県内全域を支援しています。また、交通の便がよく、東京までの移動時間が短いために人口が流出するという現象もあるかと思います。

これまで COC 事業の対象地域である千葉市、松戸市、柏市を中心に進めてきました。COC+事業では、産業振興、イノベーション、人材育成などがテーマとなり、千葉県を 2 つに分けて、COC 事業では人口流入超過の地域、COC+事業では人口流出超過の地域を対象に行うということで、一体的に千葉県を対象に取り組みを行っています。人口流入超過の地域である千葉市では、千葉地方圏の衰退により千葉市が衰退すると捉えて、千葉市がどのように地方を応援するかということを踏まえて事業を進めています。現在、事業協働機関は、大学 9 つ、千葉県と 14 市町、企業などと連携を強化しています。COC 事業発足当初は、県と 3 つの市町でしたが、徐々に連携機関を増やしています。連携機関を増やしていくにあたり、セミナー等を行って集まっていただき、各市町に COC+事業を PR しています。それとは別に、事業協働機関外からも相談を受けることがあります。地方創生は戦略をもって、一番効果的な方策を出すことが重要であり、戦略を持たずに大学に相談にくるところは連携をお断りしています。

千葉県の COC+事業としては、各自治体、各大学が役割分担しながら進めています。千葉大学の実施体制としては、学生直下のコミュニティ・イノベーションオフィスを中心に地域イノベーション部門、コミュニティ再生ケア部門に教職員を配置して事業を進めています。また各学部・センターとも連携を密にとっています。コーディネーターとサテライトについては、地域コーディネーターとして 4 名を雇用しています。それぞれ地域の核となるところにローカルハブを設置しています。まちのなかの様々な担い手や資源を繋ぐという役割を担っています。教育改革としては、千葉大学では 2 つの副専攻を創出し、教育にあたっています。COC 事業の際に「コミュニティ再生ケア学」を立ち上げました。23 単位を取ることで、コミュニティづくりや地域再生の根本的な部分を学んだという履修証明が発行されます。COC+事業になって地方創生コースを立ち上げました。地方創生の 4 つ柱について、産業振興、東京からの人口誘致、出生率を上げる、地域づくりを学ぶためのコースです。地域

産業につきましては、「地域産業イノベーション学」を立ち上げ、30単位を取ることで履修証明が発行されます。「地域産業イノベーション学」では、地域産業をイノベーションするグローバル人材を育成することをめざしています。こちらは千葉大学、敬愛大学、放送大学と単位互換を行いながら事業を展開しています。「コミュニティ再生ケア学」でも同様に単位互換を実施し、地域課題を解決する人材を育成することをめざして取り組んでいます。また、「ローカルプロジェクト演習」を千葉大学では重要視しています。コンソーシアムを立ち上げて、事業化し、企業が成長し、大学に資金が循環してくるという地方と大学ともに発展する好循環モデルです。協働する自治体を増やすということで資金が回ってくるということであり、補助金の支援等も行っています。このような資金を元に共同研究費として、共に地方創生に取り組むということです。

最後の学生の定着についてですが、千葉地方圏の魅力（しごと・まち）づくり（自治体・企業等の意識改革・体力強化、若者の起業環境の向上、地域・まちの暮らしの向上）と地方志向マインドづくり（人材育成、地元定着プログラム、地元キーパーソンとの連携強化）の両方をバランスよくすることが大事だと考えています。ローカルハブをうまく使う仕組みとしての、PUSH・PULL 作戦があり、地域から引っ張ってもらえる状況をつくるために取り組んでいます。こんなに連携自治体を増やして大丈夫なのかと言われることもありますが、私たちはやる気のある自治体と取り組んでいきたいと考えています。縮小時代を本格的に迎えて、自治体が本格的に変われる最後のチャンスだと思っています。そうしたときに、大学に資金を提供して、本気で取り組もうとする自治体と取り組んでいきたいと思っています。

ポスター（ブース）展示

和歌山県内の産官学金労言連携による
地域活性化事例について



ポスター（ブース）展示一覧

no.	タイトル	主催校	実施地域
観光・交流			
1	紀伊半島の地域再興の学修- 和歌山市でケーススタディツアー -	大阪市立大学	和歌山市
2	紀伊半島の地域再興の学修- 御坊・日高川でケーススタディツアー -	大阪市立大学	御坊市、日高川町
3	若者たちがたくましく育つために 関大・さかい「ECOベンチャークラブ」	関西大学	田辺市
4	大学と連携した海の家の運営等について	和歌山大学、 関西大学	田辺市
5	紀伊半島の地域再興の学修を地域と協働で実施 - 熊野川町、新宮市街でスタディツアー -	大阪市立大学	新宮市
6	高野町と近畿大学の交流・連携による地域産業・観光振興	近畿大学	高野町
地域産業・イノベーション			
7	ものづくりとあきないをつなぐ共同学習	大阪市立大学、 和歌山大学	海南市、大阪市、 堺市
8	「高野山麓はしもとインターカレッジ・コンペティション」を通じた 地域活性化	和歌山大学	橋本市
9	ローカルイノベーションの創出へ 産学官金が一体となった「たなべ未来創造塾」	富山大学	田辺市
10	フルーツを使ったおみやげ創作プロジェクト	大阪樟蔭女子大学	かつらぎ町
11	大学のふるさと事業湯浅町×羽衣国際大学	羽衣国際大学	湯浅町
12	竹堆肥を使った有機栽培実験を通じた体感型演習（「地域実践演習」）	大阪府立大学	河内長野市
まちづくり・地域づくり			
13	和歌山市駅前通りを緑といこいの広場へ 市駅「グリーングリーン」プロジェクト	和歌山大学	和歌山市
14	市駅東商店街空き物件再生プロジェクト - Foret -	和歌山大学	和歌山市
15	加太の魅力を生かしたまちづくりの提案	東京大学	和歌山市
16	田辺のまちが大学生のチャレンジの場に「開校！たなべ大学 田辺の まち×大学生のトライアルショップ」「開校！たなべ大学」	紀の国大学	田辺市
17	地域づくりワークショップから学生との実践活動へ	和歌山大学	県内4市町
18	由良町における地域ブランド開発プロジェクト	摂南大学	由良町
19	すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト	摂南大学	すさみ町
地域医療・社会福祉・教育・子育て			
20	大学と行政、地域の子育て支援者が連携。和歌山を子育てしやすい、 住みよい街に	和歌山信愛女子短 期大学	和歌山市
環境・防災・交通			
21	大学と自治体が協働で防災フィールドワーク	和歌山工業高等専 門学校、大阪市立 大学	御坊市
22	地域貢献型メガソーラーを通じた大学連携	龍谷大学	印南町
23	列車から率先避難者増加を目標して 「鉄學 -串本古座高校防災スクール編-」	和歌山大学	串本町
農・林・水産業			
24	ワークステイ事業を通じた地域と大学連携	和歌山大学	田辺市
25	地域との共同によるQOLプロモーション演習活動	大阪市立大学	県内8市町
26	梅塩を使用した熱中対策の商品化	近畿大学	有田川町

高等教育機関と地域の協働による地域活性化事例集「ワカヤマコラボ 2017」

ポスター（ブース）展示を行った事例をまとめた事例集を作成し、シンポジウムで配布した。



地方創生に向けた大学と地域の役割
—わかやまの未来を切り拓く若者を
育むために—

石塚 亙 (和歌山大学)

受田浩之 (高知大学)

鈴木雅之（千葉大学）

水内俊雄 (大阪市立大学)

石井 実 (大阪府立大学)

鶴坂貴恵 (摂南大学)

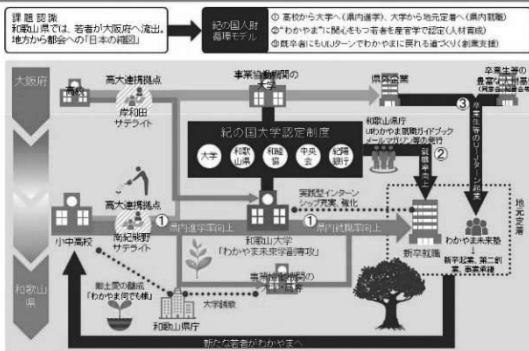
土井正光 (和歌山工業高等専門学校)

伊藤 宏 (和歌山信愛女子短期大学)

金子泰純（和歌山大学）



紀の国人財循環モデル「人生100年時代」到来に向けた地方創生モデル

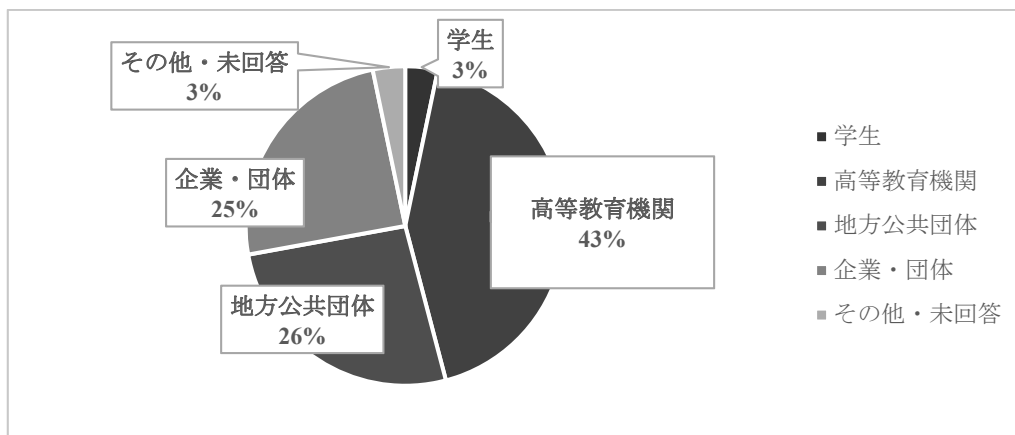


パネルディスカッションでは、2つの論点について議論した。一つ目は、都市（大阪）と地方（和歌山）の関係の縮図といえる紀の国人財循環モデル（上図）についてである。人財が回遊し今後のわかやまを盛り上げるために、PUSH（人財を押す）側である大阪と、PULL（引っ張る）側である和歌山の役割について議論した。まず、PUSH側（大阪の大学）については、地方を見てもらうことで、都市の豊かさを覆し、地方で活躍したいと思わせる教育が重要である。都市で勉強やスキルを磨いて、地方でのキャリアを描かせることも必要になってくる。PULL側（和歌山の高等教育機関）は、学生が地域と触れる接点を増やすことで地元就職を誘発する。和歌山大学においては、半数近くが大阪からの通学生であることから、和歌山に縁のある学生に定着してもらいPULL側全体を活性化させていく必要がある。また、その中でコーディネーターの役割についても重要性が示唆された。コーディネーターを置いていない大学もあり、紀の国大学という枠組みでのコーディネーターの登用や連携についても今後検討していかなくてはならない。二つ目は、紀の国大学の補助期間終了後の継続についてである。大学間、自治体、企業関係者等とどのような関係を構築していくべきかという点について議論した。教育プログラムとしての副専攻等は、継続していくことになる。しかし、それにとまなう教職員の負担増は課題となる。実務家教員として、地域や自治体、企業関係者等と協力したアクティブラーニングを柱にすることで、一人ひとりの負担を軽減しながら持続性を担保する必要がある。フィールドに関しても、和歌山県にとらわれず、和歌山県を含む紀伊半島など広く発展的な地域教育を行っていくことが望まれる。

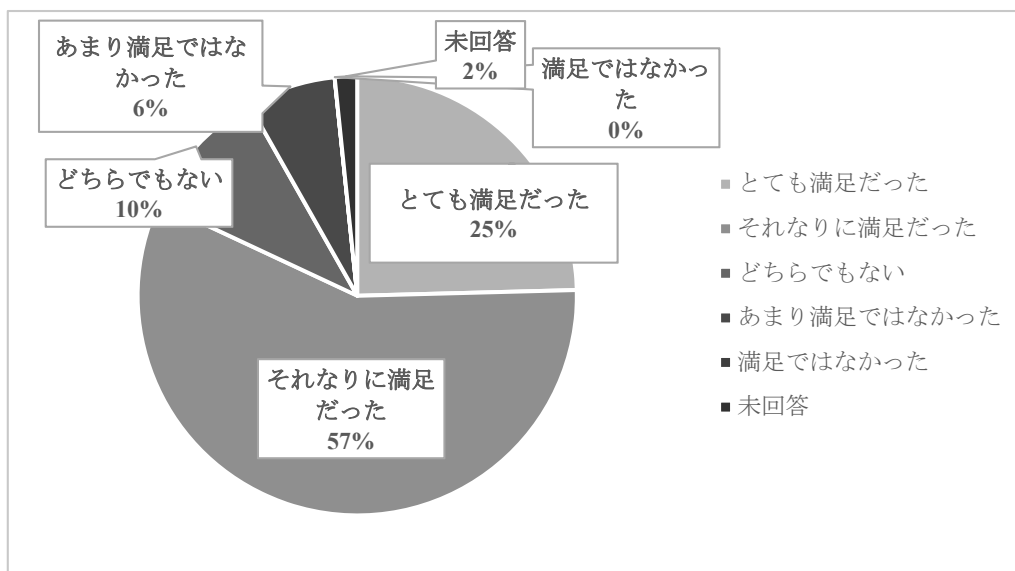
【4】参加者アンケート結果

■ アンケート結果（回答者 61 名、33.5%）

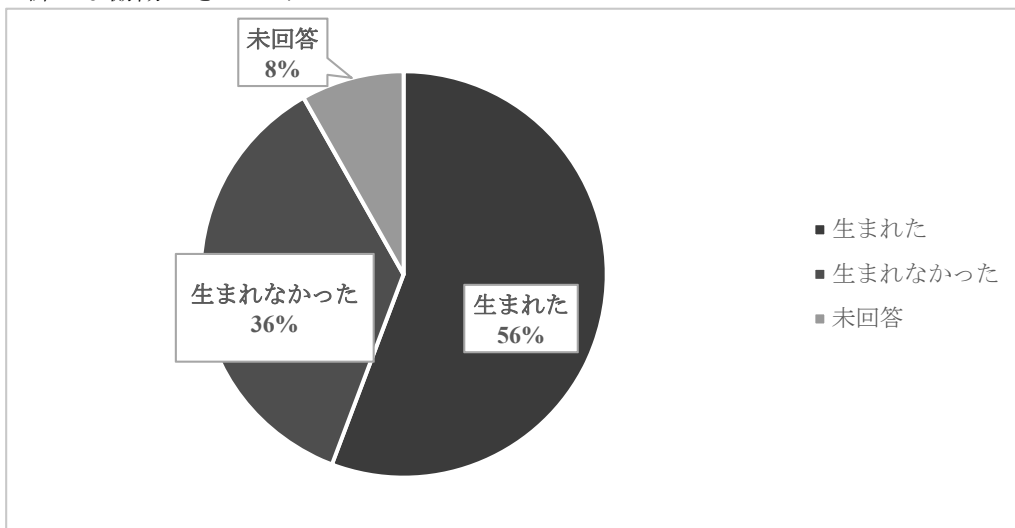
(1) 所属



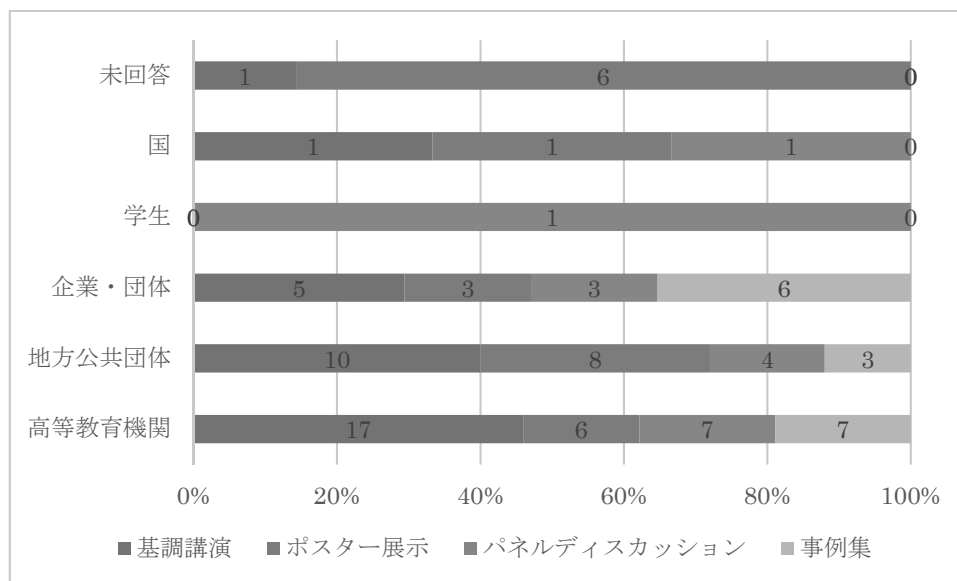
(2) シンポジウムの満足度



(3) 新たな協働のきっかけ



(4) 協働に役立ったもの（複数回答可）



(5) 次回シンポジウムに取り上げてほしいテーマ、課題（自由記述、一部抜粋）

- ・ 県内企業等に就職（起業）した卒業生の事例発表（企業・団体）
- ・ 大学（紀の国大学）の支援、連携で成果のあった地域の事例発表（企業・団体）
- ・ 若者に受け入れられる田舎（地方公共団体）
- ・ 地域の企業者の意見も取り入れたシンポジウム（地方公共団体）
- ・ 人口減少化における若者が定着できる地域産業とは？（高等教育機関）
- ・ 目標である地元就職率等についてどう考えるか知りたい（高等教育機関）

(6) 高等教育機関と協働で取り組みたい課題（自由記述、一部抜粋）

- ・ 高知大学の取り組みを参考に、和歌山らしい地域振興に寄与する人材育成のシステム構築、確立策を企画、事業化を検討してほしい（企業・団体）
- ・ 新事業の共同開発（企業・団体）
- ・ 和歌山大学には、農学部がないため、高等教育機関と農業の飛躍をいかにしてからめていくかが課題だと思う（地方公共団体）

5.わかやま未来学副専攻に関するアンケート

【1】めざす人材像

■教育目的

“わかやま未来学副専攻”では、「和歌山県まち・ひと・しごとにおける地方創生総合戦略」が掲げる基本目標に対応した4つの教育テーマに沿って自主的・実践的な教育を展開することにより、本県の地域社会が抱える多様かつ複合的な問題の解決に主体的に取り組み、わかやまの未来を切り拓く意欲を持った人材を育成します。地場産業、農林水産業、観光等のサービス業をはじめ教育、福祉、医療等、地域社会で幅広く活躍する活躍できる人材を育てます。

■副専攻が育成する人物像

わかやまに愛着を持ち、わかやまの未来を切り拓く意欲と能力を持った人材

■キーワード

コミュニケーション力、知力、体力、精神力、行動力

主体性、実行力、課題発見（解決）力、想像力、発信力

■習得すべき能力（わかやま未来学副専攻で育成する知識・能力）

地域が抱える課題を発見し、分析し、地域と協力しながら活動し、その経過を発信し、課題を解決できる能力

知識・マインド面
1. 知識とマインド
和歌山県の地域社会が抱える多様かつ複合的な問題を知り、その解決に向けて主体的に活動するマインドを持ち、実際に行動できる
能力・スキル面
2. プロジェクト・チーム運営スキル
地域社会を俯瞰し主体的に考え、判断すると同時に、個別の力を全体の力に転換していくプロジェクト運営・チーム運営ができる
3. 企画立案・マーケティングスキル
地域社会や内外の情勢に関わる情報を収集分析し、基礎的なマーケティングのスキルを活用して、イベントや事業の企画立案を行う事ができる
4. 合意形成・ファシリテーションスキル
様々な主体のニーズや考えを把握し、それぞれがより納得度の高い結論にいたる合意形成にいたるよう適切なファシリテーションを行うことで、ネットワークをさらに強化することができる
5. 情報発信・プレゼンテーションスキル
様々な情報を的確なターゲットに向けて、地域の魅力も含めて魅力的な形でわかりやすく発信することおよび、事業やイベントなどの趣旨を関係者に効果的に表現しプレゼンテーションできる

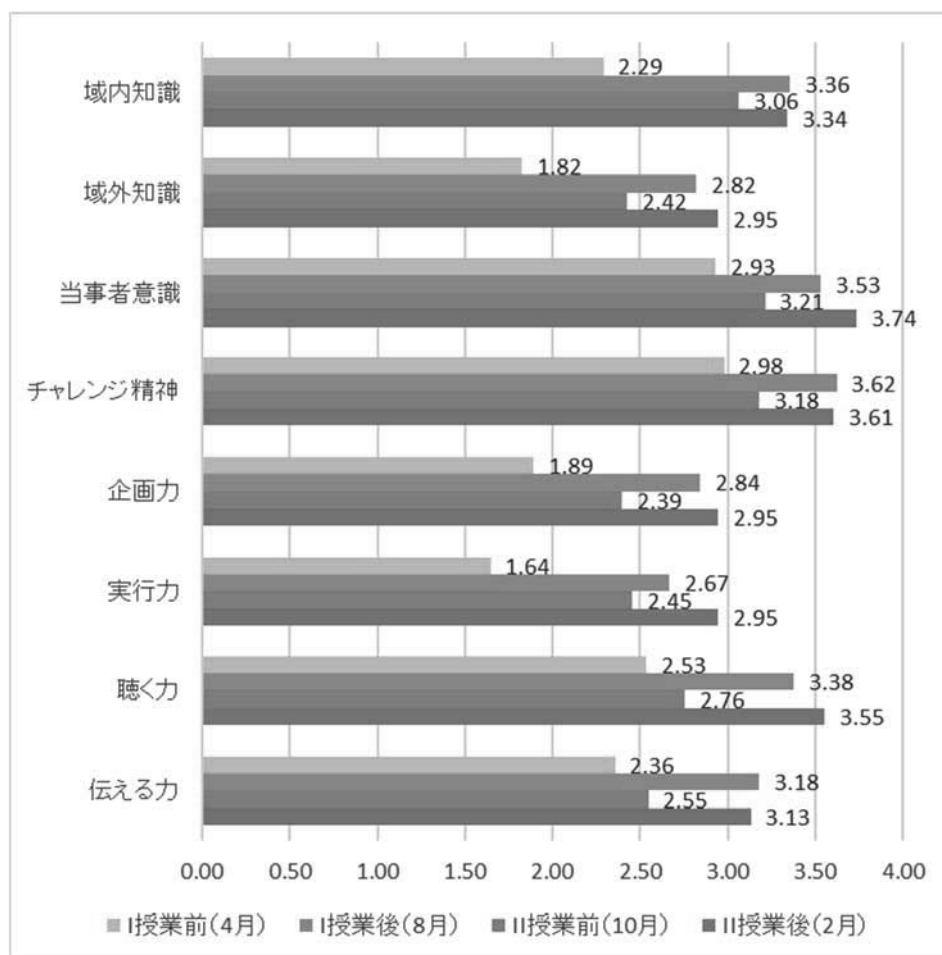
【2】わかやま未来学副専攻ルーブリック

■ルーブリック指標

カテゴリー	達成目標		小項目	5	4	3	2	1
知識	和歌山に関する知識を持ち、社会動向や学問的知識と関連付けて、現状把握・課題分析をすることができる	1	[域内知識] 和歌山に関する知識がある	県全体の情報と、 <u>広い地域</u> （市町村）・分野の知識がある	県全体の <u>大きな情報</u> と、複数の地域（市町村）・分野の知識がある	県全体の <u>大きな情報</u> と、特定の地域（市町村）・分野の知識がある	和歌山のことを <u>大まかに</u> 知っている	和歌山のことを <u>ほとんど知らない</u>
		2	[域外知識] （和歌山の課題解決に必要な）他地域の社会動向や学問的知識と関連付けて分析ができる	地域の課題について、社会動向や学問的知識と関連付けて <u>構造的な分析ができる</u>	社会動向や学問的知識と関連付けた <u>分析を試みる</u> ことができる	<u>特定の他地域</u> ・分野と関連付けた <u>分析</u> ができる	<u>特定の他地域</u> ・分野について <u>大まかな</u> 知識がある	社会動向や学問的知識を <u>ほとんど知らない</u>
マインド	地域・社会（環境や他者）に対して当事者意識を持ち主体的に貢献する姿勢と、チャレンジ精神（向上心）がある	3	[当事者意識] 地域・社会などの環境や他者に対する当事者意識（責任感）・利他心（向社会性）がある	地域・社会全体をより良くしていこうという <u>高い公共心</u> （市民性）がある	所属する組織・場に対する <u>高い当事者意識</u> がある	所属する組織・場 <u>に貢献</u> する意識がある	身近な他者に対する <u>思いやり</u> がある	環境や他者に対し <u>関心がない</u>
		4	[チャレンジ精神] 障害があっても諦めないチャレンジ精神（向上心）がある	障害・リスク・反対があっても諦めずにチャレンジしようとする	小さな障害等があってもチャレンジしようとする	中長期的な目標を決めてチャレンジしようとする	日常生活において <u>小さな</u> チャレンジしようとする	何事もチャレンジしようと <u>しない</u>
スキル	企画立案・遂行力	5	[企画力] 企画立案・マーケティングスキルがある	フレームワーク等を適切に <u>選択・活用</u> し、十分に論理的な企画立案ができる	フレームワーク等を適切に <u>選択・活用</u> し、概ね論理的な企画立案ができる	<u>与えられた</u> フレームワークを用い <u>論理的</u> な企画立案ができる	<u>与えられた</u> フレームワークを用い <u>簡単な</u> 企画立案ができる	論理的思考の考え方や企画・マーケティングのフレームワークを <u>知らない</u>
		6	[実行力] プロジェクトマネジメントスキルがある	様々な知識・経験を応用し、計画から実行まで <u>十分に</u> プロジェクトマネジメントすることができる	<u>自立的に概ね</u> 一通りのプロジェクトマネジメントができる	<u>助けを借りながら</u> プロジェクトマネジメントができる	日常的な <u>小さな</u> プロジェクトのマネジメントができる	プロジェクトマネジメントの考え方を <u>知らない</u>
	コミュニケーション力 （相互作用・人間関係）	7	[聴く力] ファシリテーションスキル（引き出す・把握する力）がある	他者の <u>潜在的な感情や意見</u> ・ニーズも見・取り、 <u>整理</u> することができる	他者の意見を引き出し、 <u>整理</u> することができる	他者の意見を引き出し、 <u>理解</u> できる	他者の意見を <u>引き出す</u> ことができる	<u>積極的に</u> 他者の意見を <u>引き出す</u> ことが <u>できない</u>
		8	[伝える力] プレゼンテーションスキル（表現力）がある 口頭・文章・デザイン等	状況に応じて <u>適切な表現手段</u> を用い、相手が理解できる <u>効果的な表現</u> ができる	特定の手段において、相手が理解できる <u>効果的な表現</u> ができる	相手の <u>立場</u> を考慮した表現を意識することができる	<u>助けを借りながら</u> 考えを表現することができる	<u>積極的に</u> 考えを <u>伝える</u> ことが <u>できない</u>

■わかやま未来学副専攻受講者のルーブリック自己評価

地域協働自主演習Ⅰ（事前、事後）、地域協働自主演習Ⅱ（事前、事後）で実施



地域協働自主演習Ⅰ受講後は、各項目で評価が上がっており、授業の効果が現れていると言える。しかし、地域協働自主演習Ⅱの事前では、地域協働自主演習Ⅰの事後と比べて数値が下がっている。この理由として、夏休みを経て自分をより相対化して客観的に見ることが出来たためと考えられ、学生それぞれの自己評価基準自体が厳しくなっていることが想定できる。

地域協働自主演習Ⅱ受講後は、事前と比べて数値が上がっており、授業の効果が現れていると言える。全体として、学生は副専攻の履修過程で順調に成長していると考えられる。

6. 紀の国大学参加校の取り組み

【1】参加校の教育プログラム

■和歌山大学

わかやま未来学副専攻



キーワードは
・協働教育
・実践型インターンシップ
・地域志向キャリア教育
・創業支援

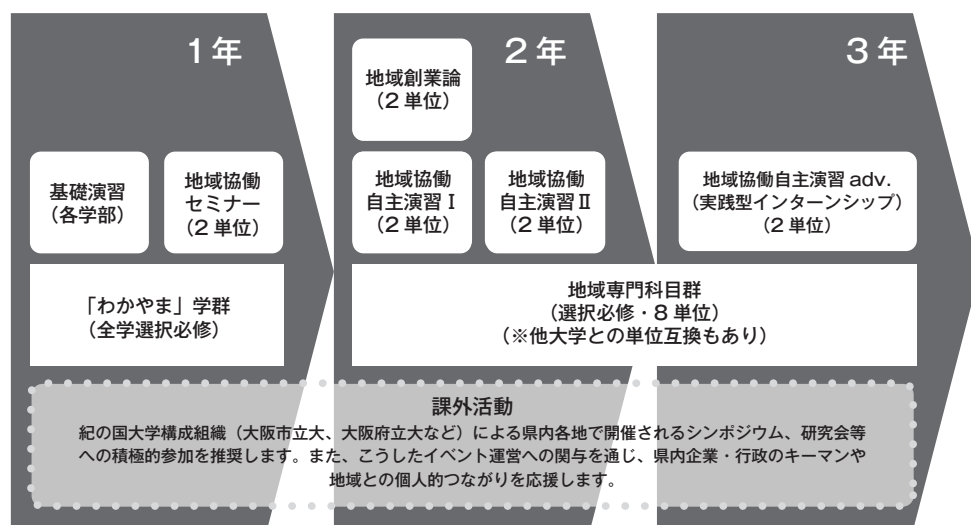
「わかやま未来学副専攻」とは、大学、地方公共団体、県内企業、NPOなどとの協働教育を展開することを基本とし、地域課題に即した実践的な「教育科目」および「実践型インターンシップ」からなる教育プログラムです。

この副専攻に託した願いは、和歌山県の深刻な地域課題に向き合いつつ、秀逸な自然環境と文化資源を生かした取り組みを学生たちが自主的に地域の人たちと協働しながら行っていくことです。

そのための基礎知識を1年次、2年次前期に座学およびグループワークを主体とした講義で学び、2年次後期、3年次には、地域に出て、実践的な体験を積みながら地域課題の解決に取り組んでいきます。

また、和歌山県内に定着・定職を図るべく地域志向キャリア教育やビジネスコンテストなどへの参加・創業支援も行っています。

わかやま未来学副専攻のカリキュラム



プロジェクト一覧(2016～2017年度実施地域)

①6次産業化実践(田辺市、紀の川市)



農林水産業の6次産業化を実践するプロジェクトで、田辺市、紀の川市等の農業法人、農業関連企業で実習を行います。農産物や地域資源を活用した商品・サービスの開発ができる人材をめざします。

②家庭用品イノベーション(海南市)



海南市の家庭用品産業において生産技術・製品開発を企画・立案を行うプロジェクトです。地場産業の振興をプロセス・プロダクト両面からイノベーションを促進できる人材をめざします。

③地域づくり戦略構想(田辺市、紀の川市、紀美野町、上富田町)



和歌山県が実施する地域づくりワークショップを通じて地域の課題や資源を評価し、具体的な実行計画の提案をするプロジェクトです。地域の現状の把握→課題の発見→地域資源を活用した課題解決手法を実践できる人材をめざします。

④自立・地域共生推進～地方で新しい事業づくり～(新宮市、白浜町、古座川町)



南紀熊野地域を中心に「新しい仕事づくり」を目標に地域実践者・観光事業者などへの「弟子入り」を行うプロジェクトです。課題を多角的視点でとらえ直し、豊かな自然資源を活用できる自立的な能力を持った人材をめざします。

⑤地域資源を生かした生業づくりとまちづくり(九度山町)



九度山町をフィールドに自然および歴史環境と親しみながら、地域資源を生かしたまちづくりを実践するプロジェクトです。地域の特性を生かした生業づくりやまちづくりについて考え実践できる人材をめざします。

⑥地方都市のまちなか再生(和歌山市)



和歌山市をフィールドに、中心市街地などの特定エリアの再生に取り組むプロジェクトです。まちなかを取り巻く背景・課題と潜在的資源を客観的に抽出し、多様な主体と連携・協働し、将来ビジョンを提示、具体的アクションを企画・実践できる人材をめざします。

⑦宿泊業を中心とした着地型観光ビジネス(かつらぎ町)



古民家再生による民泊事業のサービス開発、プロモーション、地域観光連携等に取り組むプロジェクトです。宿泊業の現場で未来を見据えた観光サービスを開発できる人材をめざします。

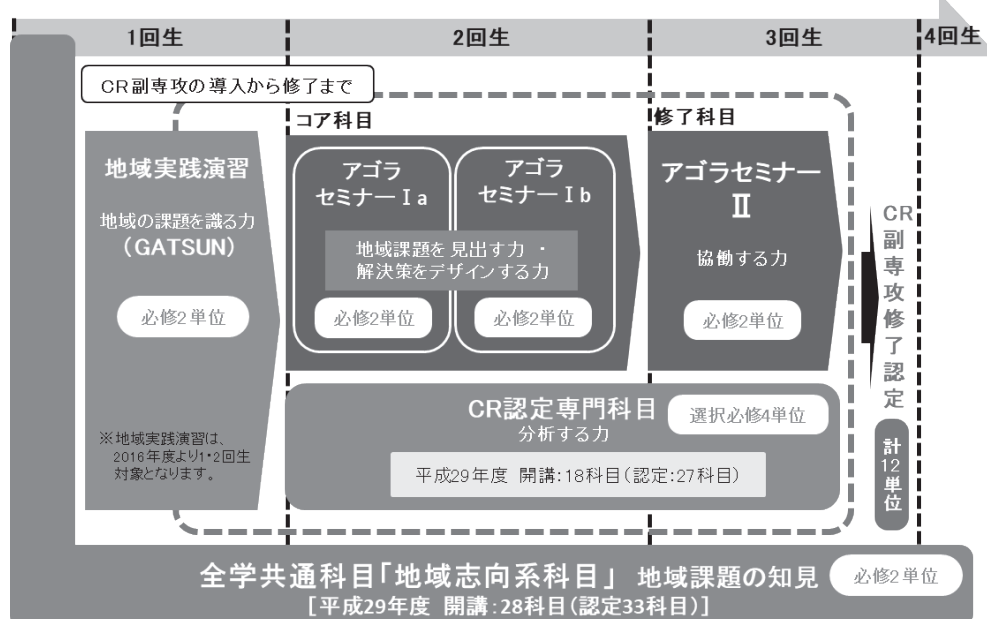
■大阪市立大学

大阪市立大学

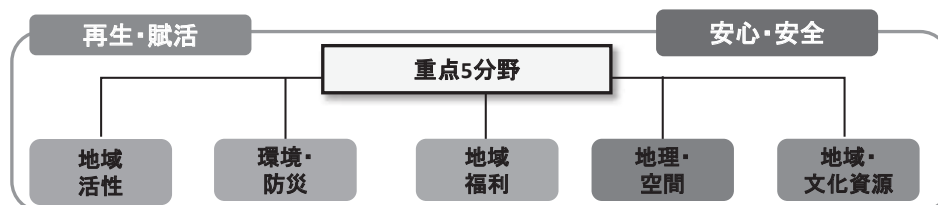
地域志向教育プログラム概要

- 地域における複合的な課題と向き合うため、より実践的な人材の育成を目指し地域志向教育の体系化を行っています。
- 大学で地域を知ための「**地域志向系科目**」を2015年度以降の全入学生を対象に必修化して、全学生を対象とすることで、地域を学ぶことのすそ野を広げます。
- さらに、**CR(コミュニティ再生)副専攻**制度を導入し、「地域実践演習」、「アゴラセミナー」の新設、CR認定専門科目の他学部への開放、実習インターシップの実習(課外)を行います。
CR副専攻を通して、地域課題を「**識る**」「**分析する**」「**見出す**」「**伝える**」スキル、そして地域に出て「**行動する**」スキルを修得し、地域と「**協働する力**」の育成を目指します。

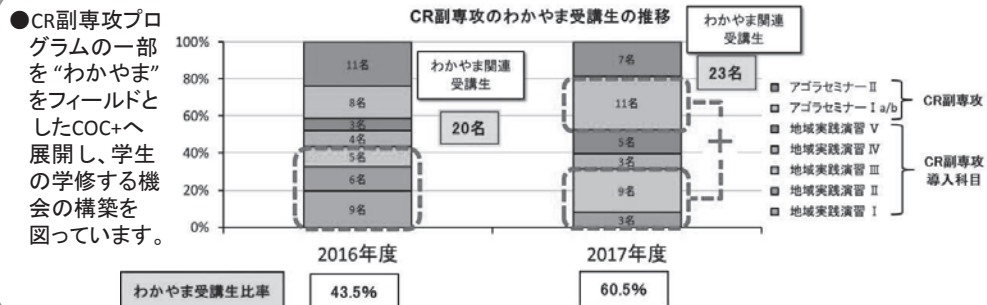
CR副専攻カリキュラム概要図



●大阪の再生賦活と安全・安心の創生をめざす地域志向教育を実践



CR(コミュニティ再生)副専攻プログラムのCOC+への展開(活動事例) (2016年度、2017年度)



地域実践演習

- 1 地域実践演習Ⅲ[地域福利]:「紀伊半島における地域再興の学修」** 2016年度 2017年度
 —都市・農村の諸相に接する—「すごい人に会おう、そして場所の力を体感する」

県庁所在都市である和歌山市のいまを識ること、また1市6町がそれぞれバラエティに富んでいる御坊・日高川流域で農業や林業という力強い下支え感に、民間の力もあり、持続可能な地域性がある場所などで、課題を識る力、まちづくりについて考える力を養うことを目的としています。
- 2 地域実践演習Ⅱ[環境・防災]:「いのちを守る都市づくり」** 2016年度 2017年度
 —コミュニティ防災実践—

南海トラフ巨大地震による津波浸水や震動被害が想定される地域の災害リスクや災害対策を知るため、御坊市と美浜町でまち歩きによる実践を通じた学修により地域の防災リーダーとして活躍できる能力の養成と、さらには学生間、及び地域の市職員との交流を図りワークショップまで展開し、また観光などの視点からの地域活性化の考察も目的としています。
- 3 地域実践演習Ⅰ[地域活性]:「ものづくりとあきないをつなげる学修」** 2016年度 アゴラセミナーへ継承

「ものづくり(製造業)」と「あきない(商業)」は、日本経済を担ってきた代表的な経済活動であり、それぞれの地域の課題と解決策を考えることを目的としています。
 (2016年度「わかやま未来学副専攻」のスタートアップセミナーと共同して和歌山大学の教員と受講生と共に実施しました。)

アゴラセミナー

- 4 地域福利クール:「紀伊半島の地域再興の学修を地域と紀の国大学連携校と共同で実施」** 2017年度
 —熊野川町、新宮市街でスタディツアー—

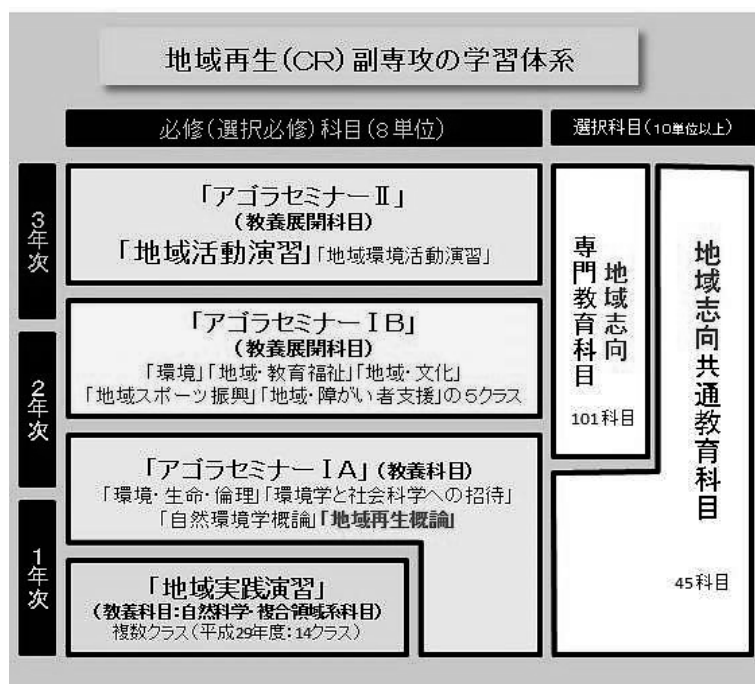
和歌山県の中山間地域で、地域が抱える課題と再興に向けた取り組み事例を学び、地域活性化の糸口に触れることを目的とした学修を行いました。地元の協議会、NPO、市役所、商店街組合様、及び紀の国大学連携校と共同で実施し、見るだけではわからない取り組み事例の本質を知ることができ課題を見出し、解決策をデザインすることを目的としています。
- 5 地域活性クール:「あきないの変化と産地とのかかわり」** 2017年度

あきないと産地のかかわりについて、ミナミ商店街周辺のまち歩きを行い、現状を識り、また和歌山への玄関口である南海電気鉄道株式会社を訪問し、まちづくりの考え、「あきない」と「ものづくり」をつなぐ仕掛けについてビジネスの現場視点から学び、解決策をデザインすることを目的としています。

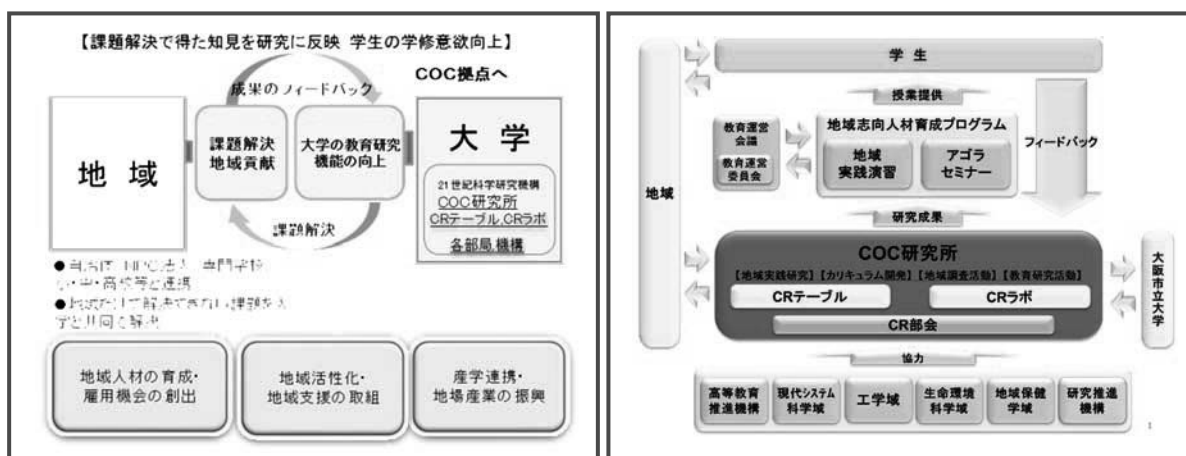
(1) 地域再生(CR)副専攻の目標

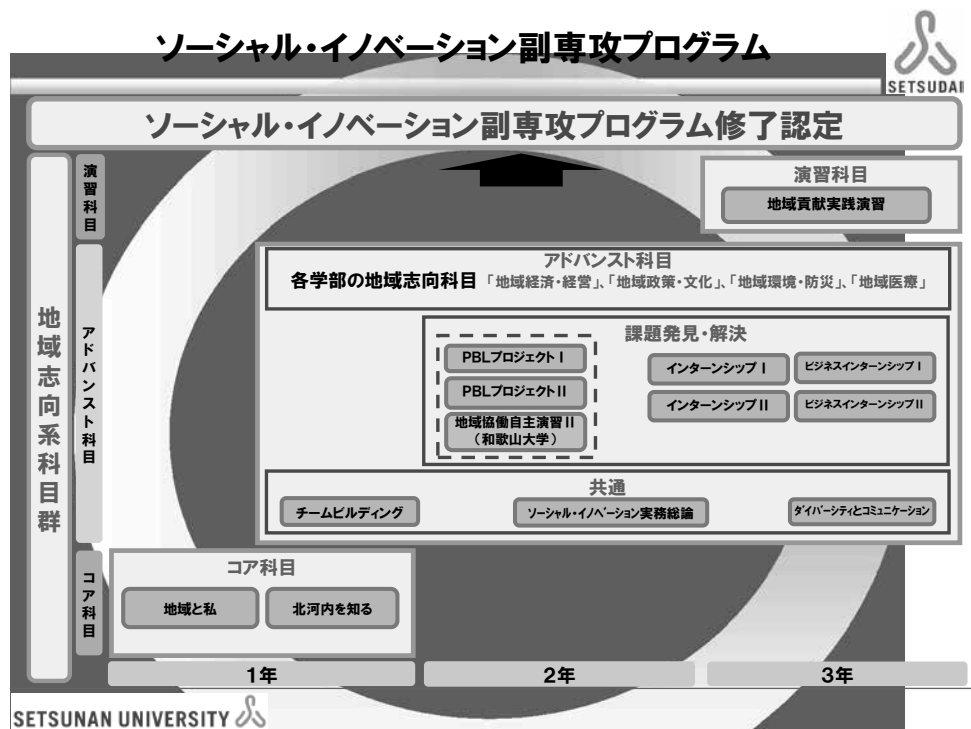
「地域再生(Community Regeneration: CR)副専攻」を学士課程に新設し、地域貢献に資する教育研究を行うことにより、地域志向の学生育成とともに、大学が地域の拠点としてその発展に寄与することを目指します。

(2) カリキュラムのイメージ



(3) 地域貢献と推進体制(COC 研究所)





■和歌山工業高等専門学校

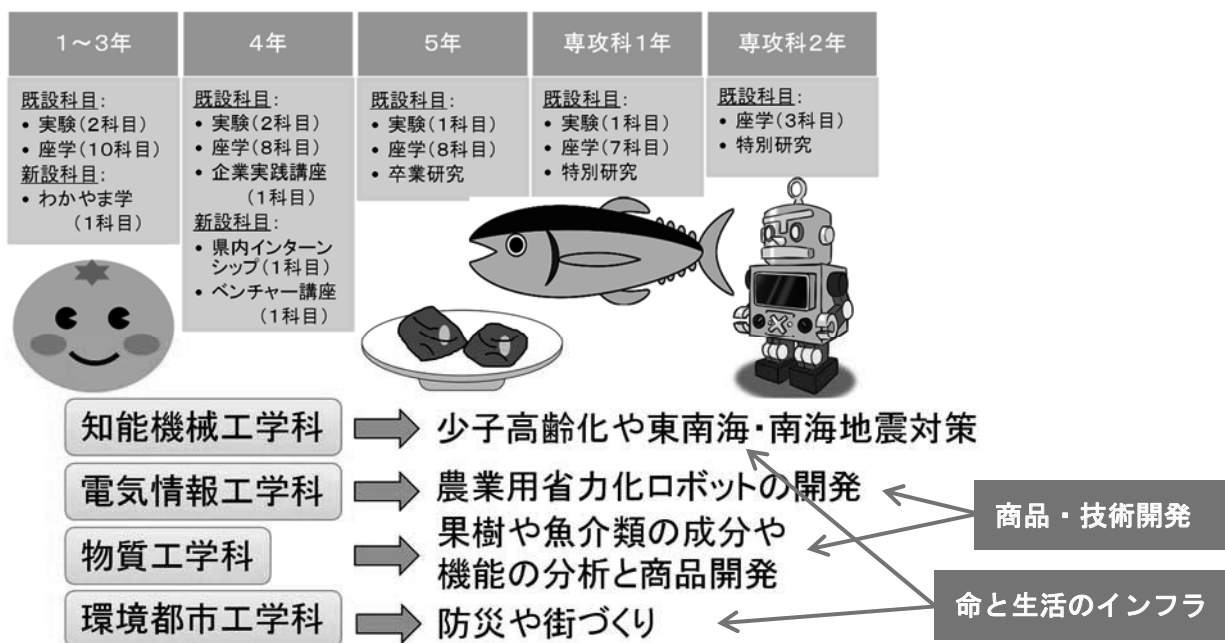
教育プログラム概要

低学年で和歌山の歴史や文化を体験し、地元への理解と興味を深めることを目的に自主演習型の地域学「わかやま学」を新設しました。高学年では既存の専門科目の中で地域色を深め、さらに卒業研究や特別研究での地元企業との共同研究を奨励することで、学生が地域の産業や技術者と実際に関わる機会を増やしています。また、各専門学科では、学生実験等で商品・技術開発や命と生活のインフラと言った和歌山県が抱える課題を意識した取り組みを行っています。



わかやまを知る若手エンジニアを育成し地域の未来を切り拓くー「地」の「知」の拠点としての和歌山高専ーをスローガンに取り組んでいます。

地域指向科目一覧

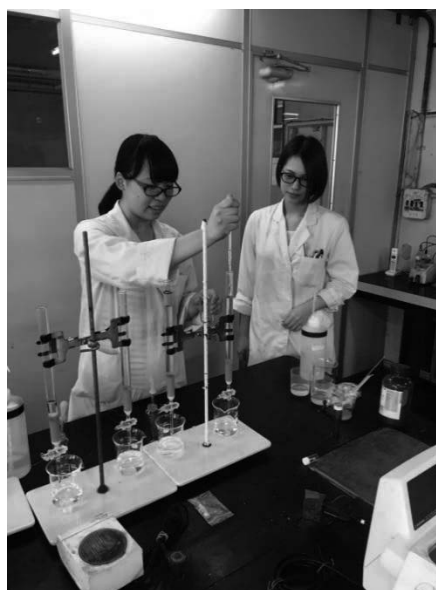


① フィールドワーク（わかやま学）

2年生のわかやま学では、全学生が各専門に対応した県内企業そして那智大社、高野山そして熊野古道などの名所旧跡を見学します。

② 県内インターンシップ

4年生では、既設の学外実習（選択、1単位）に加え、県内の企業や自治体等で行う県内インターンシップ（選択、2単位）を併設しました。



③ 公開講座

従来の教員主導の講座ではなく、高専の学生が地域の子供たちと触れ合い、実験の面白さを伝える取組です。学生が公開講座で行う実験の計画から指導まで主体的に行います。

④ わかやま学公開成果報告会

2年生で実施しているわかやま学の活動の集大成であり、県内の工場や名所旧跡などを見学し、さらに事前・事後学習で得た成果も含め、まとめた成果をグループ発表します。



子育て・子育てサポーター養成講座

子育てに関する専門的な知識・技能を有し、育児相談に応じて、適切な情報を提供できる「子育て・子育てサポーター」を養成する。また、本養成講座は厚生労働省が参考として示すファミリー・サポートセンターの提供会員への講習と同等として和歌山県が認定する。

H28 年度（初年度）認定：133 名 H29 年度（今年度）認定予定：168 名

カリキュラム表

- ・保育のこころ
- ・心の発達とその問題
- ・身体の発達と病気
- ・小児看護の基礎知識
- ・安全・事故
- ・子どもの世話
- ・子どもの遊び
- ・子どもの栄養と食生活
- ・事業の円滑に進めるために
- ・子育てをめぐる現状と取り組み

実践的理解と
子育て当事者の声を聞く
ことを目的に、授業内で
「ふれ愛ルーム木のおうち」を見学

YES

和歌山県内の子育て・子育て支援の現状と課題について理解ができた (90.7%)
機会があれば子育て・子育て支援に関わってみたいと思った (88.2%)
授業内容は将来自分が子育てをする時に役立つと思った (97.5%)
授業を受けて、地元に残って地域に貢献したいと思った (74%)



和歌山県が、厚生労働省が示す
ファミリー・サポートと同等と認定
和歌山信愛女子短期大学学長が認定

■受講学生へのアンケート (H28 年度 119 名回答)

■『子育て・子育てサポーター』認定書 (見本)



基礎教養科目群『紀の国わかやまと世界』

1年次・2年次を通して地域志向の7科目を開講し、
「紀の国わかやま」に関する知識と、郷土愛をもって
社会の発展のために積極的に関わっていける人材を育てます。



紀の国の 歴史と文化

紀の国の歴史と文化について、古代から現代までの歴史上重要な出来事や文化財を事例にあげ、中央の歴史や文化とどのように関連するのか学習する。そのため、史料に基づいて史実を検証し、紀の国の歴史と文化について幅広く理解を深める。

紀の国の 文学

和歌山県に関連する文学作品を鑑賞し、その作品の舞台となった地域環境を理解する。
授業ではさまざまな資料を使って説明する。学生は文学作品を理解し、鑑賞する力を身につけ、地域への親近性をつちかう。

紀の国の 自然

最初に世界的な視野で自然を理解し、日本、和歌山、自分の生活している地域の自然を理解させる。テーマを決めて地元の調査研究を行い、発表する。積極的に自然保護に取り組むことができ、和歌山の情報発信ができる能力を養う。

地域子育て ・子育て 支援論

和歌山県を中心とした地域の子育て・子育て支援について理解し、専門的知識を身に付けて地域貢献ができる人材育成を目指す。厚生労働省が参考として示すファミリー・サポート・センターの提供会員への講習と同等の内容を満たす。

地域 社会学

個人と社会の関連を研究の対象とし、社会がいかに成り立つかを考察する。個人の誕生から関わる家族集団を出発点とし、様々な社会集団について学んでいく。特に地域社会に着目し、地域振興や防災、コミュニティのあり方などについて考察する。

地域 経済論

街の興隆と衰退の歴史、街づくりに対する行政の施策、他地域の街づくり先進事例を学んだ後、新たなまちづくり手法として近年注目されているリノベーションまちづくりについて学ぶ。街の一員として、自立した考えを持つことを目標とする。

紀の国の 食文化

和歌山の食文化は、温暖な気候と縦長の地形により、豊かな沢山の文化が生まれ育っている。川・山・海の文化がそれに拍車をかけ宗教風土も加わり、持ちきれんばかりの素晴らしい「食文化」が存在していることを理解する。



【2】平成 29 年度の取り組み

■和歌山大学

6 次産業化の実践による農林水産業活性化プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】紀の川市、田辺市

【担当教員】木村亮介(クロスカル教育機構
教養・協働教育部門講師)

【COC+推進室】大坪史人・友渕貴之

【協 働 先】農業生産法人有限会社柑香園
株式会社たがみ
和歌山信愛女子短期大学

1. 事業概要・目的

6 次産業化に取り組んでいるアグリビジネス事業者との協働を通して商品・サービス・イベントなどについて検討し、地域と生産者と消費者の三方の利となる提案を行うものである。

受け入れ先で検討されている商品・サービス・イベント開発のサポートをすることで、企画立案やマーケティングについての一連の流れを学ぶ。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働自主演習Ⅰにおいて、生産量は日本で二番目に多いものの知名度が低い和歌山県のイチジクを使った加工品をグループワークを中心に企画した。



また地域協働自主演習Ⅱでは、地域協働自主演習Ⅰで企画した加工品の商品化に向けた取り組みと地元のブラン



ド米を使った甘酒の開発の 2 つに分かれ実習を行った。

イチジクチームは、シロップの開発を企画し、実際に自分たちで作ってみて、市場調査を重ね、ジュレに改良することで商品化にこぎつけた。甘酒チームは、試飲を繰り返し、若い人向けの甘酒になるよう細かな味の調整やパッケージデザインを行った。

3. 課題と今後の展開

次年度は、各々の学生が個人でアグリビジネス事業者の下でインターンシップを行う。これまで学んできた知識・経験の全てを活かし、実習先の経営課題に応じて、6 次産業化ビジネスプラン作り、農商工連携プロジェクトの企画・調整、加工品・サービスの企画・試作を行う。自ら主体的にスケジュール管理等のプロジェクトマネジメントを行うことで 6 次産業化の現場でイノベーションを推進する一員となることを目的とする。

4. 学生/地域の声

商談会で県知事に飲んでもらえてうれしかった。

家庭用品イノベーションプロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】海南市

【担当教員】藤田和史（経済学部准教授）

【COC+推進室】富永哲雄・大坪史人

【協 働 先】海南市、海南特産家庭用品協同
組合、高田耕造商店、株式会社
サンコー



などについても学ぶ機会を加えた。地域協働自主演習Ⅰにおいては、「シュロを使った学生生活でも使える商品の企画」というテーマで商品の企画を行った。また地域協働自主演習Ⅱでは、地域協働自主演習Ⅰで企画した加工品を海南市の家庭用品まつりで発表した。その気づきを元に地場産業を小学生に広めようという目的を掲げ、新たな取り組みとして、家庭用品産業のPR 漫画を作成している。

1. 事業概要・目的

海南市を中心とした家庭用品産業は、和歌山県の特徴ある地場産業である。この家庭用品産業の歴史や現状を学修し、実際の企業の経営や具体的な製品技術開発を題材に、グループワークを進めていく。また、海南市の家庭用品まつりに参加し、家庭用品産業の普及活動についても学び、地場産業の振興をプロセス・プロダクト両面のイノベーションから促進できる人材を育成することが目標である。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナーにて、家庭用品産業の振興について学ぶため、株式会社サンコーの角谷社長から家庭用品産業の歴史と業界、流通体系



3. 課題と今後の展開

次年度は、これまで学習してきたことを基礎に、家庭用品企業、自治体、商工会議所等で製品・技術開発・生産の現場や企業支援に参画することを通じて、これらの業務で必要となる知見・技能を身につけることをめざす。また、得た成果を家庭用品まつりにおいて報告し、地場産業の普及にも積極的に取り組んでいく。

4. 学生/地域の声

自分たちでは考え付かないようなアイデアを学生たちが提案してきて驚いた。今後の商品開発のヒントにも繋がる。

地域づくり戦略構想プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】紀美野町、田辺市

【担当教員】大浦由美（観光学部教授）

【COC+推進室】大坪史人・友渕貴之

【協 働 先】和歌山県、紀美野町、田辺市、
みらい龍神、株式会社秋津野、
摂南大学

1. 事業概要・目的

県下の集落での地域づくりワークショップに参加し、地域の課題抽出、分析手法、ファシリテート能力の基礎を学んでいく。この地域づくりワークショップの結果から、地域の現状に即したビジネスプラン(イベントの構想)等を地域の人と一緒に考えることで、地域づくりの担い手となり、当事者意識を持った活動を行うことを目的とする。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナーにて、和歌山県の地域づくりの先進地である田辺市にバスツアーを行い、「地域づくりとは何か」というテーマを考えました。地域協働自主演習Ⅰにおいては、実際に地域づくりワークショップの技法を学ぶことを中心にグループワークを行い、和歌山



大学のキャンパスをもっと魅力的にすることについて資源地図作りを行いました。また地域協働自主演習Ⅱでは、紀美野町の下神野地区で地域づくりワークショップを行い、地域の課題の抽出や地域の良いところを探し、今後の活動提案を行った。

3. 課題と今後の展開

次年度は、地域づくりワークショップにおいて実行計画を策定した地域を中心に地域づくり活動の支援を行う予定である。年間で5～10回程度の継続的な活動を地域の自治会、農業法人、商工会議所、観光協会、NPO法人などと協働して行う。また、その地域で自分ができることを考え、個人単位でプランを作成し、地元での発表会を行います。

4. 学生/地域の声

地域づくりワークショップは着手順位まで決める必要性も実感す



ることができた。小さなイベントから行うことで、地域の団結力が強まり、ますます出来ることが増えていくのではないかと思った。

自立・地域共生推進プロジェクト～地方で新しい事業づくり～

【学 校 名】和歌山大学

【担当教員】西川一弘(クロスカル教育機構
生涯学習部門准教授)

【COC+推進室】田代優秋

【協 働 先】和歌山県ふるさと定住センター、
新宮市観光協会、JR 西日
本旅客鉄道株式会社新宮駅、
しらすな足湯、株式会社あが
らと

1. 事業概要・目的

このプロジェクトでは、地方が抱える課題に対し地域の再発見と人的ネットワークの積み上げプロセスにより、「地方で新しい事業づくり（ナリワイづくり）」ができる学生を育てることを目的としている。本年度は、①進路が就職だけでなく、自ら事業を起こすことやフリーランスなどでも生きていける心技体を身につける、②気に入った市町村、地域、集落、人、もしくは、自分の生き方を応援してくれる人を見つける、③ナリワイにつながるシゴトのタネ（お金が稼げそうなコト、モノ）を見つけてくることを目標に行った。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナーにて、都会から地方へ移住し農業をしている20歳代の本学卒業生との対談形式の授業を行い、地方の魅力に



ついて語ってもらった。また地域協働自主演習Ⅱでは、5名の学生が、紀南地域に行き、シゴトの種になりそうな地域課題を探した。その中で、足湯カフェについての検討や買い物難民向けサービスの検討、ジビエ開発など自ら課題を設定し、設定した課題が「どのような問題か」を構造化していった。

3. 課題と今後の展開

次年度は、地域協働自主演習Ⅱで考えた「地域課題」をベースとして、観光事業体・地域実践者へ「弟子入り」インターンシップを行う予定である。南紀熊野地域で「実際にナリワイを実現している実践者・NPO」や「ジオガイドを行っている観光事業団体」等を検討している。将来、履修学生が地方に定着することで「自分たちの町は自分たちでつくり、自分たちで守る社会」の実現をめざす。

4. 学生/地域の声

・年齢の近い若い先輩が、都会の企業をやめ、地方で農業をしていることに驚いた。

・将来起業するための基礎を学ぶことが出来ていると実感している。

地域資源を生かした生業づくりとまちづくりプロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】九度山町

【担当教員】宮川智子

(システム工学部教授)

【COC+推進室】富永哲雄・大坪史人

【協 働 先】九度山町、大阪市立大学

1. 事業概要・目的

九度山町をフィールドとして自然および歴史環境を生かしたまちづくりについて学ぶ。地域での暮らしと生活環境および地域資源について検討し、地域資源を生かすための提案を行うことを目的としている。本年度は、真田丸以外の九度山町の魅力の普及を目標として、フィールドワークを通じ、歴史環境と親しみながら、九度山町の活性化についてのプラン作成を行った。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナーにて九度山町教育委員会から、九度山町および高野山周辺



地域の歴史について学ぶ機会を設けた。またプロジェクトメンバー（2年生）が中心となり、1年生向けに九度山町の歴史的建造物や町並み見学会を



行った。地域協働自主演習Ⅱでは、真田丸以外の九度山町の魅力の普及を目標に、「グッズで知ってもらう九度山町」と「クイズでめぐる九度山町」の2つのテーマに分かれて活動を行った。グッズチームは、歴史に基づいた飲料水の販売などを提案し、クイズチームは各所で写真を撮りながら行うクイズラリーを提案した。

3. 課題と今後の展開

次年度は、これまで学んだ歴史的町並みや地域資源、および地域における課題について、インターンシップをとおして、地域資源に関する調査・記録によるデータ収集、観光ルート作成、商品開発・試行を行う予定である。

行政、観光事業者、公共機関等へのインターンシップを予定しており、①地域資源と周辺環境の記録を行う、②観光ルート作成と試行を主体的に行う、③商品開発・試行を地元住民と協働して行う、等を検討している。

4. 学生/地域の声

九度山町の活性化案を作るにあたり歴史についても深く学ぶことができた。

地方都市のまちなか再生プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】和歌山市

【担当教員】永瀬節治（観光学部准教授）

【COC+推進室】友渕貴之・富永哲雄

【協 働 先】和歌山市、南海電鉄株式会社、
大阪市立大学

1. 事業概要・目的

和歌山市のまちなかに潜在する地域資源（公共空間、建物、歴史文化、生業・産業、イベント・活動等）を把握するとともに、それを具体的に活用することで、地域コミュニティを活性化させ、新たな人の動きを生み、エリアの価値を高めるための方策やプロジェクトを企画・構想する。提案された内容の一部は、関係組織との協力・連携のもとで実践し、その効果と実効性を検証する。

本年度は、南海電鉄株式会社との協働で、モニターツアーを企画し、2017年12月23日に実施した。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働自主演習Ⅰにおいて、「紀ノ川流域の魅力と繋がりを生かしたプロモーションを考える」ことをテーマにグループワークを行った。また地域協働自主演習Ⅱでは、

「和歌山の漁村を体感するモニターツアー」を実施した。12名の参加学生が、

「ガイド班
（＝まち歩き



の道案内と解説）」と「古民家班（＝古民家での説明会の準備）」と「リーダー班（＝連絡、緊急時対応）」の3つに分かれ、ツアーをもてなした。県内外から27名が参加し、学生たちは雑賀崎の歴史や町並みを解説したり、人気の撮影スポットなどを紹介しながら、参加者と散策した。その後古民家で、地元住民による雑賀崎の漁業文化の講座や地元小学生と協働で作成したマップの紹介などを行った。後に、このときに行ったアンケート結果を地元で報告した。

3. 課題と今後の展開

次年度は、和歌山市内でまちづくりに取り組む行政の関連部局や民間組織の協力を受け、関連プロジェクトを継続的に実践するインターンシッププログラムを実施する。

4. 学生/地域の声

モニターツアーの開催や報告会の実施に半年間力を注いできた。ツアー参加者の楽しそうな顔を見たときは一安心だった。反面、まだまだ地域の歴史について勉強が足りないとも感じたので、次回のツアーに生かしていくために活動を続けたい。

宿泊業を中心とした着地型観光ビジネスプロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】かつらぎ町

【担当教員】木村亮介(クロスカル教育機構
教養・協働教育部門講師)

【COC+推進室】 富永哲雄・友渕貴之

【協 働 先】 古都里、
和歌山県、かつらぎ町

1. 事業概要・目的

和歌山県の観光客数は増加し続けており、特に外国人観光客(インバウンド)の増加が目覚ましい状況である。一方で、宿泊施設が不足している。また、過疎地域での人口減少に伴い、空き家(古民家)が増加していることを背景に、古民家を改装(リノベーション)し、ゲストハウスとして経営する取り組みも増えてきている。そこでは、単なる宿泊施設だけではなく、日本・和歌山・その地域ならではの体験ができるような空間づくりや「おもてなし」が求められている。このプロジェクトでは、観光分野において、古民家を活用したゲストハウスなどの宿泊業を中心に、地域に根差して着地型観光ビジネスで活躍できる人材の育成をめざす。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働自主演習Ⅱにおいて、かつらぎ町に今年度開業予定の宿泊体



験施設について、開業前の準備段階から取り組んだ。関西国際空港と高野山にて、外国人観光客への聞き取り調査を行い、集客のための情報発信や顧客満足度を高めるための周辺案内やサービスなどを検討した。宿泊施設の設



置に向けた法律や申請スケジュールを作成するために保健所の協力をいただき、開業の手続きを行った。

3. 課題と今後の展開

次年度は、実習先の経営課題に応じて、自分の経験・専門性などを活かして、解決策を検討・実行していく。宿泊プラン、外国人対応、地域観光、プロモーション、接客サービス、館内設備、従業員採用・定着、コスト削減等、自ら主体的にスケジュール管理を行いプロジェクトマネジメントを行う予定である。

4. 学生/地域の声

関西国際空港での外国人観光客への聞き取りは、緊張したけど、とてもいい経験になった。また、コミュニティ誌などにも取り上げられて、自分たちが作ったんだと自慢できる。

ビジネスプランコンテスト「わかやま創生プラン」部門の創設

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】和歌山県全域

【担当教員】田代優秋

(COC+推進室特任助教)

【協 働 先】紀陽銀行、大阪市立大学

1. 事業概要・目的

和歌山大学経済学の同窓会柑芦会と共同して毎年実施している香村賞ビジネスプランコンテストに 2017 年度から「わかやま創生プラン」部門を創設した。この新部門では、和歌山県内の地域資源を使って、県内の深刻な地域課題の解決に貢献するビジネスプランを募集した。この部門は、紀の国大学の参加校・協力校の学生にも門戸を開き、大学間の連携や和歌山への貢献を目指している。また、審査には学内教員だけでなく外部の専門家として協働機関の紀陽銀行にも協力をいただいている。受賞者には、創業準備金として最高 10 万円と事業化支援が行われる。

2. 取り組み内容

本年度は、紀の国大学の参加校の学生にも門戸を開いたため、和歌山大学と大阪市立大学の合同チームが参加した。『「ゲーム」を用いた地域創生！』のビジネスプランを提案し、大阪市立大学商学部



1年 板谷建さん（代表）、システム工学部 2



年 坂口真琴さん、西畑有騎さんの 3 名の合同チームが紀の国大学賞を受賞した。和歌山県の観光地をめぐるゲームを企画し、板谷さんの発想や企画力に、坂口さん、西畑さんの技術力を合わせたゲームとなっていた。

3. 課題と今後の展開



次年度は、より多くの大学から参加してもらうための仕掛けを検討中である。また、わかやま未来学副専攻からのビジネスプランコンテストへの参加も随時促していく。今年度の受賞者のプランの改善等にも注力し、起業のための支援体制も固めていく予定である。

4. 学生/地域の声

参加してよかった。これまで、あまり知らなかった和歌山を知ることが出来たし、少しでも地方創生に役立てればと思う。

紀の国大学3校と自治体が協働で防災フィールドワーク

<御坊市でスタディツアー>

- 【学 校 名】大阪市立大学、
和歌山工業高等専門学校
- 【活動地域】御坊市
- 【担当教員】生田英輔（生活科学部講師）
佐伯大輔（文学部准教授）
- 【協 働 先】和歌山大学、御坊市

1. 事業概要・目的

大阪市立大学の CR 副専攻の導入科目である地域実践演習(GATSUN)Ⅱの一部を紀の国大学に開放し、紀の国大学の連携校(和歌山工業高等専門学校、和歌山大学)と地域の自治体である御坊市と協働でフィールドワークを行った。2017 年度は地域を識ることに加え、学生間および学生と市職員との交流を図り、実践を通じた学修により、地域の防災リーダーとして活躍できる能力の養成と、観光などの視点からの地域活性化の考察を目的とした。

2. 取り組み内容

紀の国大学3校の学生及び教員、御坊市防災



対策課の職員ら合計 22 名が参加した。南海トラフ巨大地震による津波浸水や震動被害が想定される地域の災害リスクと災害対策を学ぶため、市職員協力のもと御坊市と美浜町で、まち歩きを行い、様々な発見を得ることができた。また、古い街並みを歩くことで、



御坊市の歴史と現状を垣間見ることができた。その後、一日を振り返り御坊市役所会議室でワークショップを行った。ここでは各校の学生がグループに分かれ、防災・観光・地域活性化のテーマについてディスカッションシマップへ落としこみ、発表では教員、学生、市職員の方を含め評価及び意見交換が行われた。



3. 課題と今後の展開

今回の活動により、各校の学生同士の活発な交流が図れたこと、また地域の方との積極的な意見交換により、幅広い学びが得られ、地域貢献への展開へと繋がる機会となった。今回の活動をもとに、今後成果物への展開や、地域への貢献、さらに授業の充実、またフィールドの展開などが検討できればと考えている。

4. 学生/地域の声

現場を歩いてみて、地域のことがとてもよくわかった。普段体験できない学修ができ、参加してよかった。

紀伊半島の地域再興の学修を地域と協働で実施

-熊野川町、新宮市街でスタディツアー-

【学 校 名】大阪市立大学、

【活動地域】新宮市

(中心市街と旧熊野川町)

【担当教員】水内俊雄(都市研究プラザ教授)、祖田亮次(文学部教授)

【協 働 先】和歌山大学、和歌山信愛女子短期大学、熊野川行政局、みつの地域活性化協議会、NPO 高田、新宮市役所商工観光課、新宮市観光ガイドの会、新宮市魅力発信女子部、仲之町商店街組合、新宮市児童館など

1. 事業概要・目的

アゴラセミナー I a の地域福利分野で、和歌山県の中山間地域である熊野川町と新宮市街で、地域が抱える課題と再興に向けた取り組み事例を学び、地域活性化の糸口に触れることを目的とした学修を行った。

2. 取り組み内容

(1) 旧熊野川町、高田地区

世界遺産の地である一方、典型的高齢化、人口



減少がみられ、かつ紀伊半島大水害の傷跡も深い地域である。自然の恵みと災害やその復興をバネにして、地域の組織がそれぞれの役割を果たしながら、Iターン者、Uターン者が地元とうまく連携しながら、地域を再興している取り組みを学んだ。



(2) 新宮市街

世界遺産である神倉神社の登拝を通じて、地元ガイドの方から大逆事件の顕彰や中上健次の足跡を学ぶことで、地域の広くて深い、歴史・地理を知ることとなった。また、新宮市が中心となつて結成された「新宮市魅力発信女子部」

との交流でユニークな取り組みに触れた。商店街も店主に案内し



ていただき、まち歩きで見ただけではわからない商店の動向を知るなど、地域活性化の様々な取り組みや現状の本質を知ることができた。

3. 課題と今後の展開

地域の方々と、本学および紀の国大学の教職員が参加し、協働の連携事業が実施でき、今後の継続、展開につながる好企画のプログラムとなった。次年度以降、紀の国大学連携校学生の相互交流も兼ねた授業へと展開できればと考える。

4. 学生/地域の声

地域の方:若い学生がくることが、活性化のエネルギーとなる。

紀伊半島の地域再興の学修

(地域実践演習Ⅲ：御坊・日高川流域スタディツアーを実施)

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】日高郡日高川町

【担当教員】水内俊雄（都市研究プラザ教授）、祖田亮次（文学部教授）

【協 働 先】寒川地区寄合会、寒川神社、
寒川区委員会、紀中森林組合、
日高川町生活研究グループ、
寒川ホテル保存会ほか



1. 事業概要・目的

地域実践演習Ⅲ（地域福利）では、COC+事業への展開として、紀伊半島の地域再興をテーマとした学修を行っている。2017 年度も、バラエティに富んだ地域性をもつ日高川町で 3 回の日帰りフィールドワークを実施した。地方が持つ課題と再興に向け取り組まれている状況を識り、地域の力に接し、それを具体的につかみ取することを目的とした。

2. 取り組み内容

幾度かのテーマ探索と調整を経て、4 つのチームに分かれ、それぞれ



で調査のプラン作りから聞き取りまで実施し、その情報を整理・分析しチーム間で共有した。

1)住宅地図分析チーム：過去の住宅地図をもとに、一軒一軒の移動や空き家化の経緯を地元の方から聞き取りし、現地視認を行った。

2)U ターンチーム：U ターン者が地域へ戻られるきっかけや、戻られたその後の状況の聞き取りを行った。

3)I ターンチーム：I ターン者が地域に入られた動機、また入られたその後の定住や移住状況などを緑の雇用を中心にヒアリングした。

4)祭りチーム：コミュニティをつなぐ祭りについて、主導した方へのヒアリングを通じて意義と課題を識ることとした。

3. 課題と今後の展開

人口減少と高齢化する地域において、U/I ターン者が、地域の人口構成や地域力にどのような効果をもたらしたか、という点に調査は絞られていった。その過程において、膨大な歴史に関する語りや伝承、新たな取り組みなどの一端にふれることができた。数値化、地図化ということをかなりメインにし、作業途中となっているため、今後も継続して活動を実施予定である。

4. 学生/地域の声

寒川地区の現状や厳しさを感じることと合わせ、寒川の自然の美しさや住民の温かさに惹かれ、寒川を好きになった。

日高川流域における生業・生活の現地フィールド調査

<大阪市立大学地理学実習>

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】御坊市、日高川町、美浜町、
田辺市

【担当教員】祖田亮次（文学部教授）

【協 働 先】和歌山大学、
寒川神社、御坊日高博覧会実
行委員会、日高川町生活研究
グループ、日高川町漁業協同
組合、日高川町ゆめ倶楽部
21、ジビエ工房紀州 ほか



療の実態、③日高川流域の生業・生活、④IU ターンの実態、⑤六次産業化（道の駅、寒川の特産品、ジビエ商品化等）。学生の任意参加により、御坊、日高川町寒川地区でそれぞれ2泊3日、その他御坊祭りや、各種イベントなど日帰り行事でも参加・調査を行った。レポートは印刷して、現地関係者へ配布予定である。

1. 事業概要・目的

大阪市立大学文学部 2 年生を中心に一部 CR 副専攻生も同行して、日高川流域における生業・生活を総合的に把握すること、現地の様々な役所、企業、団体、個人などインタビューし、学生自身が地方の問題・課題を認識・理解すること、またそれらの課題に対してどのように対策があるのかを考察することを目的としている。

2. 取り組み内容

16名の学生が数名ずつの班に分かれ、学生自身で5つのテーマ設



定を行い、調査のプラン作り、アポイントメント取り、インタビューを行い、それらの現地調査で得た情報を整理・分析してレポートを作成した。

①子供の居場所づくり（未来塾、御坊子ども食堂など）、②へき地医

3. 課題と今後の展開

今回、日高川流域という形で、御坊から田辺（龍神）までの広域を対象としたが、学生の日程合わせ、公共交通機関がないため効率的な移動手段の確保などが難しく、数日間の調査では現地を総体的に把握することが困難であった。今後、引き続き次年度以降の CR 副専攻授業等に継続展開していきたい。また、今回の聞き取り調査・資料収集だけではなく、統計データーなどを駆使した方法を組み込んでいくことも重要だと考える。

4. 学生/地域の声

日高川流域は、比較的大阪に近い上、その豊富な自然資源をどう六次産業化して特産品にしていくかを取り組まれていると感じた。

「あきないの変化と産地とのかかわり」の学修

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】大阪市ミナミ商店街、難波

【担当教員】長尾謙吉（非常勤講師）

【協 働 先】和歌山大学、大阪市（道頓堀商店街）南海電気鉄道株式会社



1. 事業概要・目的

「アゴラセミナー I b」で「あきないの変化と産地とのかかわり」について、大阪ミナミ周辺のまち歩きで現在あきないがどのように変化しているかをスタディツアーにより学び、その後大阪と和歌山を鉄道で結んでいる南海電気鉄道株式会社を訪問し、まちづくりの一環として「なんばスカイオ」の特色や、「あきない」と「ものづくり」をつなぐ仕掛けなどについてビジネス現場からの視点を学ぶことを目的とした。

2. 取り組み内容

日常生活で馴染みのある近隣型商店街と異なり、大都市には同業種の専門店が集積する商店街がある。あきないの中心である大阪ミ



ナミの、日本橋筋電気街、はきはきタウン、黒門市場、道具屋筋商店街など「あきない」の動態を観察し産地との関わりを考察する。

その後、あきないの大阪と産地である和歌山をつなぐ南海電気鉄道株式会社で、①なんばのまちづくりの歴史、②なんばのまちづくり推進戦略、③なんばスカイオの概要、④「まちづくり」と「あきない」をつなげて売れる仕掛けについてビジネス現場からの視点で学んだ。その後、ワークショップで学んだことの纏めとグループ発表で意見交換をし、議論を深めていった。

3. 課題と今後の展開

大都市の商業集積との「つながり」を活かして販路開拓やイノベーションの源泉となるアイデア発見などが必要となった。学修を通じて、それらの現場に触れ課題を認識したので、今後解決策をデザインする力を身につけ地域活性へ繋げていきたいと考えている。

4. 学生/地域の声

今回、商業集積している大阪ミナミのまち歩きと、なんばで南海電鉄さんがターミナル再開発の仕掛け作りに寄与されていることもわかり、わかやまでのモノづくり（産地）にも大いにかかわりがあるのだなとわかった。

地域との共同による QOL プロモーション演習活動（平成 29 年度）

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】海南市、紀の川市、紀美野町、
九度山町、高野町、広川町、古
座川町など

【担当教員】西川禎一（生活科学部教授）
所 道彦（生活科学部教授）

【協 働 先】和歌山社会経済研究所



1. 事業概要・目的

大阪市立大学では、食品・居住・福祉の 3 つの分野で複合的な教育資源を有する生活科学部の学生が、生活者の QOL（生活の質）を高めるため、地域ニーズの把握を行い、地域とのパートナーシップのもと問題解決にあたる体験型実践演習を、継続的に実施している。

和歌山県下でも、この活動を実施しており、これにより学生が地域の課題を知り、解決し地域の方との交流を図ることを目的としている。

2. 取り組み内容

2017 年度も、和歌山県内各地に出向き、特産品の梅、桃、柿、温州みかん、ハッサクのほか、米やソバ、ニンニク、ジ

ャガイ
モ、ミョ
ウガ、菊
菜などの



各種農作物の播種や植付け、摘蕾・摘果や間引き、収穫などの援農活動、収穫祭や地域のイベントなどのお手伝いを通じて、地域に密着し、地域の方との交流を図った。

3. 課題と今後の展開

学生が、地域に出向き地域の生活者の方とともに植付けから収穫までといった一連のプロセスを体験する学習であり、場所と日程等の調整が課題となり、特に 2017 年度は天候が不安定で、日程調整が困難であったが、土日なども活用し、前向きに実施している。生活問題の実態を把握し、地域の生活者と問題意識を共有しながら、QOL 向上につながる活動を検討して改善策を立案・実行するための演習なので、地域活性化にも反映できるよう、今後も継続的に展開していきたい。



4. 学生/地域の声

現地の地域の方とお付き合いの中で、いろいろと苦労話や生活の知恵を知ることができ貴重な体験を得た。また地域の皆様に感謝するとともに、他大学の学生さんとも交流ができ、つながりもできとてもいい経験になった。

平成 29 年度 和歌山大学 岸和田サテライトでの講義

地域・文化（アゴラセミナー I B）の開講準備

【学 校 名】大阪府立大学

【活動地域】岸和田市

【担当教員】西田 正宏（代表教員）

【協 働 先】和歌山大学

1. 事業概要・目的

和歌山県を中心にその周辺地域には、多くの文化資源が残っている。城は言うまでもなく、各地に伝わる伝承を記した碑や、寺社もそうであろう。名所図会のような文献に残されたこともまた「文化資源」と呼べるかもしれない。これら「文化資源」がはたして、その地域を再生するために有効にはたらくであろうか。あるいは有効にはたらかせるためには、どのような方法が考えられるであろうか。以上のような視点から、さまざまな文化資源を取り上げ、その内実を知るとともに、その有効性について考察する。

2. 取り組み内容

「紀の国大学協議会単位互換制度」に資する科目として、本講義を開講しまし



た。講義は、複数教員によるオムニバス形式の集中講義とし、和歌山大学の先生方にも、講義を行って頂き、本学、和歌山大学、大阪市立大学の学生が受講した。

＜講義日程・内容＞

【8月9日（水）】

1・2. ガイダンス

（大阪府立大学 教授・西田 正宏）

3・4. 万葉の勝地としての和歌山を見直す

（和歌山大学 教授・菊川 恵三）

【8月10日（木）】

1・2. 「まち」をあるくということ
（前川 真行）

3・4. 道成寺をめぐる説話と伝承
（和歌山大学 准教授・大橋 直義）

【8月11日（金・祝）】

1・2. 『紀伊国名所図会』は地域再生に有効な視点を提供するか
（西田 正宏）

3・4. 蟻通神社と和歌をめぐる伝承について
（大阪府立大学 教授・青木 賜鶴子）

【8月24日（木）】

1・2・3. 学生による発表とまとめ
（西田 正宏）

※15 コマ中、10 コマを市民に開放。

3. 課題と今後の展開

運動会を活用した、沖縄伝統料理の復活をめざすものや、江戸時代の「くらわんか船」という歴史的文化資源を復活させ、淀川沿岸の活性化と企業の参加を想定したものなどが、細かな具体のことにも眼が行き届いており、発表としてもすぐれていた。総じて、自らの関わる地域について、新たな視点を導入しての地域活性化につながるイベントについて考えられており、おおむねアゴラセミナーとしての一定の基準に達した発表がなされた。

平成 29 年度 「地域実践演習」

(竹堆肥を使った有機栽培実験を通した体感型演習)

【学 校 名】大阪府立大学

【活動地域】河内長野市

【担当教員】東條 元昭

【協 働 先】河内長野市、烏帽子里山保全クラブ、かわばたファーム



1. 事業概要・目的

放棄竹林は大阪府下でも林地や農耕地の荒廃、生物多様性の低下、景観劣化等を招いている。河内長野市内の竹林でボランティア（烏帽子里山保全クラブ）および同市役所と協力して竹材をパウダー状の粉から、堆肥に変え、野菜栽培に利用する取組を行なってきた。

また、竹堆肥化マニュアルの作成、体験学習の実施により、「環境をきれいにする分解微生物」について一般市民の関心が高いことが判明したので、大学教育としては、この関心に応えるためのリーダー育成を目標とする。

2. 取り組み内容

堆肥作りと有機栽培のための温室作業を、9月から12月に実施。11月の授業では米国人農学研究者から野菜の栽培法の指導を受けた。また、11月に河内長野市内の竹伐採現場での粉碎作業やトマト栽培農家での栽培作業を体験。11月に2回にわたって米国人農学研究者と各学生が有機農業などについて英語によるディスカッションを行った。



3. 課題と今後の展開

農業技術等について、基礎知識の提供をより充実させるため、日本語の講義形式も取り入れたい。英語授業が準備不足で、専門用語がわからないことがあり、状況によって、簡単な英語の参考書を使用したり、英語のレポートの提出を求めたい。また、学生間のコミュニケーションが不足しているので、野菜栽培やアイデアの賞を設け、互選するなどし、コミュニケーションのきっかけを作りたい。

4. 学生/地域の声

- ・今後も、竹の利用（竹を使ったモノづくりをテーマに学祭に出展する等）について考えたい。
- ・竹の有効利用法（堆肥、竹炭）を知ったので、他の植物に応用してみたい。
- ・有機栽培に興味を持ったので、もっと深く調べて、研究につなげたい。
- ・地域のイベントに、積極的に参加しようと思う。

平成 29 年度 「地域実践演習」

(大学生だからできる障がい者スポーツ支援活動の実践)

【学 校 名】大阪府立大学

【活動地域】大阪市、松原市

【担当教員】片岡 正教（主担当）

奥田 邦晴

【協 働 先】大阪市、松原市他



学生は審判補助、会場誘導、体験会の実施等を担当し、障がい者の方、その関係者、メディア関係者等との交流から多くの点で勉強となることがあった。

11 月 25 日(土)[松原市体育館]

＜松原市ボッチャ大会の運営支援＞：
午前中は競技用のコート作成、対戦相手の確定とポスターの作成、コート別の用具の準備にあたり、午後は実際の試合等の運営を支援した。

12 月 13 日(水)[B3 棟 313 教室]：

上記授業の振り返り、各自の感想・意見の取りまとめと発表、授業のまとめ等を行った。

1. 事業概要・目的

障がい者のスポーツ参加は、心身面における効果の期待はもちろん、選手の identity の確立すなわち自己の存在の再確認の場や社会参加への機会の増大という、より activity の高い生活を営んでいく上で不可欠なものである。今、2020 年東京パラリンピックに向け、競技力の強化や若手選手の発掘・育成が喫緊の課題となっている。“大阪からパラリンピック選手を”をスローガンに掲げ、府立大学のそれぞれの学類の特性を活かした多角的な見地から、種々の障がい者スポーツに参加し、スポーツを通した障がい者支援活動の実態を経験する。

2. 取り組み内容

10 月 4 日(水)[中百舌鳥 B3 棟 313 教室]

オリエンテーションと障がい者スポーツに関する講義

10 月 7 日(土)[大阪市舞洲障がい者スポーツセンター]＜アミティフェスティバル 2017 の運営支援＞：

10 月 18 日(水)[B3 棟 313 教室]:ボッチャの概要説明と試合ルール等の講義

11 月 11、12 日(土、日)[府民共済スーパーアリーナ]＜日本ボッチャ選手権大会の運営支援＞：

3. 課題と今後の展開

障がい者スポーツに実際接し、障がい者に対する学生自身の考えを変化させる良い機会となり、地域支援の重要性への気づきもあった。次年度への課題は、羽曳野キャンパスと異なり、ボッチャの用具等が中百舌鳥キャンパスに無く、体験を行うための準備等に時間・手間を要する点に工夫が必要と感じた。今年度は 5 名ほどボッチャ審判の有資格者の学生もおり、それらの学生が初心者の学生を指導する等、学生間の交流の内容が広がり、お互いに良い効果があった。

■ 摂南大学

すさみ町における過疎地域活性化支援プロジェクト

【学 校 名】 摂南大学

【活動地域】 西牟婁郡すさみ町

【担当教員】 浅野 英一 (外国語学部外国語
学科／教授)

【協 働 先】 すさみ町役場 (地域未来課)

和歌山県 (移住定住推進課)

和歌山県西牟婁郡振興局 (企画産業課)

など

本学が所在する寝屋川市とすさみ町は約 200km の距離があり、バスで片道 3 時間を要することから、現地に赴くのはイベント本番とその前後数日となる。そのため、各イベントの 1 か月前からすさみ町役場の担当者と学生は綿密な打ち合わせを実施し、各行事が円滑に進むよう努めている。

1. 事業概要・目的

すさみ町の過疎地域 (中山間地の佐本地区) をフィールドとして、少子高齢化と過疎化を題材に、大学生が実施可能なプロジェクトを設定し、様々な支援活動や実証活動を行っている。

2. 取り組み内容

すさみ町で開催される大きなイベント (イノブータン王国建国祭、ビルフィッシュトーナメント、すさみケンケンかつお祭り、いきいきふれ愛祭りなど) の運営に参画した。また、若者の人口減少により開催が途絶えていた伝統的行事のお盆の佐本川柱松祭りを 2011 年に復活させ、毎年開催している。このほか

「なんでもやる隊」による、佐本地区の独居老人宅訪問、廃校となった小学校での青少年育成キャンプなどを実施した。

すさみ町で

は、おおむね 2 か月に 1 回の割合で本学学生が参画するイベントが行われている。



3. 課題と今後の展開

すさみ町には豊かな自然や歴史文化など、都市にはない多くの魅力 (資源) がある。その資源を有効活用し、都市と田舎の「ヒト・モノ・カネ」がうまく循環する仕組みを作ることにより、お互いが共生するケースに発展させることを本プロジェクトの最終的な目標としている。そのため、今後もすさみ町で実施されるさまざまな行事の実施運営や佐本地区で特産化をめざすにんにくプロジェクトにかかわりながら、すさみ町の活性化の一翼を担いたいと考えている。

4. 学生/地域の声

本プロジェクトをとおして、先読みする力やリスクマネジメント力、責任感を養うことができた。



由良町における地域ブランド開発プロジェクト

【学 校 名】摂南大学

【活動地域】日高郡由良町

【担当教員】鶴坂 貴恵（経営学部経営情報
学科／教授）

【協 働 先】由良町役場、一般社団法人
白崎観光プラットフォーム

1. 事業概要・目的

本学が「大学のふるさと協定」を締結している由良町の地域資源を使った商品等を開発し、販売につなげます。このことにより、由良町の交流人口を増加させるとともに、地域経済活性化の一助とすることをプロジェクトの目的としている。

そして本年度は和歌山県由良町を一人でも多くの方に知ってもらい、体験してもらうことを最終目標とし、様々な取り組みを行ってきた。

2. 取り組み内容

①海の学校に「摂南ブース」を出店

由良町の白崎海洋公園で開催された「Marine Expo'17～うみの学校 海と日本プロジェクト～」において、由良町の産品を使って学生が考案した「しらす丼セット」や「由良みかんシロップかき氷」を販売し、由良の食材を通じて由良を体感いただける取り組みを実施した。



②由良町のゆるキャラ「ゆらの助」を活用した、由良町の知名度向上

「ゆらの助」を「ゆるキャラグランプリ」で優勝させる（多くの投票を



獲得する)ため、ゆらの助を摂南大学の職員として出向させたほか、摂南大学や由良町で行われるイベントに積極的に参加してもらい、SNS で活動の様子を配信した。

③若者目線で由良町の観光パンフレットを作成

学生目線で由良町の魅力を見出すとともに、外国人観光客にも観光地の候補としてもらうことを目的とした。由良町の現地調査や旅行に関するアンケート調査をもとに、外国人観光客向けに多言語化されたパンフレット作成に取り組んでいる。

3. 課題と今後の展開

由良町の地域資源を活用し、さらなる地域ブランドの開発や地域経済活性化に取り組む。

また、観光パンフレットの多言語化に向けた外国人観光客調査の過程で、言語の壁などの課題が出てきた。そこで、今後は由良町のことを複数の外国語で紹介した動画や文章を用意し、由良町の観光キャンペーンイベントを兼ねた調査を実施できればと考えている。

温泉熱を利用したエネルギー供給事業の可能性についての研究

【学 校 名】和歌山工業高等専門学校

【活動地域】東牟婁郡白浜町

【担当教員】鶴巻峰夫

(環境都市工学科/教授)

【協 働 先】白浜試錐株式会社、八千代エンジニアリング株式会社、和歌山大学



1. 事業概要・目的

循環型社会、低炭素社会構築のため再生可能・未利用エネルギーの活用が各所で行われている。本研究では 70～95℃程度の温水で利用可能なバイナリー発電の利用として注目されている温泉熱について白浜町の白浜温泉を源泉よる事業可能性の検討を行った。

2. 取り組み内容

温泉の熱源である地中熱を利用した発電としては地熱により生成された高温高压蒸気を活用し大規模に行われる地熱発電がある。一方、今回適用するバイナリー発電は 70～95℃の低温の熱水を利用する方法で小型・パッケージ化された装置によって比較的容易に導入できる利点がある。

検討対象は、単に装置の導入事業ではなく、新たな揚水による温泉枯渇、排水による水域汚染の発生を防止するための温水融通事業も含めた複層的な事業として企画した。

検討は、経済産業省の助成事業として技術コンサルタントである八千代エンジニアリングが大枠の設計を行った。

源泉は地元企業である白浜試錐が所有する源泉を活用することとした。また、同社は源泉所有会社と各温泉利用施設の温泉水配送管の管理を行っていることから、温水融通システムの提案が可能となった。和歌山高専では、源泉の調査として湯量調査、水質分析としてイオンクロマトグラフによるイオン濃度分析と地域産業連関表構築と地域経済への波及効果の検討を行った。

3. 課題と今後の展開

調査は技術的な面と啓発的な面の 2 方面の項目を実施しており温泉組合、源泉所有会社の団体代表者による先進事例の見学なども行った。

ただし、十分に事業が認識されている状況には達していないので、各関係機関を調整して事業化に向けて継続的な活動が必要である。

4. 学生/地域の声

学生は、卒研の一環として参加して、共同作業としての源泉の調査とイオンクロマトグラフによる分析を行った。特に調査は源泉の噴出の状況に感嘆の声を挙げていた。

つなげよう つながろう みんなで子育てフェスタ

【学 校 名】和歌山信愛女子短期大学

【活動地域】和歌山市

【担当教員】森下順子（きょう育の和センター副センター長・准教授）

【協 働 先】和歌山市、和歌山大学



1. 事業概要・目的

2015年度より200名参加規模で2年開催した「ふたご・みつご大交流会」から引き続き、3年目となる2017年度は、参加者を多胎児家族に限定せずに実施された。子育て当事者・支援者のネットワークである「共育の輪」会員と信愛、学生が共に力を合わせ、地域志向の子育て支援イベントとして企画された。多彩なプログラムを通じて、参加者がイベントを共同・共有することにより、新たな情報交換と地域交流の場所となることを目的としている。

2. 取り組み内容



「共育の輪」会員のそれぞれの活動分野を活かしたプログラムとして、人形劇・わかやまのぬり絵・紙飛行機とばし・森の宝さがし・大型絵本の読みきかせ等のイベントが、充実の内容で実施された。また、「子育ておしゃべり会」として保護者同士の座談会。「子育て情報パネル展示コーナー」では様々な団体による地域の子

育て支援活動が掲示され、いずれも地域交流や地域情報発信のきっかけとなった。また、信愛学生による運営サポートは多岐にわたり、安全なイベントの進行や子ども達の見守り、遊戯のサポートを担当毎に行い、子育て世代に貢献。無事にイベントを終了させる原動力となった。

3. 課題と今後の展開

2018年度以降もイベントを継続して行うために、運営スタッフの連携と主体性が課題となる。企画・準備活動を円滑に行うためのシステムと、相互の理解を強め、協力体制を強化していく。また、参加人数の上限や参加対象についてどのような枠組みが今後の展開として最適であるかを、「共育の輪」会議を通じて検討していく。

4. 学生/地域の声

(参加保護者から学生スタッフへ)

笑顔で子どもに接してくれて嬉しかった。／大切な未来の宝を育てるお仕事について活躍されることを願っている。／積極的に、遊びに誘ってくださってとてもうれしい。

海の家 運営プロジェクト

【学 校 名】 関西大学

【活動地域】 田辺市

【担当教員】 安田忠典

(人間健康学部准教授)

【協 働 先】 田辺観光協会、
南紀みらい株式会社

1. 事業概要・目的

2017 年でオープンから 13 年目を迎える田辺扇ヶ浜海水浴場は、関西圏の家族連れを中心に人気のある「ファミリービーチ」である。田辺観光協会が運営を委託する海の家では、運営者である南紀みらい株式会社が関西大学と連携して運営を行っている。大学生の目線で創意工夫を凝らした海の家の運営を行い、またイベント等を実施することで、ファミリー層のみならず、年齢層の若い海水浴客を呼び込むきっかけづくりを目的としている。

2. 取り組み内容

関西大学はハワイアンテイストの海の家を運営し、今までの海の家に無かったメニューを提供している。イベントの面では運営する学生が在籍する人間健康学部という特色を活かし有資格者である学生によるエアロビクス体験、ビーチサッカー大会の企画・運営等を行っている。



若者の海水浴離れが進む中、海に入らずとも海に足を運んでもらう仕掛けを学生のスキルを活かした形で行っている。

また学生自らが仕入れや売り上げ管理を行うことで学生の経験値の向上に繋げている。

3. 課題と今後の展開

大学生が海の家を運営することで今までにない活気が生まれ、このように新しい

取り組みも増えている。また大学



生が運営を行っていることから、メディアへの露出も多く、宣伝効果にも繋がっており継続的に事業を進めたい。

特に若者の海水浴離れが進むなか、流行を捉えた大学生の新しい、若い発想で、いかに海に足を運んでもらうか、産官学連携した形で常に新しい仕掛けを行っていきたい。

■近畿大学

高野町と近畿大学の交流・連携による地域産業・観光振興

【学 校 名】近畿大学

【活動地域】高野町

【担当教員】木戸啓仁

(近畿大学生物理工学部教授

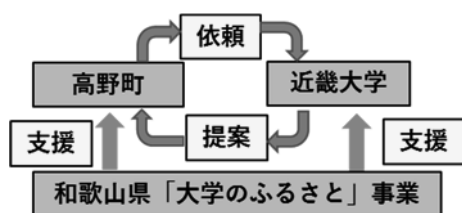
研究支援・推進センター長)

【協 働 先】和歌山県、高野町



1. 事業概要・目的

伊都郡高野町と近畿大学は、2017年2月に和歌山県「大学のふるさと」事業の趣旨に賛同し、和歌山県庁において「大学のふるさと」協定を締結した。本事業締結の趣旨は、弘法大使（空海）が修禪の道場として開いたことで有名な霊峰・高野山を中心とした高野町の伝説ある歴史と近畿大学の知見を生かして、町の産業、観光振興と地域間交流を中心とした交流・連携を図ることである。



2. 取り組み内容

高野町、高野町地域おこし協力隊、近畿大学（経営学部、文芸学部、生物理工学部、農学部）が参加。

主な取組内容（予定）は、

①未利用地域資源（食・農林水産・観光

など）調査と活用提案

②空き家（廃校舎）などの遊休施設調査と活用提案

③定住促進調査

④観光資源のブラッシュアップ化

- ・「観光客の期待価値と高野町の提供価値の間にズレはあるのか」の検討
- ・魅力ある店舗展開ができていないか検討
- ・地元食品企業との連携による新商品開発検討
- ・パンフレット作成、観光案内版のデザインリニューアル検討
- ・滞在時間の延長につながる旅行企画作りの検討
- ・モニターツアーの実施検討

3. 課題と今後の展開

今後、取り組み内容のうち、初年度より予定されている項目を実施する。特に、高野町地域おこし協力隊と連携しながら、町内の現状と課題を抽出する。その際、各学部学生が積極的に参加し、地域と交流し、若者の視点から現状把握、提案も行う。

■ その他（企業、自治体、団体等）

中野 BC 株式会社×和歌山大学との「梅商品」PR イベントの取組

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】海南市

【担当教員】田代優秋

(COC+推進室特任助教)

【協 働 先】中野 BC 株式会社

1. 事業概要・目的

和歌山県の特産品である「梅」を100%使用している地元に根ざした中野 BC 株式会社では、地域製品の消費拡大と地域産業の発展のために、6 月に「梅酒楽しむ会」、1 月には「日本酒 BAR」を毎年開催している。

近年、若者のお酒離れが進む中で、地域産業につながっている梅酒への理解を深め、若者層全体への訴求をはかるために、和歌山大学学生 15 名と 6 月イベントでブース出展を行った。



2. 取り組み内容

複数回の学内でのワークショップ、会社訪問などを行い、成年チームがテイクアウト梅酒、未成年チームが梅ジュレップを使った梅カクテルの企画であった。梅酒や梅ジュレップを牛乳やオレンジジュースなど身近にある飲み物で割ることで、気軽に楽しめる企画となっていた。

さらに、ここに参加した学生のうち 5 名と新たに 2 名が加わり 7 名が加わり、毎年 12 月 1 日に新酒の梅酒として発売される「梅酒ヌーボー」を大学構内で PR するイベントを企画、実施した。ここでは、大学生協の協力を得て、梅に関する「謎解きゲーム」を行った。約 30 名の学生の参加があり、ゲーム参加者への参加特典として梅酒ヌーボーを試飲できるものとしていた。



3. 課題と今後の展開

これまで中野 BC 株式会社とは、不定期に単発的な取組があった。今後、地元特産品に理解を持って、地元企業に定着、活躍する人材を企業とともに育成するモデル的な事業として、次年度以降も連携事業を展開していく。

田辺市×和歌山大学と連携した若者の UIJ ターン事業の構築

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】田辺市

【担当教員】田代優秋

(COC+推進室特任助教)

【協 働 先】田辺市

1. 事業概要・目的

県内への若者の定着を進める上で、自治体との連携・協力は必要不可欠となる。しかしながら、連携協定を締結している県下の自治体と具体的な若者の UIJ ターンに直結するような取組はなされておらず、特に紀南地域では大学生の定着が実績が乏しい現状にある。

そこで、連携協定を締結している紀南地域の自治体である田辺市とともに、2018 年度からの実施を目標として新しい連携事業の構築に向けて取組を行ってきた。

2. 取り組み内容

事業構築にあたり、現状の認識と課題共有として、和歌山大学に複数の職員を招いて、大学生と交流する「座談会」を6月12-13日に開催した。両日合わせて、延べ学生14名、職員11名、教員5名、延べ合計30名の参加協力があった。こ



こでは、県外入学者が約7割を占める本学生にとって「田辺市はそもそも知られていない」「定着のためには知って、来て、暮らしみる」といった丁寧な段階を経ていく必要があると認識された。

その後、田辺市の紹介、地方自治体の深刻な地域課題への取組として11月9日、わかやま未来学Bの講義において、田辺市長である真砂市長に特別講義を頂いた。



学生からは「大学誘致、企業誘致など何かありますか？」との質問に、「大学はなくても大学生がいるまち！を目指したい。具体的な施策を模索中である」とのコメントがあった。

3. 課題と今後の展開

2018 年度より本学と田辺市との連携事業「大学生みらいサポート事業」として、事業構築された。具体的には、まずは大学生に地方でも面白いこと、活躍できる場所があることを知ってもらうために、定期的なセミナー等を開催することとなった。

開校！たなべ大学～田辺のまち×大学生のトライアルショップ～

【学 校 名】紀の国大学

【活動地域】田辺市

【担当教員】田代優秋

(COC+推進室特任助教)

【協 働 先】主催：たなべ大学実行委員会、
後援：田辺市、紀の国大学

1. 事業概要・目的

和歌山県南部を代表する田辺市には、魅力ある飲食店、物販店、シェア物件（ゲストハウス・シェアハウス・シェアショップなど）が存在する一方で、近年の人口減少等の影響により空き店舗や空き倉庫などもある。こうした街の物件をお借りして、将来的な起業やナリワイづくりを目指す近畿地方を中心とした全国の大学生と協働してトライアルショップを開店する取組である。

この取組を通じて、大学のない田辺市でも「若者が挑戦できる街・たなべ」をPRすることで、志ある人々が集い、協働しあい、街のあちこちで新しい可能性が生まれ、地域全体が発展することを目標としている。



2. 取り組み内容

2017年5月、田辺市でチャレンジショップの開店する学生を募集し、多数の大

学から問い合わせがあったが、7月に4大学7チームの出店が確定した（和歌山大学、龍谷大学、青山学院大学、京都外国語大学）。

9月1～7日（メイン開催日9/2、9/3）に古着店、朝カフェ、カフェバー、喫茶店、お化け屋敷、写真館、お茶教室が開店した。出店学生は店舗使用料として1万円を支払い、1週間でその分の収益を出すことを目指して、各自が事業プランを構築した。その結果、ほとんどのチームが利益を出せたとのことであった。



3. 課題と今後の展開

この取組は、店舗の協力、街の受け入れ体制がなければ成立しない。今後は、地域側に過度な負担のない持続的な運営体制の構築が望まれる。

【3】平成 28 年度の取り組み

■和歌山大学

6 次産業化の実践による農林水産業活性化プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】紀の川市

【担当教員】木村亮介(クロスカル教育機構
教養・協働教育部門講師)

【COC+推進室】大坪史人・友渕貴之

【協 働 先】農業生産法人有限会社柑香園
摂南大学



1. 事業概要・目的

和歌山県は、果実生産が盛んな日本でも有数のフルーツ大国である。この特色を生かし、農業者による生産・加工・販売の一体化や、農業と第 2 次産業・第 3 次産業の融合等により、新たな付加価値を地域内で創出することを目的とした 6 次産業化が推進されている。現場での実践型インターンシップ等を通じて、商品・サービスの開発およびその過程での PDCA を回しデータの収集や分析、商品の改良などができる人材をめざす。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナー（1 年次後期開講）を通じ、関連する講義が 3 回と現場実習の導入としてスタートアップセミナーを実施した。実務家教員による講義では、和歌山県の農業の特徴や地域課題解決のため地域が一体となった農業のあり方、6 次産業化をプロデュースする過程などを学んだ。



現場実習では、加工場で柿のドライフルーツを生産する様子、選果場では柑橘類の出荷と選別の様子を見学した。最後に生産圃場でみかんの収穫体験をし、食味調査を行い普段スーパーマーケットで売られているみかんと比較をし、感想を伝えた。

3. 課題と今後の展開

次年度は、「6 次産業化に取り組む企業の柑橘類を使った商品マーケティング企画」についてグループワークを行い現状分析・課題検討・提案していく。その後、6 次産業化を実践している現場にインターンシップを行い、受け入れ先で検討されている商品・サービス・イベント開発のサポートをすることで、農産物の生産から管理、収穫そして商品化されていくまでの流れを学ぶ。

4. 学生/地域の声

普段は、実習を行うことが少ないためいい経験になった。特に、出荷間近のみかんは普段食べているものと味の濃さがまったく違い驚いた。こういった農家さんの想いや努力を伝えていくことも付加価値をつける方法だと思った。

家庭用品イノベーションプロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】海南省

【担当教員】藤田和史（経済学部准教授）

【COC+推進室】富永哲雄・大坪史人

【協 働 先】大阪市立大学、海南省、海南特
産家庭用品協同組合、高田耕造
商店

1. 事業概要・目的

海南省を中心とする野上谷は、かつて地域資源の一つであるシュロの産地として賑わっていた。シュロの活用の一つとして、タワシの生産、さらにそれから発展した家庭用品の生産が盛んになった。現在、家庭用品産業は、和歌山県の特色ある地場産業となっている。このプロジェクトでは家庭用品産業について学ぶことを通じて、地場産業の振興をプロセス・プロダクト両面のイノベーションから促進できる人材を育成することが目標である。また、産業振興に政策から携わる人材（行政職員・団体職員）も育成する。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナー（1年次後期開講）を通じ、関連する講義が2回と現場実習の導入としてスタートアップセミナーを実施した。このスタートアップセミナーは、大阪市立大学と共同で実施しており、家庭用品生産工場（海南省）と都市部の消費財地（堺市）を見学した（参加者総数 16

名）。現場実習では、海南省において、シュロの加工を行う工場タワシを生産する様子、堺市では、「堺刃物ミュージアム」を見学し、理解を深めた。

実務家教員による講義では、「家庭用品をプロデュースする」と題し、海南省が家庭日用品企業が集積するに至った歴史的背景、家庭日用品企業が抱える課題とともに、行政としての支援のあり方などを学んだ。

3. 課題と今後の展開

次年度は、「家庭日用品の現在・過去・未来を探ろう」についてグループワークを行い現状分析・課題検討・提案していく。その後、家庭日用品の関連企業にインターンシップを行い、実践的な商品技術開発のノウハウの一端を学ぶ。



4. 学生/地域の声

普段は出来ないような体験をすることが出来た。授業内で教わったことを実際に見ることができ、とてもよかった。このセミナーをきっかけに他の地域についても知ろうと思った。

地域づくり戦略構想プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】紀の川市、田辺市、上富田町

【担当教員】大浦由美（観光学部教授）

【COC+推進室】大坪史人・友渕貴之

【協 働 先】和歌山県立医科大学、
和歌山県、紀の川市、田辺市、
上富田町、JA 紀の里

1. 事業概要・目的

和歌山県は、温暖な気候に恵まれ古くから移住が盛んな先進地でした。その和歌山の魅力向上に資する県内農山漁村の地域資源を活かした「新たな価値創造活動」に貢献する人材を、実務家教員の現場感覚を活かした講義と実践、地域での実践型インターンシップ等を通じて育成する。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナー（1 年次後期開講）を通じ、関連する講義が 3 回と観光学部の 2 年生を対象に和歌山県が主催する「水土里のむら機能再生支援事業」に参画した。また、和歌山県が大阪市で行った「和歌山丸ごと田舎体験紹介フェア」、JA 紀の里が運営する農産物直売所「めっけもん広場」の見学を行った。

実務家教員による講義では、地域づくりの現状や課題を学び、和歌山県立医科大学の上野教授からは、地域医療



のあり方について講義を受けた。

和歌山丸ごと田舎体験紹介フェアでは、観光学部の LIP（Local Internship Program）に参加した学生が広川町の応援に駆けつけ、一緒になって和歌山県を PR した。



3. 課題と今後の展開

次年度は、県下の集落での地域づくりワークショップに参加し、地域づくり戦略構想策定支援を通じて、地域の課題抽出、分析手法、ファシリテート能力の基礎を習得する。地域づくりワークショップの結果から、地域の現状に即したビジネスプラン等を地域の人と一緒に考える。

4. 学生/地域の声

JA 紀の里「めっけもん広場」を見学した学生からは、和歌山県内に住んでいて有名な直売所だとは、知っていたけど来るのは初めてだった。様々な野菜が安い値段で売られていてびっくりしたし、とても新鮮そうだった。

自立・地域共生推進プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【担当教員】西川一弘(クロスカル教育機構
生涯学習部門准教授)

【COC+推進室】田代優秋

【協 働 先】bookcafe kuju 店主 柴田 哲
弥氏、NPO 法人共育学舎 代
表 三枝 孝之氏、新宮市議会
議員 並河 哲次氏

1. 事業概要・目的

和歌山県南部(南紀熊野地域)は半島であるがゆえの諸課題(進学に伴う若年層の流出、仕事を求めての県外流出など)とともに豊かな自然資源も有しています。このプロジェクトでは、こうした諸課題を多角的視点で捉え直し、豊かな自然資源を活用できる自立的な能力を持った人材を育成することを目的としている。この捉え直しは「当たり前風景から価値を生み出すこと」、すなわち、地域の再発見と人的ネットワークの積み上げプロセスが小さい仕事を生み出すことにつながると考えている。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナー(1年次後期開講)を通じ、関連する講義が3回と現場実習の導入としてスタートアップセミナーを実施した。ま



りも、紀南地域を知ることが大切ということで、地に赴き、地域の方と本音で語る場を設けた。具体的には、廃校舎をリノベーションしたブックカフェの店主、若者の自立支援活動を行うNPO 法人、そうした活動を政治を通じて応援する移住者で市議会議員、コーヒースタンドを開業しようとする20歳の若者と夜通しじっくり話をした。



3. 課題と今後の展開

参加学生にとっては同世代の若者が田舎で自分の能力で「起業(生きていこう)」する様子はとても刺激的だった。これまでの講義等では、成功した人の話を後日談や失敗談として聞くことが多く「教訓」のように聞こえ勝ち。同世代で、今まさに起業しようとする若者を、今の自分と重ねたり、自分ならば何ができるか考える「等身大の先生」となっていた。特に、新規創業にあたり「焦り」「不安」などで眠れないなど、ありのままを聞けることで疑似体験できるようであった。今後、こうした「等身大の先生」を増やし、色々な分野で起業する方の話を聞くことがよい教材になると思われる。

地域資源を生かした生業づくりとまちづくりプロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】九度山町

【担当教員】宮川智子

(システム工学部教授)

【COC+推進室】富永哲雄・大坪史人

【協 働 先】大阪府立大学、摂南大学

九度山町

1. 事業概要・目的

九度山町は、高野山へと連なる山並みと紀ノ川や丹生川による水資源に恵まれた環境に位置し、町内には、地域の人々により維持管理が行われる歴史的町並みや地域資源が多く見られる。九度山町をフィールドとして自然および歴史環境と親しみながら、地域での暮らしと生活環境および地域資源を生かしたまちづくりについて考える機会となり、インターンシップ等を通して、地域の特性を生かした生業づくりやまちづくりについて考え実践できる人材を育成することが本プロジェクトの主な目的である。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナー（1年次後期開講）を通じ、スタートアップセミナーとして、九度山町の歴史的建造物や町並み見学会を行った。九度山町に後援いただき、世界遺産の一部である宗教法人慈尊院や、地域の



人々により維持管理が行われている歴史的民家をみてまわった。



3 大学の合同でまち歩きを、総勢 33 名の学生がすることで、九度山町でのまちづくりについて考える機会となった。

3. 課題と今後の展開

次年度は、九度山町での実践を通じて、ワークショップを 3 回行う予定である。具体的なテーマとしては、1) 地域資源の発見と歴史的環境を学ぶ、2) 観光ルートづくり、3) 商売をはじめよう、を予定し、学びを深めていく。その後、行政、観光事業者、公共機関等へのインターンシップを予定している。

4. 学生/地域の声

慈尊院内の建物や塀、世界遺産の町石道や卒塔婆など、全ての建造物に歴史的・文化的価値が秘められており、観光資源として価値のある地域資源だということを知った。さらに慈尊院の多宝塔は耐震設計を取り入れた解体修理を行っていることを知り、県の文化財として保全して行こうという取り組みが見受けられた。九度山町というエリア全てが、重要かつ十分な地域資源であると気づくことができた。

地方都市のまちなか再生プロジェクト

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】和歌山市

【担当教員】永瀬節治（観光学部/准教授）

【COC+推進室】友渕貴之・富永哲雄

【協 働 先】和歌山市、大阪市立大学
摂南大学

1. 事業概要・目的

平野の少ない和歌山県では、もともと沿岸河口部にコンパクトな市街地が形成され、紀伊半島の経済・文化を支えてきた。しかし、全国の地方都市と同様、モータリゼーションの進展とともに居住環境が郊外化し、中心市街地（まちなか）の空間・社会の空洞化が進んでいる。

本プロジェクトでは、時代のニーズと地方都市の可能性を捉え、地域に潜在する空間・コミュニティ・生業・歴史文化等のストックを統合的に活かしながら、魅力と持続力のあるまちなかの再生に実践的に取り組める人材を育成する。

2. 取り組み内容

本年度は、地域協働セミナー（主として1年次後期対象）を通じ、関連する講義が3回と現場実習の導入としてスタートアップセミナーを実施した。実務家教員による講義では、和歌山市を中心に空き家対策や中心市街地の再生などを学んだ。現場実習では、



3 大学合同で総勢 29 名が参加した。

和歌山市内のリノベーション物件 7 ヶ所をまわった。（コースは、水辺座→ミートビル→ハウスブルーネ→シェアキッチン PLUG→石窯ポポロ・almo→ゲストハウス RICO）各オーナーにお話を伺うことでそれまで有効活用されていなかった建物（遊休不動産）を活用し、建物とエリアの価値を向上させる取り組みを行っている事例に触れることが出来た。

3. 課題と今後の展開

次年度は、和歌山市におけるフィールドワークをとおして、地域資源した具体的な提案を行っていく予定である。①南海電鉄和歌山市駅まちづくりプロジェクト（和歌山市駅周辺）：まちづくりワークショップ、市駅前通り等での社会実験など。②ポポロハスマーケット等のまちなかイベント（ぶらくり丁周辺）への出店などを予定している。

4. 学生/地域の声

改装前の写真と実際の現場を見て、ちょっと手を加えるだけで空間がこんなに変わるというのが驚きだった。自分でもしてみたいと思った。

■大阪市立大学

紀伊半島の地域再興の学修（地域実践演習Ⅲ：和歌山市でスタディツアーを実施）

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】和歌山市

【担当教員】水内俊雄（文学部教授）

祖田亮次（文学部准教授）

【協 働 先】和歌山大学、摂南大学

和歌山県、和歌山市



1. 事業概要・目的

大阪市立大学では、COC 事業の一環で地域に入り込むアクティブラーニング形式の実践演習プログラムを実施している。これを COC+事業として、和歌山県のさまざまな地域課題に接することにより、日本の地方が抱える問題のエッセンスを掴むことを主題とした紀伊半島の地域再興の学修を行った。今回、県庁所在地である和歌山市の再興について、学生が地域に入る体験学習を行うことにより、課題を識る力、まちづくりについて考える力を養うことを目的とした。

2. 取り組み内容

受講生と企画し 3 つのテーマでスタディツアーを実施した。

- 1)七曲市場～寂れゆくことのない場所
所～「和歌山の台所」と呼ばれる市場の現状を知るため、商店街や通行人の方の聞き取りを行った。
- 2)インバウンドが生む地域再興の可能性
インバウンドツーリストから見た和歌山市の観光イメージを知るため、和歌山市駅前で、外国人観光客へ直撃インタビューで意見を聞いた。

3)かつての企業城下町の今は？

企業城下町の変化と現状を知り、地域のあり方を考えるため、企業城下町であった松江地区内外を歩き、地域の商店の経営者らに地域の変化について話を聞いた。



七曲市場



インバウンド
(リノベーション)



企業城下町（松江地区）

3. 課題と今後の展開

3 つのテーマで、和歌山市のスタディツアーを実施し、いわゆる地方が抱える代表的な課題を現場に接して識ることができた。一方、和歌山市ならではの良さがあり、今後取り組みにより活性化が見込めることも知ることができた。次年度は、さらに将来に向け深掘した展開を図りたい。

4. 学生/地域の声

今回のスタディツアーを通じて、新しい地域コミュニティの誕生も期待できると感じた。また、地域の方の発想力や行動力に触れることができ、楽しく、また和歌山に行きたいと思った。国内外のバックパッカーと地域の方の交流に驚いた。

紀伊半島の地域再興の学修（地域実践演習Ⅲ：御坊・日高スタディツアーを実施）

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】御坊市、日高町、日高川町

【担当教員】水内俊雄（文学部教授）

祖田亮次（文学部准教授）

【協 働 先】御坊市、日高川町

1. 事業概要・目的

大阪市立大学で取り組んでいる副専攻の導入科目「地域実践演習」の「地域福利」分野では、COC+事業への展開として、紀伊半島の地域再興をテーマとした学修を行った。今回は、日高川河口小中心都市・御坊と、その流域である日高郡で、2回の日帰りフィールドワークを実施することにより、課題を識る力、まちづくりについて考える力を養うことを目的とした。

2. 取り組み内容

「すごい人に出会い、場所の力を体感する」をテーマに、学生が主体となり、地元新聞などを情報源として、事前調査を行い、現地調査の企画を練りました。そして、注目した下記の3つの分野で活躍されている人たちに聞き取りを行って、地域の現状を識り、地域活性の現場を体感する機会を得た。

①農林業分野に関しては、花卉栽

培、果樹栽培、林業を営んでいる人たちが、②教育の分野では、子どもたちに学びの場を設けている「地域のおとうさん」や元気な保育の達人たち、



③「御博」という地域の魅力を体験するイベントの場での人材発掘や、地域の繋がり構築を企図してきた人たちに、聞き取り調査を行った。

3. 課題と今後の展開

人口減少によって都市－農村関係が不安化するなか、地域を活性化するために、Uターン者の「受け皿」の創出、Iターン者自身によるIターン者の誘致、地域における異業種／世代間の関係構築、新発想の田舎暮らしの実践など、様々な活動がなされていることがわかった。COC+事業としては、人材や資源のバラエティや活力が富んだ、創意あふれる元気な地域は大変魅力であり、今後も継続して「元気」の秘訣を探っていく予定である。

4. 学生/地域の声

・「和歌山8割・都会2割のライフ／ワーク・バランス」という新発想の暮らしをしているUターン農家の考えに触れ、目から鱗が落ちた。

・地域内外の方と積極的に交流の場を設け、繋がりにより、Iターン者、Uターン者を呼びよせる働きが地域活性にとっても大切だと感じた。

防災フィールドワーク（地域実践演習Ⅱ：御坊市でスタディツアーを実施）

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】御坊市

【担当教員】生田英輔（生活科学部講師）

三田村宗樹（理学部教授）

【協 働 先】和歌山大学、御坊市

1. 事業概要・目的

COC+事業の「わかやま未来学副専攻」のスタートアップセミナーと連動し、大阪市立大学のCR副専攻の地域実践演習Ⅱの「いのちを守る都市づくり-コミュニティ防災実践-」の学修テーマで、御坊市でまち歩きを通して、スタディツアーを実施した。コミュニティ防災の基礎について実践を通じて学ぶことにより、地域の防災リーダーとして活躍できる能力の取得を目的とする。

2. 取り組み内容

御坊市防災対策課協力のもと、和歌山大学と合同で、南海トラフ巨大地震による津波浸水や震動災害に想定される地域の災害リスクや災害対策を知るため御坊市と美浜町で、まち歩きを行い、様々な発見を得ることができました。あまり高い山が見当たらない地域なので、高台を避難場所とする工事を見ることができた。



また、過去の津波や水害に関する碑がいくつかあり、先人たちが残してくれた教訓があるということを知り、さらに、古い街並みを歩きましたが、御坊市という街の歴史を垣間見ることができた。

3. 課題と今後の展開

避難施設の運営上の課題や、避難経路や避難場所の住民への周知徹底や、また、古い街並みに関しては、建物やブロック塀の倒壊危険性が指摘された。振り返り会で、若年層の定着についての提案や、近隣の災害での共助対策強化のアイデアなどの前向きな意見もでた。また「防災と観光」という新しいテーマも出てきて、今後の展開へ繋げていきたいと考える。

4. 学生/地域の声

津波避難タワーに登れたことがとても印象に残り、いい経験を得た。また御坊市様の防災に対する取り組みで、防災マップを作られたり、きめ細かい活動がたいへん勉強になった。地域防災について、まち歩きをして、考えるいい経験になった。

ものづくりと都市のあきないをつなげる学修

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】海南市、堺市、大阪市

【担当教員】長尾謙吉（経済学部教授）

【協 働 先】和歌山大学、海南市（高田耕造商店）、堺市（刃物ミュージアム）、大阪市（道頓堀商店街）

1. 事業概要・目的

「ものづくり（製造業）」と「あきない（商業）」は、日本経済を担ってきた代表的な経済活動である。

大阪市大の副専攻導入科目の「地域実践演習Ⅰ」で、1年次・2年次の学生とともに「ものづくり」と「あきない」をつなげる地域活性化の学修を「わかやま未来学副専攻」のスタートアップセミナーと共同して、和歌山大学の教員の授業の受講生と共に実施した。

2. 取り組み内容

「ものづくり」の集積を知るため、産業が集積する「地場産業」として、今回海南市と堺市を訪問した。海南市では、家庭日用品の生産が盛んで、束子（たわし）をはじめとする「水回り関連商品」で高いシェアを誇り、その代表的な企業を訪問した。また堺市では、600年の歴史を有する刃物産地で、特に「質が命」となる業務



用包丁の生産に特徴があることを堺刃物ミュージアムの見学で知り、最後は大都市圏では、さまざまな経済活動が高密度に集積している現場を見学した。

3. 課題と今後の展開

高度成長の拡大期は「造れば売れる」や「並べれば売れる」の時代から、21世紀の日本では、ものづくり系の集積が「縮小時代」を迎え、販路開拓、サービス業務への拡張、イノベーションの源泉となるアイデア発見など、大都市の商業集積との「つながり」が求められるようになってきており、今回の学修を通じて、それらの現場に触れ課題を認識したので、今後解決策をデザインする力を身につけ地域活性へ繋げていきたいと考える。

4. 学生/地域の声

ものづくりの現場に触れ、なぜ高価な束子（たわし）が受入れられるのかが、時価（じか）ではなく、直（じか）が鍵であることがわかった。

ものづくりと都市のあきないにはつながる流通のようなものがあるように思った。

地域との共同による QOL プロモーション演習活動

【学 校 名】大阪市立大学

【活動地域】広川町、日高川町、紀の川市、
九度山町、海南市、高野町、
紀美野町、古座川町など

【担当教員】西川禎一（生活科学部教授）

【協 働 先】和歌山社会経済研究所他



1. 事業目的・概要

大阪市立大学では、食品・居住・福祉の 3 つの分野で複合的な教育資源を有する生活科学部の学生が、生活者の QOL（生活の質）を高めるため、地域ニーズの把握を行い、地域とのパートナーシップのもと問題解決にあたる体験型実践演習を、継続的に実施している。

和歌山県下でも、この活動を実施しており、これにより学生が地域の課題を知り、解決し地域の方との交流を図ることを目的としている。

2. 事業の内容

平成 28 年度も、和歌山県下のいろいろな市町村の農場等に出向き、和歌



山県での特産品としての甘夏、ウメ、桃、イチゴ、ブラックベリー、柿、栗、温州みかんの収穫、こんにゃく、ニンニク、サツマイモの植付け、さらに自然農法による酒米づくり、田植えなどの援農活動を通じて、地域に密着し、地域の方との交流を図りつた。

3. 課題と今後の展開

学生が、地域に出向き地域の生活者の方とともに植付けから収穫までといった一連のプロセスを体験する学習であり、場所と日程等の調整が課題となりますが、土日なども活用し、前向きに実施している。生活問題の実態を把握し、地域の生活者と問題意識を共有しながら、QOL 向上につながる活動を検討して改善策を立案・実行するための演習なので、地域活性化にも反映できるよう、今後も継続的に展開していきたいと考えている。

4. 学生/地域の声

現地に出向いて、地域の方の生活を体験でき、とても貴重な経験を得ることができました。また太陽光を浴び、自然の環境で働き、その後、ミカンなど育てたものをいただくと、数値では計り知れない美味しさを味わうこともできました。地域の皆様に感謝するとともに、他大学の学生さんとも交流できたこともいい経験になった。



平成 29 年度 和歌山大学 岸和田サテライトでの講義

地域・文化（アゴラセミナー I B）の開講準備

<講義予定>

【学 校 名】大阪府立大学

【活動地域】岸和田市

【担当教員】西田 正宏（代表教員）

【協 働 先】和歌山大学

【8月9日（水）】

1. ガイドンス

（大阪府立大学 教授・西田 正宏）

2. 和歌山周辺をめぐっての学生との

対話（大阪府立大学 准教授・前川

真行、教授・西田 正宏）

3・4. 万葉の勝地としての和歌山を見

直す（和歌山大学 教授・菊川 恵三）

【8月10日（木）】

1・2. 「まち」をあるくということ

（前川 真行）

3・4. 道成寺をめぐる説話と伝承

（和歌山大学 准教授・大橋 直義）

【8月11日（金・祝）】

1・2. 『紀伊国名所図会』は地域再生に

有効な視点を提供するか

（西田 正宏）

3・4. 蟻通神社と和歌をめぐる伝承につ

いて（大阪府立大学 教授・青木

賜鶴子）

【8月24日（木）】

1・2・3. 学生による発表とまとめ

（西田 正宏）

※15 コマ中、10 コマを市民に開放する。

3. 今後の展開

本科目とは別に、単位互換科目として本学の科目（「地域再生概論」「地域実践演習」）を提供する。なお、本科目は和歌山大学では、「わかやま未来学」の教養科目「文化遺産と地域再生」として、開講される。

1. 事業概要・目的

和歌山県を中心にその周辺地域（泉佐野市や岸和田市など）には、多くの文化資源が残っている。城は言うまでもなく、各地に伝わる伝承を記した碑や、寺社もそうであろう。名所図会のような文献に残されたこともまた「文化資源」と呼べるかもしれない。これら「文化資源」がはたして、その地域を再生するために有効にはたらくであろうか。あるいは有効にはたらかせるためには、どのような方法が考えられるであろうか。以上のような視点から、さまざまな文化資源を取り上げ、その内実を知るとともに、その有効性について考察する。

2. 取り組み内容

「紀の国大学協議会単位互換制度」に資する科目として、本講義を開講いたします。講義は、複数教員によるオムニバス形式の集中講義とし、本学教員だけでなく、和歌山大学の先生方にも、講義を行っていただく予定である。

■ 摂南大学

副専攻科目「地域と私」における由良町でのフィールドワーク

【学 校 名】 摂南大学

【活動地域】 由良町

【担当教員】 鶴坂 貴恵

(経営学部経営情報学科教授)

【協 働 先】 由良町

1. 事業目的・概要

本取り組みは、2016 年度から開設した「ソーシャル・イノベーション副専攻課程」の必修科目「地域と私」(1 年次配当) の授業内で実施したものである。本科目では、地域課題を 4 領域からとらえ、テーマごとに学習した上で現地に赴きます。由良町とは「大学のふるさと協定」を締結し、さまざまな事業で協働している。履修学生が過疎地域である由良町の実情を肌で感じ、課題の発見と解決策の立案につなげることが目的である。

2. 事業の内容

学生は、副専攻課程に設けている 4 領域(「地域経済・経営」「地域観光・防災」「地域政策・文化」「地域医療」)の中から、由良町内で調査したい領域をグループ単位で選択した。フィールドワークの前には由良町関係者の講演により町の現状や課題を認識し、事前学習を通して理解を深めた。当日は 4 領域ごとに、町の観光名所、空き



家、高齢者施設、小学校などの視察や関係者の講話の聴講、ヒアリングを実施した。実施後は学びや気づきをまとめてプレゼンテーションを行い、履修学生のほか、由良町の関係者や教職員が聴講した。

3. 課題と今後の展開

フィールドワークは日帰りのため、現地での滞在時間が短いという学生の意見が多くあった。これを踏まえ、短時間でも密度の濃いワークができるようなコンテンツの見直しを行う。またこの体験をさらに応用、発展できるように 2 年次配当科目として、由良町を題材にした PBL (Project-Based Learning) を展開していく。

4. 学生の声

- ・実際に自分の目で由良町を見て、都会との大きなギャップに驚いた。
- ・観光地や自然、豊富な食材に恵まれているのに人が訪れないことを改善するためには、知名度の向上や交通の整備が必要だと感じた。

■和歌山工業高等専門学校

災害時に役立つ製品の製作 ～高齢者に優しく～（卒業研究）

【学校名】和歌山工業高等専門学校

【活動地域】御坊市

【担当教員】古金谷圭三
(知能機械工学科准教授)

【協働先】丸紀木材工業株式会社
(県内企業)

採用した。このヒノキなどの材料の提供、及びこれらの木材加工の作業には、地元企業である丸紀木材工業株式会社様のご協力をいただくことが出来た。

1. 事業概要・目的

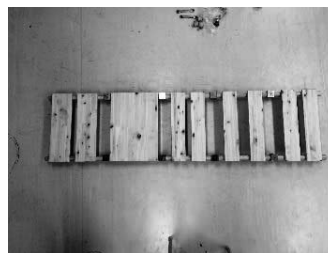
和歌山工業高等専門学校では、学生にこれまで習得した専門的な知識を土台にして、地域の特徴（地勢、産業、特産品等）や諸問題に関連するテーマを中心に卒業研究の研究課題を選択させ、担当教員の指導を受けながら研究を行っている。

2. 取り組み内容

平成 28 年度の卒業研究の取り組みの一つに、災害時の救急病院などで、運び込まれた被災者や高齢者へ横になるためのベッドを提供するという複合機能を有した椅子を考案・製作を行なった。

通常時は「椅子」として使用し、災害時などいざというときに「ストレッチャー」に変形・利用できるように設計されている。「ストレッチャー」変形後に、キャスターの代わりに脚を付け、2 台を 1 セットとすれば、高さは低いが「ベッド」としても利用可能となる。

製作に使用する材料として地元の産品を使うことを念頭に置き、今回は抗菌効果が有るとされる「紀州ヒノキ」を



ストレッチャーとしての形状



椅子としての形状

3. 課題と今後の展開

今回、地元企業の協力・連携により学生の研究を進めることができた。今後も学生に対し、地元企業の協力を得た研究活動を行う機会を与えられるよう、またそれにより県内の産業の魅力を伝えることを考えている。

4. 学生/地域の声

普段、県内地元企業と直接接することが少ない私達学生にとって、地元企業を理解する良い機会・経験となりました。特に、細部にまでこだわりを持って、ものづくりに取り組んでいる企業の方の姿を直接見ることができたことが、良かった。

ふたご・みつご大交流会

【学 校 名】和歌山信愛女子短期大学

【活動地域】和歌山市

【担当教員】森下順子（きょう育の和センター副センター長・准教授）

【協 働 先】和歌山市、和歌山大学、
和歌山県立医科大学

1. 事業概要・目的

子育て当事者・支援者のネットワークである子育て・子育てネットワーク「共育の輪」会員と本学、本学学生が共に子育て支援について考え、情報を共有することにより、子育て支援のイベントを企画する。平成 28 年度は昨年度に引き続き、多胎児育児支援として、「ふたご・みつご大交流会」を企画・実施した。計画段階より学生スタッフが参加したことで、多くの学生ボランティア参加を見込む。

2. 取り組み内容

事前の会議では、「共育の輪」会員らがそれぞれ



の所属する団体ごとに得意な分野を担当すると共に、学生ボランティアの代表者からイベントで行う工作プログラムの提案について、多胎児育児経験者よりアドバイスなどが行われた。交流会当日は、ふたごの親子、子育て支援関係者（「共育の輪」会員を含む）の皆さん、和歌山市の保健師、和歌山大学生 3 名・和歌山県立医科大学生 4 名・和歌山信愛女子短期大学生



68 名の学生ボランティアを含め、総勢 200 名が集い、温かい雰囲気的笑顔あふれる楽しい会となった。高校生のふたごを育てている保護者の公演、「共育の輪」会員による人形劇など、親子で楽しめるプログラムを通じて、学生達は子育て支援関係者の想いや、ふたごの子育ての実際を知ることができた。

3. 課題と今後の展開

2015 年度・2016 年度と 2 年連続ふたご・みつご大交流会を実施し、次年度の子育て・子育てネットワーク「共育の輪」企画は未定となっている。参加者や学生からは、この取り組みを継続して欲しいとの声がある一方、多胎児以外の親子を対象とした子育て支援を求める「共育の輪」会員の意見もあり、企画会議で検討する。

4. 学生/地域の声

企画会議から参加し、当日はふたごの子どもや保護者の方々と共に時間を過ごし、子育てについて理解を深めることができた。このような交流会を通して、これからも地域とつながりながら学んでいきたい。

■ 関西大学

田辺市での環境教育・環境学習事業～熊野本宮子どもエコツアー～

【学 校 名】 関西大学

【活動地域】 田辺市本宮町、大塔村

【担当教員】 安田忠典、谷所慶

(人間健康学部准教授)

【COC+推進室】 田代優秋、大坪史人

【協 働 先】 和歌山大学、和歌山県、田辺市、
堺市(大阪府)、NPO 熊野本宮、
田辺市熊野ツーリズムビューロ
ー、JA 紀南とみさと女性会



くの川で水遊びを行った。

2 日目は、林業体験にキャンプファイヤー、3 日目は、熊野古道のトレッキングと八咫の火祭参加、4 日目に振り返りを行い閉校した。大塔地区では、「野外活動特別演習」のフィールドワークとして行い、JA とみさと女性会のメンバーからこんにやくづくりを体験させてもらい、カヌー体験の実習を行った。

1. 事業概要・目的

堺市と平成 26 年度に友好都市提携を結んだ和歌山県田辺市の本宮地区をフィールドに、“健全な青少年の育成と環境保全”をテーマにした、市民(子ども)×学生×地域住民が交流する新しいスタイルの地域連携型の体験学習を実施している。「熊野本宮子どもエコツアー」として、5 年前から堺市の小学 5～6 年生を対象に 30 名を受け入れ、学生が児童と一緒に林業体験や地元の祭の手伝いを行う中で、環境学習事業を展開している。また、本年度は田辺市の大塔地区でも、エコツアーのフィールド開拓を行った。

2. 取り組み内容

熊野本宮子どもエコツアーは、3 泊 4 日で行われ、関西大学人間健康学部の学生 31 名、堺市の小学生 30 名、協働機関等から 12

1 日目は、テントの設営と近



3. 課題と今後の展開

本宮熊野エコツアーは 5 年経過した。堺市では人気もあり、年数回、固定メンバーを連れて紀南地域でキャンプを行う、エコ倶楽部化を検討している。その中で、紀の国大学が 1 回分を担うなどの可能性を検討していく。

4. 学生/地域の声

地域の人からは毎年、継続的に関西大学の学生と子どもたちが八咫の火祭りで踊ってくれるので、とても感謝している。また、エコツアーに児童を参加させている保護者からも行政機関や関西大学が主催であるため、安心して子どもを参加させることができると好評をいただいている。

地域づくりワークショップへの大学生の参加

【学 校 名】和歌山大学

【活動地域】紀の川市、田辺市、上富田町

【担当教員】大浦由美（観光学部教授）

【COC+推進室】大坪史人、友渕貴之

【協 働 先】和歌山県、紀の川市、田辺市、
上富田町



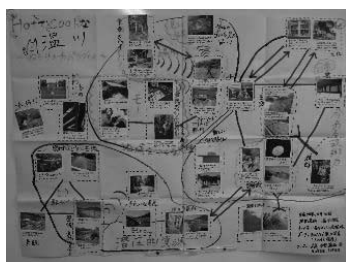
1. 事業概要・目的

水土里のむら機能創出支援事業は、和歌山県が平成 17 年度から開始した事業で 10 年の歴史を持つ。

人口減少・過疎化にともなう集落の合意形成機能や共同活動といったむら機能の低下が要因となり、農村環境の保全や文化の継承など多様な課題が生じてきているなかで和歌山県は地域住民自らが、地域を知り、考え、行動するためのワークショップを通じた機運づくりが大変有効であると考え、住民の話し合いや地域資源の掘り起こし、さらには現在の活動のフォローアップなどを通じて地域の未来を示すビジョンづくりを行っている。

2. 取り組み内容

住民の方の声から地域の課題や資源を評価し、写真により地域資源の現状を把握・共有し、イラストアイデアにより地域が今後



向かうべき具体的な実行計画の提案を行う。第一回 WS: ワークショップを起点とした地域活性化の事例を学ぶ。また、問題意識の地図を作成し問題意識の共有化、現地調査を行う。現地調査: 現地で地域を元気にする角度から地域資源の写真を撮影する。第二回 WS: 撮影された写真を広げ、類似するものをまとめ地域を表現した資源写真地図を作成する。第三回: イラストアイデア地図を作成し、取り組みの優先度、必要性を参加者で共有し、実行計画表を作成し、今後の地域活動の青写真を作成する。

3. 課題と今後の展開

次年度は、和歌山大学の地域実主演習Ⅱにおいて、協働し、学生に地域づくりのために必要な地域の課題抽出、分析手法、ファシリテート能力の基礎を学んでもらう。

4. 学生/地域の声

地域の方からは、WS で計画を立ててからが、スタートなので継続的活動に参加していただくと地域活性化につながるという意見をいただいた。

インカレコンペを通じた地域と大学連携

【学 校 名】和歌山大学、摂南大学

【活動地域】橋本市

【担当教員】和歌山大学：金子泰純（システム工学部教授）、藤田和史（経済学部准教授）

摂南大学：田井義人（経済学部准教授）

【COC+推進室】富永哲雄、大坪史人

【協 働 先】橋本市、紀陽銀行

1. 事業概要・目的

橋本市は 2016 年度から「高野山麓はしもとインターカレッジ・コンペティション（以下、インカレ）」と称し、学生向けのコンペティションを開催した。インカレは、地域内だけでは解決できない課題の解決に向けて、大学の持つ専門的知識や学生の視点を活用しながら地域活性化を図ることを目的にしている。

2. 取り組み内容

2016 年度は、6 チームが参加しており、うち 5 チームが COC+事業の連携校である。表は、参加大学の一覧と発表プランの

	大学名	学部	タイトル
1	和歌山大学	経済学部	『橋本市の現状から見た課題と興校利用への提案』
2	和歌山大学	経済学部	『移住定住のための情報発信の方法について』
3	和歌山大学	システム工学部	『橋本市に家族で留学してみませんか？～Welcome to Hashimoto～』
4	近畿大学	経営学部	『小さな 7 分の 1 を大きな 7 分の 1 へ』
5	高野山大学	-	『文化がそよぐ橋本を夢見る』
6	摂南大学	経済学部	『橋本市ブランド発見に向けての BARMAP 作成』

タイトルである。この発表プランは、4 つのテーマからの選択性としており、①地場産業の振興と



人材確保、②農林業の振興、③移住・定住の促進、④交流人口の増加から一つを選択し、活動を行った。2016 年 7 月から募集を行い、8 月末に参加チームの決定を行った。9 月上旬から 10 月にかけて各チームがフィールドワークを行い 11

月にビジネスレポートを提出して



もらった上で事前審査を行い、12 月に発表会を行った。また紀陽銀行からは、紀陽銀行の地域活性化の取り組みについて学生たち向けに講演があった。

3. 課題と今後の展開

次年度は、和歌山大学の副専攻プログラム、地域自主演習Ⅱへの導入を予定としている。また、インカレの紀の国大学連携校への拡大のため、準備段階を早める方策を取る事にした。そして今年度実施したインカレでの受賞案の実用化も予定している。

県内企業経営者と和歌山大学生との交流会

【学 校 名】和歌山大学

【担当教員】COC+推進室

【協 働 先】和歌山県経営者協会

1. 事業概要・目的

和歌山県経営者協会に所属する企業経営者で構成される「経営のコツを気づく会」の会員に和歌山大学の取り組みを紹介し、学生と交流してもらった。県内企業経営者には COC+事業への理解、協力を依頼し、学生には県内企業をより多く知ってもらうことを目的として和歌山大学見学会および「経営者×大学生大交流会」を開催した。

2. 開催内容

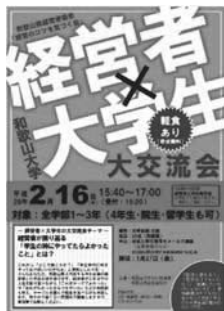
和歌山県経営者協会と和歌山大学COC+推進室との共催で和歌山大学見学会及び企業経営者と和歌山大学生との交流会が開催された。これには県内企業経営者 22 名、学生 21 名、教職員 14 名、和歌山県や関連団体の来賓 10 名の計 67 名が参加した。和歌山大学見学会においては、観光学部棟のデジタルドームシアターや協働教育の一環として学生教育の自主学習を支援するクリエ（協働教育センター）や附属図書館を見学した。また、観光学部の学生たちが学内施設や各学部の紹介を行い、COC+推進室長からは紀の国大学の事業紹介を行った。

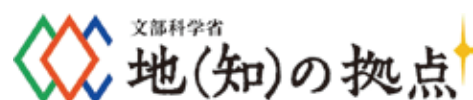


引き続き、学生との交流を目的に「経営者×大学生大交流会」を開催し、各学部の1年生から3年生、大学院生も参加し、経営者が振り返る「学生のときにやっていたらよかったこととは？」をテーマに5～6名に分かれ、和気あいあいと交流を行った。

3. 学生/経営者たちの声

普段は、学生たちが県内企業を知る機会や特に企業経営者たちと出会う機会が少ないため学生たちにとってよい経験となった。経営者たちにとっても日頃は今の大学生たちがどのように学んでいるかを知るよい機会となった。見学会、交流会の終了後のアンケートでは企業経営者からは「日頃見学できないところを見ることが出来てよかった」、「学生が伸び伸び学んでいることを知ることができた」、「みなさんしっかりしている」、「学生さんの案内がよかった。」等の感想があり、また学生からは「もう少し交流の時間を取ってほしい」、「これから学ぶべきことを知り、やる気がさらに出た」等の感想があり、互いに満足度の高い充実したイベントとなった。





地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)
わかやまの未来を切り拓く若者を育む“紀の国大学”の構築
平成27～平成29年度中間事業報告書

発	行	平成 30 年 3 月
編	集	紀の国大学協議会
問い合わせ先		和歌山大学COC+推進室
		〒640-8510 和歌山県和歌山市栄谷930
		TEL 073-457-7147
		FAX 073-457-8020
		http:// kinokuni-u.jp/